明治三十八年度

人は何故に社會的ならざる可らざるか

個人主義と社會主義

先刻からいろ〳〵皆さんの御話を伺ひましたが、此の個人主義と云ふ事と社會主義と云ふ事とについて、よく御わかりになつた樣な、又御わかりになつて居ない樣な點も見受けられます、或は到底解釋の出來ぬものとしておいでの方もあれば、充分了解して居ると云ふ樣な方もおありの樣ですが、私はさやうに簡單なものではないと思ひます、のみならず斯かる簡單な考へがあなた方の修養を妨げて居るかとも見えるのです、私は先達てから四月に新らしく入學せられた學生達が、此の事について疑問をいだき其の解釋に苦んで居られると云ふ事を聞き及びましたが是は最もな事でしよう、夫れにつけても彼等の迷ひを解きて同化すること、及びあなた方が彼等に封する態度が大切であります。其の說き方もいろ〳〵ありましようが、是は容易に解すべきものでなきのみか、其の說き方の如何によりては、自分を妨げ又人にも妨げをすることとなるのです、故に甚だ大切な事でありますから、皆さんが深く御研究なさることを切望致します。

抑も此の問題があなた方の心中に起るのは、第一は團體の爲に盡さうとすれば個人の修養に缺けてくることを免かれず、又個人の爲にしやうとすれば勢ひ團體の爲に盡されぬ事となるによつてゞしよう、第二は此の學校にては頻りに個人の修養卽ちSelf-Culture又自奮自修と云ふ事を奬勵すると共に、團體の事をやかましく云ひますから、此處でわからなくなると云ふ事。第三はあなた方が今日種々の高尙なる學說を聞けば、個人主義、社會主義、自愛主義、他愛主義或は無政府主義、帝國主義、等いろ〳〵反對の考へがあつて、孰れも道理と聞えて個人主義と社會主義とは孰れが善きかわからなくなる樣である、之れは早晩あなた方が社會の事に當る時に起る問題であります。實に十九世紀は個人主義と社會主義との衝突の時代である、之は政治家にも宗教家にも教育家にも皆ある事です、十八世紀の終りに於て極端なる個人主義卽ち專制主義を倒し、アメリカなどは獨立主義を立てゝ立憲政體となり個人の權利を重んずる樣になりました、然るに十九世紀となりて全く反對の影響起り、政治の競爭個人の權利と云ふもの盛んになり、又社會の勢力薄らぎて個人が權利を得る事となりました。

此を以て我が權利、我が自由、獨立自營、獨立自尊等の語が

盛んになつてアングロサキソンは非常に隆昌になりました、此の結果として、學理の應用と云ふ事が盛んに行はれ大製造場、大資本家と云ふもの起り、少數なる個人が權利を恣にする事となり、政府も社會も此の抜扈を抑へる事が出來ず、個人個人の競爭の結果社會は非常に苦む樣になり、其の反動として社會主義と云ふものが盛んに起りまして、其の尤も極端なものを共產主義と稱へます、其の論ずる所によれば、個人が財產をもつは惡しき事故是非之を奪ひ取つて全く政府のものとし、鐵道も鑛山も皆政府の事業とし個人の活動を許さない樣にと云ふ主義でつまり平等論でありますから、金持ちを搾らへない、此を以て殆んど個人性を埋沒するのである、個人性が社會性にのまれ易きことは恰かも水の上の泡の如く、或は大洋の波の如きもので、結局彼等は個人が財產を持ち土地を私有することを許さないのです。そこでずつと、人間の歷史を考へて見ますると、いつも個人と社會との間に衝突しいろ／＼なる變遷があります、故に歷史は社會と個人との衝突、及び調和の變化であると云つても宜しいのです。斯く政治界經濟界に於ても、個人主義と社會主義とは何時も調和せず衝突して居るかの如き有樣です、さうして個人の弱き國は國民が何も彼も政府に依賴する者にて露西亞にては、團體が個人を支配し、團體が個人を左右して居ます、之に反してアメリカの如く個人の强き所は、個人の弱き國よりも多くの部分に於て、自ら自分の事をして行くのです、夫れで非常に個人の權利の發達したる國もあれば團體の盛んなる國もありて、其の爲にいろ／＼の騷動も出來て居るのであります、今一つは共產主義、無政府黨の如きものも、やはり悔る可らざる勢力があるものですから、社會には常に此の二つの爭つて居る現象があります、是れ等の事實から考へても此の問題の容易ならぬ事がわかりましよう、又之れは昔から凡ての人が苦んで居る事であります、夫れで此の社會と個人との關係を明らかにすると云ふ事は隨分困難な事であるけれども、亦吾々の主義を定むる上に尤も大切な事であります。斯くの如く複雜なる問題故よほど研究しなければなりません、之がわからぬ爲に苦み又妨げも起るのです、さて之を明らかにするに困難な事は語の不充分なる事で殊に我が國には外國にて已に用ひられて居る樣な適當な詞が未だ發達して居りません。

　此の問題につきて先づ第一の誤解は、個人と社會と云ふものが別々に相離れて存在するものと考へることであります、併し斯くの如く離してしまつた所の純粹の個人と云ふものは、實際在り得べき者ではありません、之は到底吾々の經驗し得ない事です、又個人を除きたる社會も決して在り得べき筈はありませ

ん。そこで吾々が詞に使つて居る所の個人とか社會とか云ふものゝ實體はヒューマンライフ卽ち人生であります、其の人生と云ふものは個人と云ふ樣な狀態に於ても亦社會と云ふ樣な狀態に於ても考へられますけれども、此の社會と云ふ現象と個人と云ふ現象とはひきはなして存在すべきものではありません、實際は一つの者を內より見ると外より見たるとの差別であつて、全く種類を異にするものが二つ其處に實在するのではありません。米國の或る著述家が申しました詞に「道德的に云へば私は社會の一部であるが、我が身體と云ふ方より云へば、唯だ世界の動物の一部分に過ぎない」と云つて居ます、之は實に動かす可らざる眞理でしよう、吾々の如何なる發明、如何なる說、如何なる主義と雖も、一つとして自身一個の所有と云ふべきものはありません、皆祖先以來の遺傳により、或は師より或は友より授けられ、若くは暗示によりて得たるものに過ぎないので此の社會を離れて個人があるか否やと云ふに、おしつめて見れば吾々の考へ、吾々の道德的身體は、皆社會より與へられたるものである、故に健全なる個人主義と云ふものはやはり健全なる社會主義と同一轍に歸するものにて、社會と云ふものを幾ら考へて見ても決して個人とかけ離れたるものではありません。此を以て今云ふ個人の修養を勉めると云ふ事、又眞に偉大なるものになると云ふ意味に於て社會の爲め國の爲めと云ふ事に關係せずして爲さんとするは到底爲し能ふ可らざる事、かたはなる事、强くなくして弱き事である、併し其の社會とか他人とか云ふ事を考ふると同時に、其の社會の爲め人の爲めにすると云ふ事の中には自分の爲めにすること、なるので、人の爲めに爲すべき事をして我が爲めにならぬ事は決してありません、如何に高慢らしく利己的に目的を達するが如く見えたる人なりとも、少しにても進みめが見えるならば、其のたすけは必ず社會より得たるものでないものはありません、夫れを只己の力により自分のみでして居ると思ふて居る人は自ら斯いて居る者です。夫れ故個人主義と社會主義と云ふものが昔から衝突して居るのは、斯かる考へが一方に偏して全體を見ることの出來ぬ弊でありましよう、又社會と個人と云ふものを反對に云ひ現はす所の詞かの如く考へるによるのです、然らば如何に考へるによるかと云ふ事を分析して見なければなりません。

抑々 Social と云ふ詞の意味を分析して見ますると、人々の使つて居る所に鳥渡三つ程の差があります、大體を云へば個人的と云ふ事に反對して居ると考へらるゝ事です。

第一 Social と云ふ事を最も廣義に云へば Humanity 所謂社會全體に關する所の人道卽ち凡ての人間を一つのものと見て互

に關係あるものと見る事、委しく云へば共同生活を爲し其の間に一つの同情が通じて居て、互に思ひあひ助けあひて全體と一諸に成長發達するものと見るのです。此の人間は全體が一つとなつて進み行き生活して居るものと解する意味に於ても、決して社會と個人とが相反するものであるとは云はれません。

第二の意味は今日の如く互ひに思ふ事を話し合ひ、自分の云ふ事を人に聞いてもらひ、又夫れにつきて人が如何に考ふるかと云ふ事を聞き、直接に考へを交換すること卽ち交際すると云ふ事は、つまり Social である、此の意味に於てもやはり個人と云ふものがあつて人として現はれて居るのです。

第三の意義は互ひに人の利益を計る事、卽ち全體の幸福を進めて行くと云ふ事、例へば櫻楓會全體の幸福利益安寧を計る事なれば、やはり道德的と云ふ事になるのです、此の意義に從へば、罪惡に陷るとか慾を恣にするとか云ふことを、非社會的と考へられ、惡と云ふ事罪を犯すと云ふ事と非社會的と云ふ事は同じ事であると云ふ風になるのです。

以上三つほどに分類することが出來ますが、其の他猶ほいろいろの意味にとる人がありましよう、兎も角今日社會と云ふ事と個人と云ふ事を考へる時に、何か其の中に衝突するものがある如く考へる事が一つと、夫れに反して個人を發達せしむれば社會は自ら善くなる、個人は卽ち社會の基であるので、個人的に事をするのは野蠻時代であるけれども、段々と發達すれば文明の時代となると云ふ考へがあります。又吾々の心には社會的及び個人的の孰れかになるべき二つの要素があるので此の芽が段々はたらいて行くのであらうと云ふ考へが澤山おこるのですけれども、亦斯かる考へがまちがつた觀念を與へる事も少なくありません。是によつて社會の發達を妨げ、名々の品性を修養する事を妨害する點も多いのです、故に私は其の考へを分析分類して吾々は之につきて如何に考ふべきものであるかを說かねばなりません。

區別の種類

(1)純正個人主義

此の主義は殆んど全く個人を基とする說でありまして、社會を第二に置き、又た社會を偶然の結果と見なすのです、故に個人を全く別々に離れたるものとして考へ、社會現象も個人の活動に外ならぬのである、凡て人生に於ける出來事は悉く個人から出たもの、又た個人は全く不羈獨立のものであると考へて、卽ち個人を人事の源泉とし、社會の唯一の基礎とするのであります、つまり此の說によれば、社會と云ふものが個人より別に

あるのではなくて、悉く個人から來て居るのである、故に個人が尤も大切なるものであると云ふ論です。此の說は今日の進化論にも適合せず又近世哲學の思想にもあはないものであるけれども、今日の思想界から全く跡を絕つものでもありません、併し此の說の宜しくない事は先日の說明によつても知られましよう。

(2)二元論

是は社會と個人との間に區劃を立てるのであります、卽ち之は個人の勢力彼は社會の勢力と云ふべき二つの力があるものとする說です。此の說もやはり社會と個人と相離れて居るものと見、又社會を組織して居る所の個人を孤立して居るものとする考へですが、是も哲學的に考へて見ますると前の說よりも、餘り進步した考へではありません。何となれば個人を孤立したもの、又互に餘り相關係せぬものとして居るからです。併し此の說によりますると、不明瞭ながらも社會の力と云ふものを認めて居ます、之が第一の純正個人主義と違ふ所です、さて此の說のまちがひの起る原因は、自分を自分の原因と考へ、又自分を自分と云ふ小世界の創造者と考へる事です。そこで此の說によると人生には二つの異りたる力、卽ち Social Power と Individual Power との二勢力が常に戰つて居るものとし、個人に重きを置くものはなるべく社會の力の少なからんことを願ひ、或は社會の力の破壞せんことを希望して居るのです、又社會を信ずるものは個人の力を減じ、集めたる力を得んと勉むるのである、思ふに我が日本の今日の狀態も亦斯かる考へを抱いて居る人が多い樣に見うけられます、日露戰爭開始以前の社會狀態は如何でしたか、人民は頻りに個人の力を擴張せんとし、如何にもして現內閣を倒し政府の力を押へて見やうと企て、政府のがはの人はなるべく個人を壓して我が儘を云ふ力を散ぜしめんと勉めたのです、然るに日露戰爭となりて、始めて國力を一致することの必要を認めました、國家と云ふ集まつた力でなくては、到底露國に勝つ事は出來ぬと云ふ事がわかつたのです、夫れで今日は如何に租稅をかけられても人民は喜んで金子を出だし自身の着用して居る衣服を脫ぎても獻納するのです、故に其の前は何時も二派に分れて居ましたけれども、擧國一致の精神が固まりましてからは、國家も個人も共に善くなりました。要するに二元論と云ふものは、個人と社會とは相容れぬもの始終相爭へるものと云ふ風に、社會的勢力と個人的勢力との間に、區劃を立てた說と云はねばなりません。

(3)原人個人主義

此の說によれば時に於て卽ち歷史的に云へば、社會は個人の

次に續きて成立したるもの、語をかへて云へば社會は個人が發達して出來たるものであるとするのです。是は一寸見ると進化論に似て居る樣ですけれども、極未熟なる又曖昧なる說と云はねばなりません、故によく人の迷はされ易き說でありますが、又似て非なるものと云はねばなりません。今一つの特色は、個人主義は社會主義よりも低く劣等なるものである、又道德上より云ふも個人主義は社會主義よりも價値の低きものとし、從つて社會の發達せぬ間は個人あれども、社會主義の發達するときは個人主義は壓倒せらるゝもので、社會主義は卽ち個人の完成したるものであるとする事でありまして、之は一應尤もな事の樣ですけれども、やはりまちがひなので、其の證據は小兒を觀察して見れば直ぐわかります。夫れは小兒の時には社會性はなくて個人性のみの者であるか、或は自己的感情と社會的感情とは孰れが先きにおこるものなるかと云ふ事、之は餘程六ケしき問題でしよう。先づ小兒のはたらきを調べて見ますと、極めて小さい時は母の乳を探がし、又は顏色によつて何事かあることを示すのである、生後幾何も經ぬ嬰兒ですらも、母を見れば嬉しさうなる笑顏をなし我と云ふ自覺が出來る位になれば多人數にあやさるゝことを喜び、之に反して一人おかるれば淋しがりて泣き出だすのです、大人の死に臨む時も同じ事にて、人は生れながら社會的感情と云ふものが本能的にあるので如何なる惡人と雖ども、必ず良心の責に勝つことは出來ずして、生前之を懺悔して然る後永眠しないものはありません。又野蠻人につきて調ぶるも、猶は野蠻人相應の社會性はあるのです、故に之等の諸方面より考へて見れば、どうしても個人性が充分發達して然る後に初て社會性が發達するのではありませんので、最初から其の萠芽はあると云はねばならないのです。併し文明人の社會と野蠻人の社會とは實に雲泥の違ひがありますけれども、文明社會は個人も發達して居ると同樣に、野蠻人の社會は社會も遲れて居れば個人も不完全なので、畢竟社會と個人とは同一の程度を保つて並び進むものである、故に社會的敎育は個人性に最も重きをおくのであります。此の個人性を發達せしむるには是非社會的生活をさせねばならぬ、凡て人間は、社會ある爲に吾れを知り他人ある故に己れを見出すことを得るのであります。

(4)社會的能力說

之は吾々の澤山ある能力の中の一部分に、社會的能力と云ふものがあり、又他の部分に個人的能力と云ふものがある、故に我々は一人の身にて二つの性癖を有して居るのである、卽ち一は社會的、一は個人的の性癖である、例へば愛の如き情緖は社

會的であつて、恐れるとか怒るとか云ふ樣な感情は非社會的のものであるとするのです。又或る學者は智力は個人的能力であつて、情緒は社會的能力であると分かつ者すらあります。併し此の社會的能力を社會的本能と云ふ意味につかへば、さほど誤りたるものではありません、さうして愛情と云ふものが怒ると云ふ事よりも一層社會的であると云ふ風に用ふれば敢て誤まりではありますまい、併し或る情緒は社會的であつて或るものは個人的であるとすれば、大變なまちがひです。又個人的感情は社會的感情よりも低きものであると云ふ風に考ふるならば、夫れも誤りです。吾々の心理をよく考へて見ると、之は社會的之は個人的と違つたものが二つあるのではありません、廣き意味で云へば、吾々の能力は凡て社會的であります。そこで此の社會と云ふ事と個人と云ふ事は別々であると云ふ事の間違つて居る事、即ち虛僞の考へである事、及び個人と社會は人生に缺く可らざるものにて、共に相並びて存するもの故に健全なる個人主義は健全なる社會主義である、又社會の爲に盡すことに缺けて居る人は、個人の修養にも缺けて居る人であると云ふ事がおわかりでしよう、故に孰れを先き孰れを後にすると云ふ事もなく、又孰れを捨てゝ孰れを取ると云ふ事もいけないのです。吾々は同時に此の兩方面を考へて、人生（Human life）を完全にしなければなりません、そこで之を大きくすれば人道（Humanity）となります、私の考へに從へば健全なる社會主義も、健全なる個人主義も、健全なる宗教も、皆此の人道の中に入るものと信じますのです、之をあなた方がよくお考へになる時は、直ちに一致團結が出來るのである、吾々の取るべき眞の宗教は何であるか、曰く唯だ人道あるのみです。此の人道と云ふものが、一番宇内を人にまとめ、凡ての人間社會のまことを熱望する者を一つに固める所の中心點であると信じます。

以上は社會主義と個人主義との理論を說きましたので、之がわかつて後始めてあなた方が實現しやうと云ふ考がおこるのです。然らば如何にして之を實行すべきかと云ふ事が問題となるのでしよう、夫れを述ぶるに先だちて、社會が個人に對する本務を如何にすべきか、即ち社會が如何に個人を教育すべきものなるか、又社會に連なれる吾々個人は、社會に對して如何にすべきものなるか、及び吾々個人に對しては如何なる本務を負へるものなるかを究めねばなりますまい。此の主意より云へば社會は個人の爲め、個人は社會の爲めであります。社會は個人の自由を保護し個人の發達を助くべきものである、又社會を組み立てる爲めに、完全なる個人の發達を得なければならぬのである、故に社會を主にして考ふる時も、個人の人格と云ふ事が大

切であります。個人に人格を缺き個人性を缺きたる時は、到底完全なる社會は成り立たないのである、何とならば社會は千種萬別なる機關を備へて居ますが、之は千種萬樣なる個人性に依て組み立てられて居るのであります、卽ち人格は夫れ夫れ違つて居る事が必要である故に、社會教育は千篇一律にすることは好まない、各々の性癖本能に從つて各特色を有する所の品性を養ふと云ふ事が社會の一員として教育すると云ふ教育者の主張する所であります。さて之をするには自由と云ふ事が必要です、國家を立つる上に、民權の自由と云ふものを尊ぶと同じく、生徒にも此の自由を與へねば發達しないのである、故に個人の發達個人の安寧個人の幸福と云ふものを計らねばなりません。あなた方が櫻楓會を組織して櫻楓會をよくせねばならぬと云ふ事は、卽ち個人をよくすると云ふ事に歸着するのです、故に社會を善くするには是非とも先づ個人性を發達させねばなりませんが併し凡てものはかたよるといけないのです。一例を云へば、昔盛大を極めたる國の歷史を考へてもわかります、ヒブライは實行を尊び、グリーキは美術を、ローマは眞理を非常に重んじましたが、餘り一方に傾きて調和を得なかつた爲に、人心が冷却して遂に亡びましたのです、之れと同じく人間社會はかたはになつたならばやはり亡びるのであります。日本は今武で立つて居りますが、あなた方の學校には、經綸を立てる人、詩人、音樂者、文章家もなければならぬ、又單に高尙なる理想を抱くばかりでなく、之を實行する人がなければならないのです。思ふにあなた方は、大別して二つにわけることが出來ましよう、卽ち一はお嫁に行く人一は獨立する人、さて獨立する人は皆教鞭を取ると仰しやるでしよう、併し全體の上から見れば、筆を取る人、教鞭を取る人、美術家、音樂家を初めとし、其の他いろ〳〵の者が出來なくてどうなりますか、社會は櫻楓會からいろ〳〵の悉く違つた者の出る事を切望するのである、同じ樣な者ばかりとなれば社會は困まりますでしよう。文學を以て立つ人にしても、今後研究すべき方面は夥しいのです、例へば言文一致體の如き、或は新體詩の如き、皆あなた方の手に委ねられ目前に橫たはつて居るのではありませんか、然るに何故此の中から社會を動かして、吾々の理想を實現する所の力ある詩人が出ないでしよう、大學の爲すべき事は澤山あるのに、何故出來ないでしようか、夫れはどうしてもあなた方の個人性の發達が足りないからであります。是は社會が個人に對する事を申しましたが、又あなた方自らが社會の一員としての本務を考へねばなりません、夫れは卽ち社會に連つて居る一員として、自ら其の適性を定むると云ふ事であります。若しもあなた

方が之を發見して確定したならば、其の日から人物が高まり、力は二倍し、自重心が強くなり、氣品が高尚になり、社會は更に多くの事が出來る樣になるのです、夫れを櫻楓會に出來たとすれば、一層多くの活動が出來るのです。之に反して自身の適性を發見し得ない人は、目的を定むる時に常に迷ひ常に波風に動かされ、何時も心が變つて居るのである、故に個人性を發見して自分の社會に於ける職分（Function）を確定する事は、尤も大切なる事であります。然るに此の個人性を發見するは甚だ困難なる事です、何とならば、あなた方は誠に單純なる生活の中に成長なすつたから、今日の如く複雜なる社會に於て、尤も適當なる職分を見出だすのが六ケしいのです、昔は四民と云つて只士農工商に分たるゝのみでありました、然るに今日の社會を見れば、單に農と雖ども、工と雖ども、餘程複雜である、例へば昔は草鞋を作るにも、一日に五六足を作るのが普通の事となつて居ましたけれども、今日は只靴を拵へると云ふ一事のみでも、廿七八の分業となり、其結果として一日に何萬足も出來る樣になりました、又一家の内にしても、昔は生れたる家のあとをつげば宜しかつたけれども、今日は何にても尤も自分に適した事をすることが出來るので、到底親のしたる業を嗣ぐのみではいけない事になりました。

以上は社會に關する個人としての本務を申しましたのですが、次には不健全なる個人と云ふ事について、御話しようと思ひます。

不健全なる個人とは、英語の所謂 Selfish であつて、日本語に譯すれば利己主義とでも申しましようか、さて此の不健全なる個人と云へば、卽ち病的の者、或は不具なる者であります。其のかたはなる個人とは如何なるものかと云へば、小人島の如く、言ひ換へて見れば心の狹き事です、又他の詞で云へば頑固卑劣等の詞である、今少し是等の詞を具體的に云へば、其の利己と云ふ事から起る病氣は、傲慢、虛榮、嫉妬心、競爭心、嫌惡心、忿怒、敵愾心等でありまして、是等の劣情を以て充たされて居るものが卽ち不健全なる病的の個人主義であります。斯かる者は全く社會に關係しないものであるが、然らば社會と云ふ事を全く離れて起る現象であるかと云ふに、やはり離れる事の出來ぬものであります、されど一寸考へると斯くの如き不健全なる個人主義は、全く社會から離れる事の出來る樣に考へられますけれども、實際はさうではありません、例へば高慢と云ふ事なども一人では起らないのです、他人と己とを比較して他人よりも自分が勝れて居ると感ずる情故、傲慢なる人は社會から孤立したものとは云はれません、卽ち之は他人と關係して不

健全なる關係を保ちたるものと云ふべき人です。虚榮心も亦其の一でしよう、他人よりも自分の名譽の高まる樣に、又其の名譽は皆が感服して吳れる樣にと願ふのです。競爭心も嫉妬心も皆さうです、彼の人がもつと吾れを愛し、吾にもつと同情を寄せて下さる筈であると考へるから起る事にて、愛する者と愛する者との間に起るものであります。又嫌惡心も他人との關係から生ずるのです、益軒先生の云はれたる女の五病の如きも皆利己から起る事で、やはり社會と關係を有して居ります、故に不健全なる個人によつて成立して居る所の社會はやはり不健全です、不健全なる個人の第二の特色は、弱く輕く又動き易き事である、是は卽ち利己であるからです。セルフイツシュと云へば誠に頑固な樣な人を云ひます、頑固と云へば强い樣であるけれども、實は甚だ弱くて、時により移り變つて行くのであります。故に局部から云へば狹きと云ふこと力より云へば弱しと云ふ事である、卽ち自分の意志で自ら抑制して行く事が出來ず故に、今日は極親しきかと見れば明日は疎く今日は熱心なるかと見れば明日は冷却すると云ふ風にて、永久に續くことが出來ないから人と交はつても、親友となりて永く愛情を續くる事が出來ず、又團體に加はつて居ても全體の人心を指揮して行くことが出來ません、夫れで人々が斯かる者を喜ばないのです。何とならば夫れは實は病的の心であるからです、斯樣な人は謙遜な樣で、內心は甚だ傲慢な者であります。

第三は利己心である、自分の利益自分の欲を主とする者であつて、何事をするにも利害によつて動く人であつて、俗に云ふ貪欲な人です、此の種の人は此の主義が最も自分の爲に善き事と考ふるも、吾々の目より見れば、是は實に尤も憫れむべきものであります。

第四は利己心のある人は、他人の善を喜ばぬことです、人に幸なる事があれば何時でも心が動きて樂しまず甚だしきは自分の出でたる學校の事、會の事をも、心にかけぬ人があります、又頻りに人の事を聞くけれども、實は惡しき音信を探して居るのである、斯かる人の常として自分の企てたる事、自分の名譽のあがる事、自分の善き地位を占める事の出來る樣な事柄の外は、一切冷淡なものです、斯かる人の澤山居る社會ほど、不健全なる社會であります。

個人が社會に對する本務

社會と云ふものは個人によつて成立して居る故に、個人を善くすれば社會は自然善くなるものであると云ふ說もあります。併し私の考へでは、やはり社會と云ふものを認め、愛國心團結

心を養ひ立てずば、決して社會は發達せぬものです、吾々は個人として發達せしむると同時に、團體心を發達せしめなければ、社會は成り立たないと信じます。先日も御話しましたモーズレー氏の報告の如きは、愛校心を以て愛國心を養はしむると云ふ教育の仕方でありますが、是は至極善い事で、若しも吾々が個人だけを善くすれば、社會は自然善くなると云ふ考へにて、愛國心を養はぬ時は、忽ち支那や朝鮮の様になる事は明白です。例へばモーズレーと云ふ人が如何にアメリカを學ぶに至りしか、ハーヴアード大學卒業生の名によりて學生を用ひ、其の結果によりて更に廿六人の視察委員を遣はし、米國の眞相を視察せしめ、之を學ぶに至りたる事柄につきても、大に吾々の考ふるべき點がありましよう。同じ米國の大學と云つても、さまざまです、學位と云つてもハーヴアード大學、エール大學、コーネル大學などの學位でなくば、少しも尊き事はありません。故に私は益々愛校心を養ひ、團體心を育つる事が、今日の急務であると確信して居ります。吾々の戰場に於ても、やはり征露の軍隊と同じく、斯かる場合に士氣を振ひ起さしめて行くと云ふ事は、必要なる事であります。

以上述べました事は只道理の上の事ではありません、是非此の際大切なる品性を養ひ、個人性と社會性とを偏頗にならぬ様に發達せしむる様に、先づあなた方から起つて深き親切と溫かき愛情とを以て、人をも導き、又自らも大に發達せられん事を、切望致しますのです。

社會と個人との關係

社會を組織して居る以上は、其の社會の一人として何か世の爲めに、又人の爲めに盡して居ると云ふ確信がなくては無意味なる生涯を送ることゝなるので、吾々は是非此の社會の爲に盡す所がなくてはならぬ、而して是を爲すのに尤も大切な事は己の適性を發見して其の本分を全うする事であります。さて此の己の適性を見出だす事は、自分と云ふものと社會と云ふものとの兩方がわからねば出來ないので、夫れ故に己を知ると云ふ事が尤も必要であります。眞に社會がわからずば、決して己を知ることは出來ないのです、之は個人性を見出だす事の必要なる所以を申したのでありますが、次には既に個人性を發見し、天職を見出だしたるものとして其の我れを修養することの必要について述べましよう。あなた方の中に、自分の個人性を修養する爲に、時を費し力を集めるのは、社會に對して義務を怠る事になりはせぬかと云ふ心配をして居られる方がある様です。有名なる詞にも「自分の修養の爲に身を捧げると云ふ事は、社會

の要求を怠ると云ふ樣に考へらるゝ」と云つてあります。されど社會から孤立したる一個人の名譽を擧げ、私の爲めに金を儲け、己れ一人樂をしやうと云ふ事ならば、惡しき事であるけれども、社會に關係したる個人の修養をする事は、社會に對して有益なるばかりでなく、吾々が社會に對する義務であります。修養と云ふことは、種々の意味を有する事でありますが、先づ己の能力卽ち潛伏力を貯へるのである、又自分の品性を高め、自分の理想を作るのであります、斯かる事を自ら修養すると云ふのです。斯くの如くして得たる吾々の潛伏力、高尙なる理想、遠大なる經綸、有用なる勢力は、とりもなほさず社會の勢力、社會の輿論、社會の風俗となるものであつて、斯くなる時は社會的と云ふのではあります、併し未だ個人として貯へて居る間は、之を個人的と云ふのである、然れども實は同じ事です。例へばアメリカの南北戰爭を起したるリンコンが永き間修養して社會の輿論をおこし奴隷を解放せし事は、氏の心の中に胚胎せる間は、個人的と云ふべきものですけれども、既に宣言書となつて現はれたる時は、社會的と云ふのであります。扨て社會的となりたる時は個人性はなくなりたるかと云ふに、決してさうではありません。リンコンが自分の主義を主張して社會の輿論となり、法律となりたる後も、やはり是は自分の考へとなつて存して居るのです、故に之は決して利己的のものではありませぬ。若しも利己的の人であるならば、何もかも利己的であるけれども、利己的でない人のする事は、自分の爲にする事もやはり社會的であります、昔の聖賢の傳を讀んで見ても、確かに間違ひはありません。例へば釋尊が幸福なる家に生れながら山に籠りて修養し、天地の道理、人間の性質を深く考へ、身を殺し己を捨てゝ研究せられたのは何の爲かと云ふに、如何にすれば人間を救ふ事が出來るか如何にすれば此の世を濟度する事が出來るかと云ふ事でありました。又キリストが四十日間山の上に上られて、種々の誘惑に戰ひ、遂に是に打ち勝つことを得られたのは何故でありましようか、キリストは十二歲の頃から深く感ずる所があつて一日も之を忘れられた事はありません、さて山上の誘惑と云ふことはキリストの心の中を能く現はしたものであります、斯くの如くして生涯に一貫せられた所以は、どうかして世の中の人を救はねばならぬと云ふ事であります、又近くはコントの如き人が哲學の研究に犧牲となりしことも是非哲學を組織だてなければ世を救ふ事は出來ぬと云ふ確信によつて成し遂げたのであります、故に自分を修養すると云ふ事は、やはり社會的である、之は吾々の世の中の爲に盡すと云ふものゝ決して缺く可らざる事であります、世を救ふと云ふ考

へがなかりしならば、釋迦もキリストもあれ程の事は出來なかつたでしよう、故に吾々は社會に盡す爲に自分を修養すると云ふ事は、缺く可らざる事です。充分に必要なる智識を積み、確かなる理想が出來ぬならば、あなた方が將來社會の爲になると云ふ事は、望む可らざる事であります。ウヰリアム、ピツトがレモンヂ公爵に向つて「閣下よ、予は此の英國を救ふ者なり、予をおきて是れを爲すものなし」と云ふ詞は如何にして云ひ得たのでしよう。彼は自ら修め、自ら貯へ、自から經綸する所があつたからであります。是を以て、彼は生涯其の目的の半ばを達し得たのである。其の他シヤフツベリー伯、ワシントンの如き皆同じ事です、吾々の會、吾々の學校にして、振はざらんか、そは全く銘々の修養が足りない故であります。

今後十年の間は、あなた方の潜伏力を養ふべき時であります、あなた方の實力を養ふ事にしても、品性を養ふ事にしても、亦あなた方の社會に力を振ふ事にしても、決して、容易に動くと云ふ事を喜びませんのです。是は個人にしても、櫻楓會全體にしても同じ事です、物事をする前に充分の用意、調査、經綸をなして、後着手する事、所謂注意周到でなければなりません、是をよく皆さんにのみこんでおいて戴きたいのです。今日迄私は此の主義をとつて居りますが、是は間違つては居ないつもりです。一つ事をするにも、必ず遠大なる計畫を立てゝしなければなりません。私は十三歳くらゐの頃から少しばかり和蘭學などをしましたが、眞に英語を研究し始めたのは十八歳の時でありました、夫れからと云ふものは一度も學校に入らず、師につかず自分の研究と方法とを立てゝ、廿餘年間一日も英語を讀まぬ時はありません。是は非常に遲き仕方の樣ですが、自分に經驗したる事は非常に有力なものであります。女子教育は自分の天職であると考へましたが、女子大學を起すことの如きは、私の生前に出來るとは思はず、死後に出來ても宜しいと思ひましたのです。されど是れは思つたよりも早く出來ました。或る人は私を評して云はれるのに「君は實に物をするのに遲くて仕方がないけれども、君が一且物事を決定したる時は、實に疾風の勢ひを以てせらるゝ」と云はれました、之は過賞であるとしても、吾々は充分なる支度をなして着手しなければ、眞に物は出來ないのです。此の用意は公事も私事も同樣であります、あなた方の準備は是から先き十年を要しますでしよう、決して二年や三年に出來るものではありません。さうして今一つ考ふべき事は、自分を大切にし自分を修養すると云ふ事は、利己的の樣に思はれ、又粗食をなし健康をも害して盡す事は、非常に愛國者の樣に見えるけれども、是は間違ひであります。滋

養もとり身體をも厭ひて社會に盡すのが、眞に國を愛する所以であることを忘れてはなりません。又吾々の考へを進める爲に障碍となるものがありましよう、夫れは團體の爲と云ふ事であります。犧牲とか、愛校心とか、團體の爲とか云ふと己れを捨てねばならぬ。此の己を捨てゝ己を善くすると云ふ事は中々しがたいものであります。今一つは私があなた方を犧牲にし、國の爲學校の爲に、あなた方の幸福名譽をも捨てさせ個人を愛せず、只學校の爲め國の爲めにのみさせようと思つて居るかの如く感じて居られる樣である、之は私が先刻裏の山に上つて心づいた事でありますが、若し斯くの如く感じておいでの方があるならば、夫れは大變なまちがひであります。無論吾々は國の爲めに、學校の爲めに犧牲とならねばならぬのですが、併し國の爲に盡し、學校の爲めに善くせねばならぬとは何でありましよう、櫻楓會を思ふと云ふ事は、卽ちあなた方名々を思ふと云ふ事であります。例へば櫻楓會の名譽、櫻楓會の利益を謀らねばならぬ、夫れは何であるかと申しますと、凡そ名譽には高尙なるものと劣等なるものとの二つがあります。さうして今一つ大切なものは同情であります、併し櫻楓會の名譽、學校の名譽は、卽ちあなた方各々の名譽である、各地方の學校から此の校の人を聘したしと續々申し込まれるのも、本校の人ならば精神的の人であらう、定めて忠實なる婦人であらうと信用せらるゝからであります。私が女子教育に從事してから廿餘年になりますが、朝夕思ふ事は、あなた方の在學中の事も無論心配しますが、夫れよりも一層深く考へらるゝは、あなた方の卒業後のかたづけ方です。扨て常々申す事でありますが、歐米諸國の人に對して誠に耻づべき事は日本の人の心の小さき事であります。どうか私はあなた方の感化によつてあなた方の子孫は偉大なる者となり、其のはたらきによつて我が國を今後益々偉大にしたきものである。社會を己れの如く思はぬならば、又己れの如く人を愛する事が出來ぬならば、決して社會を進むることは出來ません。次に申すべき事は感化力であります、寮に居る人はどうか寮を善くして學校全體を感化せられん事を度々申しました。是は只寮の爲に云ふばかりでなく、あなた方個人の爲にも必要な事はおわかりでしよう、次に云ふ事は忍耐と克己とであります。其の次に一致團結と云ふ事、次に責任と云ふ事、之について少しく說明しましよう。本校では頻りに責任を重んずると云ふ事を云ひ、又責任を分かつ事を申すのです。又此處では月給とか名譽とか云ふ事は、少しも眼中に置かずして、只己れの爲すべき本務責任に忠實にするのである、世間の人は多くは名譽とか地位とかを追つて動くけれども、此處の人は斯かる事

によつて動かないで、眞實本務に熱心になるのである。是が自分の天職であると信じて忠實に務むる人は、最も進歩するもので、之に從つて名譽も賞讃も高まるものであります。是があなた方の將來の爲めに、銘々の教育の爲めに必要であるから、皆さんに責任を負はせるのです。故に何事もあせらずに、機會を待つて行くのが宜しい。今一つは、あなた方に成るべく組織を立てさせる事であります。自分にすれば餘程早いと思ふ事でも、自身に干渉しないで、皆さんにさせるのは、從來の我が國婦人の弊を直させたいからです。今迄の我が國の婦人は、組織的のあたまがありません、是を改善することは、あなた方をおいて誰れがしますでしようか。次にあなた方の心を苦むる事は、思ふ樣に向上する事が出來ぬ、人の心が揃はない、どうも自分の力が足りない、瘦せ馬に鞭うつてなりと進んで行かうか知らん、身體は衰へても死ぬる迄しやうか知らん、又朝から晩迄會に出て居れば智識が進むのか知らんと思はゞ、大なる間違です、斯かる事ばかりして居ては、決して完全な者とはなれません。あなた方は此處に居て毎日進んで居ると云ふ確信がなければ決して人を率ゐて行く事は出來ません、從て立派なる團體となる事は出來ないのです。斯ふ云ふ非常なる時には、益々社會を離れて、益々己れを高めねばなりません、非常に活動するには Private が必要です、社會の爲團體の爲に大に盡さんとする者は、時として閑靜なる山の中にも入らねばなりますまい、夫れは非常に盡さんとする者は非常に考ふることを要するからであります、故に自身でする、自ら奮つて起つと云ふ決心がないならば、何事も出來ないものであると云ふ事を忘れてはなりません。今一つ間違つて居る事は、學問の道がまだわからない事です、併し是を御話し致しますと餘り遲くなりますから他日に讓りますが、以上申しました事によつて、個人と社會、及び個人と團體と云ふ事の關係が略ぼ御わかりになりましたならば、幸ですが、若しもまた疑問が殘つて居らるゝならば、お尋ね下さつて、或る程度までは解釋せられん事を切望致します。

（「花紅葉」第一號）

研究的體育の必要

本校體育の方針、及び其の歴史、または現狀に就ては、學報、週報、其の他の印刷物を以て、已に屢々之を公にしたのである。本校の體育が自動的に、國際的に精神的に行はれるやうになつた事は、事實に徵して明らかであるが、今や我々は更に一歩を進めて、研究的態度を以て進歩發達の途に上らうとする

のである。如何にして研究的態度をとるべきか。この問題に入るに先だち、一言體育の重んずべき事に就て述べようと思ふ。教育にしてもし體育に根據を置かなければ、そは無効となるか、然らざれば病的に陷るに至るは、敢て說明を俟たない事である。されば教育を進めんとするならば、先づ體育より始めなければならぬ事は、獨り本校のみではなく、如何なる學校何れの國家に於ても然うでなければならない、見よ德育、知育、美育を重んずるものは、先づ體育を忽せにしてはならぬ事は、歷史に徵し、各國に顧みて誤らざる眞理であるを。

今日世界文明の源泉をなして居る處の希臘は、其の昔美育極めて發達し、武育を重んじ、同時にまた哲學、科學の最も早く發達した國であつたが、就中其の體育に於て有名である。希臘の體育は一つの科學であつて、希臘の都會の一大中心は、實に體育場であつたのである。苟くも希臘人の集つて村落をなす處に、體育場のあらざるはなく、青年は最も多く此處に集合して、獨り身體の鍛錬を計るのではなく、其の知育、德育、凡ての教場は此處なのであつた。卽ち大政治家、大教育家は此處に來り、大哲學者は此處を訪れて、青年を誘導し、感化し、教訓することに努めたのである。實に希臘の當時教育の半ば以上は體育であつたといふも、決して過言ではないであらう。また希臘の美術は、其の美の標準を體育に置いて居ることは、西洋史を繙いたものゝ必ず記憶して居る處である。其の體育によつて最も發達し、平均し、調和し、完備したる體格をうつした模像は、今日迄も美術の本源と尊ばれて居る。さうしてかのアデンス、スパルタの武勇は、云ふ迄もなく、其の體格の產んだものであつて、恰も我國の武士道が、柔術劍術等の體育に養成せられた所多きと似て居るのである。これ等は何れも過去の歷史に屬して居るのであるが、今日文明國と稱へらるゝ歐米諸國の教育に於ても、體育を基として其の効果を得つゝあることは疑ふべからざる事實である。殊に米國の女子が極端なる迄其の發達を遂げて居るのは、全く體育を重んじた結果といはなければならぬ。米國のスミス氏は、女子高等教育の弊害を苛酷に批評せられたといふことであるが、もとより米國の教育は未だ完全なるもの、といふ事は出來ない。然しながら始めより男子は男子らしく、女子は女子らしく教育することをば、決して忘れては居らぬ。それは彼の國の高等教育を受けた多くの人物を見てわかるのである。よしんば高等教育を受けた女子に、批難すべき點は多しとするも、もしそれらの人が教育されなかつたならば、其の批難すべき點が一層甚しかつたかも知れぬ。

殊に女子の高等教育が出產力を減殺するとの議論は、精密な

る調査、研究を經ずしては、早計に判斷し能ふべきものでない。しかも女子高等教育は基を體育に置いて居るものであるから、却て其の體力は一般に增進して居るのである。スミス氏の議論、必ずしも誤りなしといふ事は出來ないであらう。然しながら體育にして、もし研究的態度をとることを忘れたならば、永久の進步發達を望むことが出來ないのみならず、恐らくは其の結果も亦、無効に歸するに至るであらう。顧みれば、我國に行はるゝ體育の多くは、模倣體育である。例へばかの普通體操の如きは、瑞典、獨逸の體操式を混じて成りしもので、これが、我國に適切であるべきか、否かは、研究を要する問題と思ふ。何故かと云へば、これは未だ人種に就き、體格に就きて、調査し研究して、適當なるものと認められたのではないのである。

本校は夙に體育を重んじ、其の目的を定めて、之に達せしめんが爲には、最も研究的態度をとらんことを努めたのである。其の體育の種類としては、我國固有のものは勿論、各國のものも可なりと思ふは、凡て採用するに躊躇しなかつた、されば瑞典式あり、獨逸式あり、希臘式あり、園藝もあれば牧畜もあり、かくして常に進步發達を計つて來た。過去の歷史の如何は此處にいふまでもない。今やなほ一步進めて、眞の研究的範圍を窺はんとするのである。體育に就て研究すべしといはゞ斯ういふ人があるであらう。世界には大醫あり、專門家がある。何を苦しんで淺學幼少のものが敢てそれを冒す必要があらうか、且つ研究等といふ容易ならぬ事は、到底不可能であると。この樣な考は獨り體育に對してばかりではない。世人の一般は他の學問に於ても同じく、畢竟學問は學者に學び、宗教は單に信仰個條を信ずればそれで信仰が出來、精神も、行も、進步發達すべしといふやうに考へて居る。斯樣な考を有して居る國民は、昔も、今も決して進步發達することが出來ない。勿論世界には立派な學者もあり專門家もある。然しながら自ら研究する力のない人は、如何に大家の說を聞き、專門家に就て學ぶとも、たゞ學說を覺え、技術を習ふに止つて、我には竟に何等の効果をも認むる事が出來ないのである。これが多くの學生の誤つて居る第一である。第二の誤りは如何、萬能藥を信ずることである。例へば菜食說を主張するものあり、肉食說を是とするものあり、或は藥を以て治療するあり、マツサージ、オステオパセを以て藥に代へる者もある。これらの人達は各自己の信ずる方法を以て、如何なる人、何れの場合にも、一樣にそれを施さんとするのである。これらは皆衛生、體育を研究することの出來ないものであつて、且つこれを信ずる者は、往々誤られるので

ある。何事によらず、實驗し、研究した後適當な證據を得なければ決して信ずべきものではない。されば體育を研究せんにも、古來の生理、衛生の原理は學ぶべく、大家、專門家の說はきくべきであるが、それ以上、少くとも自らの身體を知り、之を支配する能力を持つて居らなければならぬ。西洋の諺に「人四十歲に達すれば、醫者か、馬鹿かになる」といふ事がある。人四十歲に達すれば、誰しも自分の身體の事を知つて、自ら醫者となり、看護者となることが出來る。もしそれが出來ないとすれば、之を愚者と呼ぶ外に言葉がないと云ふ事である。今後の女子の責任は最も重い。家庭に、國家に、內顧の患ならしめんとする活力は、實に其の健康に求めなければならぬ。この健康を得んがためには、常に研究的態度を以て進み、最も適當なる自己の醫師となり、看護者となるのみならず、主婦となりては一家の爲、教師となりては學校のため最もよい醫者となり、看護者とならなければならぬ。

されば本校に於て催す運動會に、最も現れんことを望むは研究的態度である。各個人、各團體を研究的に調査した結果、個人に適切にして、又團體に適ふものでなければならぬ。且つ學理に適ふ體育を創始して、之に依つて知育、德育、美育にも資せんことを望むのである。研究とは決して他に奇妙不思議なる方法を求むことではない。各自熱心に着實に、努力するの外に道はないのである。之によりて本校の體育は、永久に進步發達し、本校の運動會は、一回每に異彩を添へんことを心懸けて居らなければならぬ。

（「家庭週報」第二十四號）明治三十八年五月

戰捷祝賀式上に於て

天地開闢以來若しも奇蹟といふ事があつたとすれば今日の事は實に一大奇蹟であります。若しも人間がこの世に生れて天からインスピレーションを受けた事があるとすれば、實に今回の事は一大インスピレーションである。若しも社會に宗教といふものが行はれ、又教育と宗教といふものが行はれて歷史にあるリバイバルといふものがあるとすれば、今日の國民の感動は實に一大リバイバルであります。若しもかゝる大時機におきまして、斯くの如き天の一角に顯はれたる時の休徵を見て、それを感ずることの能はざる人間は、寧ろ慚死するが宜しい。斯かる者は人間たる價値を持たない、まだ精神の發達せざる無益の長物であります。私共は只徒らに喜ぶのではありません。狂喜するのではありません。充分に喜ぶ理由を有して居るのでありま

す。此の日露戰爭は獨り我日本の運命に關するのみならず、實に世界の文明と野蠻との戰爭、光明と暗黑との戰であります。我日本帝國が世界の强國と對等の條約を結びました時に、世界各國の國民は驚いたのです。歷史あつて以來、白色以外の人種で對等の條約を以て仲間入りをした國はありません。條約だけでもこの通りで加ふるに其の體面を保つことは、世界各國は勿論我國民自らも餘程疑つたのであります。しかのみならず商工業の程度に於て、又知力の程度に於て、到底比較することは出來なかつたのです。我國民と雖も、未だ斯くの如き自任力を有して居たのではありませんでした。今日迄色の異つた人種であつて白人種と交際を始めて、其の國の現狀を維持したものは殆どなかつたのみならず、其の種族も亡びて、殆ど白人種の世界となるべき樣でありました。東洋のモンゴリヤ人種は、決して白人種と競爭して並び立つことを確信したものはありませんでした。又世界の文明は白人種の專有物で、到底黃色人種が此の惠みに浴することは無いと實際に於て信じて居りました。日本が少し頭をもたげかけたけれども、眞に發達し得るものとは考へなかつたのであります。然るに此の度の我國の大勝利に、吾々色の變つた國民と雖も、又白人種の如く、彼等が知力に於て進むものならば、吾々も知力を以て立つことが出來るのである、彼等が實力を以て世界を支配するものならば、吾々と雖も、支配し能はざることは無いと、世界の各國がロシヤの壓迫を受けて最早堪へられぬ有樣を見て實に忍びない處から、背水の陣を敷いて生命を賭して戰つたのであります。けれども果してこれに堪ふる所の實力があるか否かを疑はなかつたのでもないが、止むを得ずして起つたのであります。併し今日の大捷、バルチツク艦隊の全滅は吾々がどうしても勝つことを自認したのであります。色の變つた人種でも、教育すれば白人種の如く世界を支配する實力のあるものであるといふ事を證明し、世界をして大いに尊敬せしめたのであります。色の變つた人種が、世界を支配することの出來ることを證明したのであります。吾々は世界で踏みつけられた種族を救ふべき使命をうけたのであります。是は決して小さい出來事ではありません。世界が開けて以來、歷史あつて以來、始めて起つた一大事實、一大發見であります。此の時に於て吾々は、天の一角に顯はれたる時の休徵に對して奮起せざるを得ないのであります。吾々は今度の事によつて、益々深く考へざるを得ないのです。どうか最も深重にお考へを願ひたいのです。

我日本女子大學校は、戰後經營の一として、國家に必要なるものゝ一として生れ、日露戰爭の困難なる經濟界、其の他凡て

の方面に一大恐慌を來したる中に在つて、益々其の基礎を固くし校運の日々に伸展致しましたのは、何故でありませう。是は國民教育が大切なる爲に、天があなた方に使命を授けたものではありますまいか。此の時に當つてこの使命の重きを自覺し能はざるものは愚民であります。あなた方はこの時の休徴を見て、其の責任、天職を感ぜざるものは、我校の學生ではないと云つてもよいと思ひます。吾々は斯くの如き責任を荷ふたのみならず、我國民と共に、其の責任を全ふするに足るの力あるものであります。あなた方はこの大使命を負うて立つ處の淑女となり得べきものであります。また是を育てる爲に天佑は日々に加はつて居ります。この自信を得んければならぬと私は信ずるのであります。

今一言之に加へておきたいのは、吾々がこの重大なる責任を全ふするには、今日東郷艦隊が成功せられたる大原因に則らねばならぬ。第一は精神、第二は知識、第三は智慧この三つであります。我海軍が旅順の閉塞に從事して以來、如何なる困難にも堪へ、研究に研究を重ねたる結果、實に驚くべき進歩、發達の功を奏せられた事は、今日吾々が喋々することを要しないのであります。又我軍が遙かに世界の知識を集め、ロシヤに勝る所のものを得て學術的の戰をした其の注意力の周到綿密な事は、誰も疑はないのであります。第三は東郷大將の知慧であります。ロシヤといふ大きな熊は、歐亞大陸の黑雲群がる山野を越えて、我國に荒れて來た、それは如何なる谷間に驅けるか、宗谷海峽に出づるか、或は日本海、或は臺灣に現るゝかと云ふことは、多くの獵師の疑つた事であります。然るに東郷大將は彼等の來らんとする道を早くも察知して計畫を廻らし彼等の先をくゞつて大いなる獲物を得られたのであります。この計畫を全ふする爲に、我海軍は如何に祕密を保つたか、如何なる露探も偵察隊も知ることが出來ませんでした。此の祕密る保つことは最もむづかしい事でありますが、我海軍が如何によく之に成功したかは實に大將の大智慧の結果であります。大將の聰明なる指揮のもとに、我海軍が古今未曾有の大勝利を得たのは、大なる喜びであるのみならず、我國の前途、並に東洋の前途を證明するものであります。私はこの喜ぶべき日に於て、一言所感を述べて祝辭と致します。

（「家庭週報」第二十六號）明治三十八年五月

運動會雜言

▲これ學校の力

開校より僅かに一ケ月に充たざる短日月に於て、自動的に、よく準備と練習とを計り得たるは、其の日の成功として喜ぶのみならず、實にこは本校の力として喜ばざるを得ず、國家は國民によりて成立するを以て、主權者如何に聰明叡智なりとも、國民にして獨立自營の精神なく責任を負ふの決心なくば、其の國の運命知るべきのみ。之と同じく生徒、只依賴心のみを以て一に校規に觸れざらんことを憂ふる狀態ならんには、其の教育は死せるを證せるなり。本校は若年生徒に至る迄、皆自ら責任を負ひ、一致團結して事をなすを得るに至りしは、實に本校の力なり。命なり。此の精神はまた年々發達進歩なすべきことを自信す。

▲最もとるべき點

運動會として技術の巧拙を問はんより、最もとるべき點として、其の發達をよろこびたるは、體育によりて意志の力を左右するをうるに至りしことなり。競爭遊戯に於ては、かなりに熱中したるも從容として判斷を誤らず、決して低き行爲に出でず、よく公德を守り、團體心を傷くること、絶えて無かりしは、各自訓練の結果といふべきなり。

▲選手なるもの

恰も學術研究の結果を比較するに展覽會を開き、各々最も勝れたるものを出して、互に優劣を判じ更に何れも暗示を得て進歩すると同じく、運動會に於ても、各技、選手を代表として出し、比較研究に資するなり。またこの選手なるものは、其の技に最も長じたるものにして、益々これを保護發達せしむる時は、いかほど迄其の長所を發展せしめうべきかを知らる、こは獨り體育のみならず文學、美術、音樂、科學等、何れも其の適性に從ひて、代表者を出して研究せしむる必要あり。決して事情を以て代表者を選ぶ等の事あるべからざるなり。而して各人各々長所あり。何れも必要なる地位に滿足し、最善を盡してあらんには、たとへ足なりとも、頭に耻づる所なからん。

（「家庭週報」第二十五號）明治三十八年六月

家庭週報一周年を迎へて

本紙が全く他の手を借らず、一に櫻楓會員の力によりて、昨年六月、初號發刊以來、ともかくも滿一年の誕生日を迎ふるに至りたるは、會員一同の滿足する處ならん。

今、此の一ケ年間の結果を見るに、紙面も漸次整頓し來り、且つ初めより毫も賣り擴めの手段をとらざりしにも係らず、購讀者も增加しゆく有樣なり。故に本誌の購讀者は比較的少數な

りと雖も、何れも眞面目に讀まるゝ人にして、余は屢々これ等の人々より、本誌にとりて、寧ろ過分なる讃辭を耳にしたる事あり、而して本誌により本校の主義精神が、廣く社會に了解せらるゝ事を得たるは事實なり。

これを新入學生に見るに、從來に比し、早く本校の主義を解し、精神に同化するに至れるはこれ、入學の前に於て、本誌により主義方針を充分熟考して、然る後決心を固めたるもの多きによる。

若しそれ、地方に散在せる櫻楓會員に至りては、眞にこれによりて、永遠に學校の精神に交通するの脈官なりとせり。

紙面の發達の點に於ては、容易ならざりし既往一年間の經驗により、更に益々進歩發達せんとするの希望を有するに至れるを喜ぶ。

然りと雖も、こゝになほ多くの缺點あり、其の主なるものを擧ぐれば

(一)、希望に達せざる事未だ遠し

昨年以來、全力を盡してつとめたりと雖も、なほ希望する所のものあらはれず、又これをあらはすに至る力出でざるなり。卽ち體裁整ひ、編輯に熟練する等消極的の進歩はあり、然れども日進月歩の活社會を透徹するの眼力を以て、時勢に後れず、永久に進んで休まざる精神これなり。此の精神常に燃えざる時は、其の事業は退歩す。

(二)、迂遠なる事

事に當つて適切なる事能はず、緣の遠き、關係少き點に力を注ぎて、必要缺くべからざる急所にはづるゝ事多し。「新たなる勇敢なる感動、振起せる思想は、進歩せる明晰なる頭腦の中にあり」といふ言を忘るべからず。

(三)、本末を誤る勿れ

思想を發表せんとするに當りて、文章及び言葉は末にして、思想はこれが源泉なり。

すべての詩人も、社會、人生の知識を得、次にこれを自己獨得の形式によりてあらはすなり。余は望む、活きたる社會に働けよ、社會の活劇を見よ、文學以外の知識を得よ、これまで學びたる文學書を活用して、今日の活劇の中にたち、行ひつゝ經驗しつゝ、思想をあらはす事につとめよ。

(四)、統一を保たしめよ

會全體の力を集注する事につとめよ。而して範圍を廣くし、記事を精選し、其の間に統一を保たしめざるべからず。然らざれば到底眞の發達を遂ぐる能はざるなり。

(「家庭週報」第二十七號)明治三十八年六月

女子の高等教育に就て

此頃の日本新聞に、ドクトル、スミスと云ふ人の說を揭げて、女子に高等教育を授けるを批難したのを見ましたが（四月十五日より同二十日まで連載「女子高等教育亡國論」）あれは誠に無理な議論とおもはれる。

一體、教育と女子の健康とに就いては、ボストンの醫學博士クラド氏の說が有る、卽ち婦女子に高等なる智育を與ふる事は、馨ばしからぬ生理的影響を及ぼして、或は子孫の體質を薄弱ならしめ、或は其數を減ぜしむるが如きもの、往々にして有りと云ふのが此人の說であるが、今日亞米利加合衆國の女子教育が、愈々益々盛大と成ツたに就てクラド博士の說の大部分が全く問違ひで有る事を立派に證據立る事となりました。

それは米國の、各女子大學で、大層體育に重きを置き出來得る限り身體の健康に氣を付けさせたから、遂には、高等教育を授かつた女子は、授からない女子よりは遙に其體格が宜く、又高等教育を受けた女子は、其入學前後と卒業後とを比較して卒業後の方が遙に健康を增加して居る事が、統計に依つて充分に示されたからである。

女子の男化に就て

それから又スミス氏の說に高等教育を授けると、普通の女子は一般に、殆んど男子と選ばない樣に成つて仕舞ふ、卽ち『男化』すると云ふ議論であツたが、それは教育の施し方の如何に依る物であツて、どんな教育を爲ても、男化するを免れぬと云ふ事は無い筈である、例令ばコツテンシスト（家族制の寄宿舍）などを設けて女學生等が是まで馴れ來りし所の家庭的生活を、相變らず續けさせるなど、女子には女子らしい教育の仕方をすれば、決して差支の無い事かと思はれる、是等の點に就いて、米國の教育家は餘程深い注意を拂つて居る、それは高等教育を受けた女と、受けない女とを比較して、何れが能く女らしいかを調べて見ると、矢張女子大學（尙ほ女子大學の外に混合教育と稱されて、男子の大學に這入つて男子と共に學を授かる物が有る、是は特に米國に多い）の門を潛つて出た女子の方が、如何しても、より多く優美である。

繁殖力の減退に就て

その次にスミス氏は、女子に高等教育を授けた結果として、人類の繁殖力を減ずるとあるが、それは成程御說の通りであ

る、卽ち最近三十年間に於て統計を取つた物が有つて、その統計表に依ると、高等の教育を受けた婦人に子供の少いのは、事實で有るが、左樣かと云つて直ちに之れを、高等教育を授かつたから健康を害ふた結果であるとのみ斷定は下せないのである。現今世界の各國中で、其人口の減退しつゝ有るのは、獨り佛蘭西で有つて、獨逸及び英國、米國などは、共に增加しつゝ有るが、是等英米諸國に於ても、大富豪とか、大學者とか、又は大政治家とかいふ側で、苟も大勢力を有する人達は、皆比較的に子供が少くて是れは殆んど一種の定律と成つて居るかの觀が有る、けれども是れを直ちに健康の足らざるに歸せんとするは、大早計の至りと言はねばならぬ。現今の社會に於て、各貴族や勢力家などは割合に子供の少いのは、一つは兩親の思慮の深い爲めで有らうか、卽ち佛國などでは、三人有らば三人、五人有らば五人の子に、財產を等分に配與せねばならぬ故、子供が多ければ、隨つて其の分與金高が少くなるから、夫れでは貴族の體面を保つ事が難からうなどと云ふ心配から來るのも有らう。又英米の諸國では子供に充分の教育を授け、それ相應の財產を分ち與へねばならぬ故、其將來を思ふて子供のクオリテー（品質）に重きを置くからでもあらう、故に子供の數の少くなつたのは、必ずしも高等教育を授かつた結果（健康を害ふたから）で有るとは言はれない、兎に角之れは大に研究して見る價値の有る問題である。

よし又それが高等教育に原因するにした所が、此の世界では、高等な物程繁殖力の弱いのは自然で有つて、鱈は一腹に九百萬の卵を生み、畠の雜草は、根こそぎに拔き取る事、百回二百回にして、尙ほ且つ生へて始末にこまる、然るに高等なる植物は、隨分と手數を加へても、枯れ樣、斷え樣とするので有る。又世の金滿家も二代は續くが、三代目には、川柳通り賣り家と唐樣で書くのが普通であつて、どれ程注意しても、大人物の子に大人物は、中々出來ないので有る。且つ又、此世界に、平凡な人間が十億居るのと、高尙な人間が五億居るのと、何れが果して此世界の爲めに、有益で有るかは、別に一つの大なる問題であると言はねばならぬ。

決して亡國にあらず

よしスミス氏の說に一步を讓つて女子に高等な教育を施した結果、其繁殖力を減じたにした所が、それが決して亡國にはならない、斯の如きは寧ろ、一種の新陳代謝とも云ふべきもので有つて、しかく氣づかふ程の事では無い、更に一步を讓つて、之れが爲め社會の人員を減じたにした所が、それを理由とし

て、今日の高等女子教育を攻撃し、更に女子の高等教育は無用有害の物で有るなど、絶叫するのは甚だ亂暴な議論で、到底吾人の耳をかたむくる價値のない物と云はねばならぬ。

女子大學の目的

以上はスミス氏の說に就いて一言したものであるが更らに廣く世間を見渡すと、近頃女子大學に對して種々の異論がある、卽ち女子大學は名有つて實なしと其云ふ所を聞けば、帝國大學の如き大學にも非ず、米英の女子大學に似たる大學にも非ず、然も日本の女子には、學科の程度のみ高過ぎて、徒らに方今の女子をして、男子らしく爲し、ハイカラに爲し、躰質を虛弱ならしめ、剩さへ婚期を失せしめると云ふので有るけれども、是等は最初から、一貫し來れる本校の主義及び、現狀を知らざる者と言はねばならぬ。

日本女子大學は創立の最初に於て、『日本の女子』に適合せる、高等な女子教育、卽ち日本の歷史や日本の地理や其他に鑑みて、『將來の日本』に必要なる婦人を養生せんとするの目的で有つた。今日も亦元より其の方針である。然るに英、米、獨等に於ける女子大學は、大抵男子の大學と殆んど同じ學科目及び程度を有して居て其目的とする所は言ふまでも無く、男子と同じ樣なる働手を造るに有るのである。けれども本校は大に之と趣を異にしてゐるのである。卽ち日本の女子に必要なる智識を授け、日本の家庭に必要なる技藝を教へ、而して日本現今の社會を、漸次進步し發達し、向上せしむるに適當なる婦人を養成するを以つて、目的とする物であるから、英米諸國の、大學卒業の女子の如く、男子の職業を奪ふ恐れも無ければ、從つて男らしく成る樣の憂ひも無い筈である。

近頃米國の一雜誌（ペタゴジカル、セメナル、クラーク大學の總理スタンレー、ソール氏發行）に本校を批評して、日本の女子大學は、世界でユニーク（唯一の物）で有ると、云つて居りましたが、實際歐米各國の女子大學と比べては、大に類を異にして居る、本校は何所までも教へる所は、日本の女子に必要な物で無くてはならぬから、他の男子の大學と學科の程度を同じうせんともせず、元より帝國大學とも異へば、英米の女子大學とも大に異つて居る次第である。

婚期の喪失に就て

それから本校は、早いのが十七歲で入學して、二十歲で卒業する都合であるから、二十歲にして女子が配遇者を要求するなら、そんなに晩婚と云ふ可き際の物では無く、寧ろ早婚の嫌い

が有りはせんかと思はれる位、蓋し多望なる將來の日本國の爲めには、隨分と精神も身體も、しつかりした婦人でなくてはなるまいと思ふ故自畫自讃の樣であるが、本校を卒業した位の所で、年齡までが、恰も善く、結婚時期の成熟した所かと思はれるのである。

お轉婆に就て

又女子大學の生徒は、ハイカラになり、お轉婆に成つて、卒業後に社會へ出ても、實地には少しも役に立たぬなどの批難がある。これに對して一寸云つて置きたい事が有る。元來高等女學校位で、學問を廢止して了ふから、其思想が生半弱で、智識も、德操も、眞の教へは充分に呑み込まずして、或は西洋がつて得意で居り、或は何の會何の義捐と、外の事ばかりに奔走して、家庭の事が治まらないのである、卽ち學問が半熟なる結果であつて間違ひや行違ひの有り易い順序になるのである、今、本校生徒の經驗に依つて見れば、學問に於ても、將た年齡に於ても、彼等よりは、いくらか進んで居るだけ、それだけ浮世の風潮にも容易に誘はれず見識も相當に出來て居れば、分別も稍や充分に有つて、そんな行違ひや間違ひは少いのではあるまいか。凡そ世の中に教育を高めたから、生意氣に成り、お轉婆に成ると云ふ理窟は、決して有る物ではない、眞に充分に教育されないから、譯が分らず、生意氣を働いて居るので、タトエバ彼の官署などでも、人民に對して、兎角威張りたがるのは多く下役である、生中に少しばかり有る物は、反つて無いより惡い事例は澤山有るけれども、充分に有つたら教育は至極結構な物に相違無いのである。

又スミスの論文に、米國の女子の墮落したのは、其原因高等教育に有りと、云つて有るけれども、私共から見れば甚だ無鐵砲な言ひ方である。若しも米國に女子の高等教育が皆無で有つたならば、それこそ今頃は如何程米國の婦女子が墮落して居るか、恐らくは比較にならない事かと思はれる、早い話が、米國婦女子の高等教育が米國の婦人を甚だしく墮落せしめつゝ有りと云ひ〳〵、米國人は米國から、女子の高等教育を排棄する事が出來ないのではないか、それは何故で有るかは多言を要しない。凡そ一利あれば必ず一害が伴ふ、しかし害よりも利の方が多かつたら、それで滿足せねばならぬ、若し夫れ、不利益なる點、缺けたる點、弱き點有らば、其教育の方針若しくは其教育の手段を改良するまでの事である。

私が二十年來經驗し得たる所に依つて考へると是等の點は、追々善く成つて行くかと思はれるから、少しも心配するには及

ばない。

世間ではまだ／＼私共の學校を兎や角と云ふ者が有る樣だが、開校以來の四ケ年に、一般社會が女子に對する態度や、行動を少からず善良なる方面に向はしむるを得たかと思ひます。女學生等が或る種類の人達から、或は道で行會つた時、故無く揶揄半分に罵詈し、或は汽車中に同席した時、亂暴にも愚弄し嘲笑しつゝあつた事などは是迄折り／＼目擊する處で有つたが其の時此方は必ず、深く謹んで正しくして居ましたから、今日は甚くそれらの惡風が減少して、最早往日の態を見る事がなくなつたのである。

女子大學の校風

女子大學校で最初から特に注意したのは『校風』である、一種の善き氣風を、校内の生徒等が自ら造つて行く樣に致させましたが、本年の新入學生の如きは、四百餘名の多數なるに關はらず、昨年に比較して餘程な短時日に、早くも本校通有の氣風に感化する事が出來ました。

現今生徒の數は、總計千三百十九人で、内九百人が附屬高等女學校の生徒で、他は悉く大學部の本科生や研究科生で、都合九棟の寄宿舍には、八百名近くの生徒が居て、例の家族制度（三十人若しくは二十七八人を一家族とす）にして、各自に其責任を持たせて、各寮毎に又其寮の寮風を造らせる樣にして居ますが、各生徒等が自動的に、各自物事を改善して行くから、之を一々、教師の監督や、規則の手位で支へやうとするよりは遙に好結果を奏して居ります。

生徒等が目出度卒業して、一旦本校を放れた後と雖も、尙ほ寮にのみは相變らず、親しく往來してる者も少く有りません。卽ち寮を以て彼等の第二の家庭として居るのである。同時に通學生と雖も長幼相擁護し、親善する樣にして居るのである。

牛舍に乳牛有れば、畠に野菜有り、更に銀行部等有り、皆各生徒等が自動的に營み居る所で、宛然一個の小社會を形造れる姿である。

卽ち之が就中歐米の女子大學と異る所なのである。卽ち本校は、智識のみを授くるの學校では無く、智識以外に或る貴い物をも教へて居る心算である、尙ほ年月を經るに從つて、追々世間の攻擊や、各種の悲む可き弊害等をも、全く除き得るかと信じて居ます。

（「女學世界」第五卷第九號）明治三十八年七月

歸鄕のいへづと

指折り數へし暑中休暇も愈々今日は來れり。過去一學期間は、新入學の諸子に於ては、割合に長日月の如く感ぜしならんも、上級に至るほど萬事に多忙に、從つて非常に時の短かりしを感ぜしならん。而して歸鄕に先だち、如何にしてこの二ケ月の休暇を最も有益に過しうべきかを考へて計畫を定め、歸鄕の用意を調ふる必要あり。其の用意の主なる事の一は土產を調ふる事なるべし。扨てこの土產を調ふるは價値ある事なるべきか否かと云ふに、隨分價値あることなり。余も自らの經驗を考ふるに、十三歲の時、獨り鄕里を離れて遊學し、一ケ年の後歸鄕の時に及ぶや、たゞわが親を喜ばしめんが爲に土產を調へたり。また幼年の時、魚を捕り、獸を獲るに、獲物を荷うて歸る喜びは、たゞわが親の心よりの喜びを見ん爲なりき。口に讃辭は稱へずとも、心より眞に喜ぶ喜びは、またわが無上の喜びなりき。卽ち親の喜びは、わが喜びなればなり。諸子もまた一年間、一學期間學んで得たる知識、品性をたづさへて故鄕に歸り、父母の君が我子は、斯く迄知識進み、かくまで品性高まりしかと、心より喜ぶその笑顏に接するを喜ぶならん、これ凡て人情として自然なるのみならず、親の鴻恩に報ゆる所以なればなり。

土產に有形無形あり、また上中下の種類あるべし。たゞ兩親より與へられたる學費の幾分をさきて、贖ひえたる品物は最も下等の土產なり。中等に屬するものは有形なれども、自らの考へを以て材料を選び、趣向をこらして作りたるものは特に、大いに價値がある。過日仙波少將より送られたる編物細工の如きは、支那の貴顯、肅親王の皇女が手づから作られしものを少將に下賜せられたるものにして、少將は之を我校に贈りて、かの支那の女子教育が、いかに萠芽せるかを知らせ、また將來日本婦人が東洋に於る責任のいかに重きかを奬勵せられしならん。さればこの小さき贈物には、價値あり、感情あり、また一種の美感の伴ふものあり、かの大隈伯爵夫人の寄贈にかゝる細工物の標本の如きも、また夫人自ら多くの時間と勞力とを費され、佐賀錦の如きは絲より織りて作られしものなりときく。現今獨逸の皇帝は、世界無比の手腕家にして、工藝も文學も、擧國、皇帝の右に出づるものなきほどなるはその幼時の教育、宜しきをえたるものにして、藁布團の上に起臥せられ、平民の學生と自由競爭をせられたりといふ、この賢明なる皇帝はまたその皇子女を育て給ふに心を用ひさせられ、皇女方が手づから作りた

るものを捧ぐるの時、非常に喜ばるゝといふ。

幼時よりかくの如く教育せらるゝを以て、豪傑も出で、かゝる皇帝を上に戴く國民また世界に雄飛するをうるなり。最も上等の土産は無形にして、所謂、本校に來りて新たに養ひたてし品性、一學期間の努力によりて加へたる實力等にして、こは歸郷後、言語、動作によりて、自らあらはるゝものなり。この心に飾りたる錦は、實に親にとりては無上の喜びにして、郷里の人よりは尊敬せらるゝ價値あるものなり。二ケ月間の樂しき月日を郷里に於て過し、九月本校に歸るに及びても、また土産を調ふべし。こは中と上との部類に屬すべきものなり。

學年別を變じて學科別となせる本學期に於て、消極の進歩はなしたれども、未だ積極の進歩を見ず、放課後等各教室を巡回するに、植木はよく培はれ、掃除は清潔に行はれ居るも、未だ鉢の數も依然たり、棚の標本もその數、一つも増さゞるなり。これ甚だ遺憾とする所、故にこの休暇には、動植物の標本採集の爲、地理探險の爲、實地の經驗を蓄ふる爲に出立するの考へを以てせよ。諸子が蒐集したるこれ等の凡ては來學期の始めに於て、自動的に分類し、整理すべし。

余が米國に於ける時、一農家に遊びしに、兄は野を分け、山を走りてあらゆる卵を集むるかとみれば、弟は海濱をあさりて貝殼を集め、其のまた一人の弟は自ら顯微鏡を作りて動植物の組織細胞を寫し畫となせり。

これ等は凡て自ら分類し手づから棚を作りて飾る、かく非常の興味を以て遊戯の間に行はるゝ自然教育のいかに價値多きかを考へよ。これ諸子に自ら標本を集め、動植物等を養はしめんことを欲する所なり。又來るべき新學期は全校の生徒皆新しき健康、品性、實力、經驗等、土産の多くをたづさへられんことを望む。

夏期休暇は、必ずしも遊山見物に費し、避暑地に安逸を貪る必要なきなり。否必要なきのみかこは誤れる考えなり。見よ我國の現狀は如何、講和の聲、一度至るや、祝宴と稱して至る所に飲酒に溺れ、弦聲に舞ふ。これ我國民の不眞面目にして忍耐力乏しきによれるなり、恐るべきこの濁流は滔々として、青年男女を驅らんとするなり。已に老人、紳士、貴顯等の惡習慣に犯されたるものは知らず、春秋豊かに希望に富み、責任重き青年男女をもまたこれに趣かしむるに忍びんや。

この休暇に於ては讀書せんよりは、勞働をとり日頃の知識を應用し、經驗を重ね、實際社會に入りて、實地活動するの習慣を養ふべし。然れども讀書を廢せよとは云はず、毎朝健全なる讀物を選みて讀みこなすべし。現時に於ては讀むべき書は只一

卷にして讀むべからざる書は數千卷數萬卷をも超ゆるなり。我國男女の習慣を見よ。男子は有害なる酒、煙草の刺戟によりて身心を醉はしめ、僅かに樂しみを貪り、女子は酒の如き、煙草の如き腐敗せる、若しくは慘忍酷薄なる讀書の刺戟によりて、同じく身心を醉はしむ。凡て彼等は、中毒に感じ、隨落の淵に沈まざれば、確信なき薄志弱行の徒となり終るべきなり。

腐敗文學にあらざれば、泣き文學、笑ひ文學の外青年をして大いに奮起發展せしむるの文學に乏しき現時に於ては、諸子もし讀書せんとならば、最も尊敬する先輩の注意をうけざれば、容易に判斷し能はざるなり。この必要によりて、積極的文學の必要を深く感じ、我校の櫻楓會は、この度、家庭部、社會部、教育部研究會の外、藝術研究會を組織するに至れり。云々。

（「家庭週報」第二十八號・終業式講話）明治三十八年七月

自然と教育

茲に私の謂ふ所の自然と教育といふ事は、換言すれば農事、園藝、牧畜と教育といふ事になる。私はこれ等の事を教育の上に加へるには、如何なる方法によるべきかといふ事に就て述べようと思ふ。近來我國にも農業、園藝、牧畜等を、教育に加へなければならぬといふ說が高まつて來て居る。これは如何なる原因によるものであらうか、私の觀察によると今日歐米の最も進んだ教育社會に於て、自然研究と手工教育との二つが盛んに行はれて居る。この二つを教育に加へて、從來の傳統的教育の弊を改めるといふ事が、卽ち社會的實業的教育と稱へられるものである。

▲自然研究の起源並に現今教育の趨勢

此の自然を研究する樣になつた起源は、多分彼の米國に於て有名なる博物學者アガジーの頃であらうと思ふ。此の人の教育主義は卽ち「學問は書物によらずして自然を研究せよ」といふにある。此の教授法によつて生徒を教育された。其の後門弟連が此の精神を受けて、教育上盛んに此の主義を主張した。而して近來此の自然研究といふ詞が、かゝる教育法を云ひあらはす一種の名詞となつた。なほ一層其の源に溯る時は、ソクラテス、アリストートルあたりの時代にも此の思想はあつたのである。近世に降つては、ペスタロッチ、ルーソー、フレーベル等に由つて、その必要が認められ、經驗せられる樣になつたのであらうと考へる。併しこれが一般に缺くべからざる教育の要素と認められ、奬勵される樣になつたのは、近來の事で、漸次諸

種の學校に實行されるやうになつたが、都會近邊の學校では、此の教育主義に適する設備の出來ぬために、大いに教育の進歩を妨げられるの觀がある。

紐育市の或學校の如きは、百萬圓を投じて北面の小區域を購入し、市中に植物園を設けて此の方法を實行しつゝあるが、此の事實に由つて考へても、如何に教育上重んぜられて居るかといふ傾向を察する事が出來る。我國に於ても當局者は勿論、漸次識者が其の必要を感じて、將來大いにこれを教育に加へんとしつゝある事は明らかである。余が先年米國に遊學した頃、此の趨勢が國の教育社會に現れかけて居つたが、丁度コロンビヤ大學で、其の設備に着手される時、彼の地に居つて私は深く其の必要を感じた故に、本校では早く此の教育法を實行せねばならぬと思つたけれども、創立當時は種々の事情に妨げられて、其の運びに至らなかつたが、漸く昨年からこれを加へたのである。又來年から開始される所の本校附屬幼稚園、小學校には益々これを盛んに奬勵する考である。夫れで私の考では今日眠つて居る教育を醒まし、其の宿弊を改善するには、此の自然研究と手工教育との二者は缺くべからざる要素であると信じ、豫て此の思想が廣く一般に行はれん事を希望して居つたが、此の度福島君（婦女新聞主筆福島氏）が夏季講習會を御企てになつて、諸姉が暑中にも係らず御出でになつた御熱心を歡喜すると共に、諸姉の力に由つて我々の主張する所の農業、園藝を始め、此の自然研究をして教育上に効果を顯す樣に至らせたいと、深く希望するのである。

此の「自然と教育」といふ事に就て、便宜上五つの項目に分けて述べて見よう。

▲第一自然研究の意味

自然と卽ち戶外のあらゆる自然物、及び其の現象又は作用等を意味して居るが、此處にいふのは主として動植物の如き生命あるものをさすのである。それで自然を學ぶとか、研究するとかいふと、大變むづかしい事の樣であるが、平たく申せば卽ち兒童の周圍にある自然を、兒童自身に直接に觀察せしめ、且つ自然を愛する心を養はしめるのである。此の教育法によると生物を直接五官に觸れしめて、これを愛する心を起さしめ、同時に其の花なり、鳥なりに對する溫かき同情を、兒童の心の中に養成せしむるのである。それでこの自然研究といふのは化學でもなく、生物學でもなく、博物學でもなく、又初歩の科學でもない。其の意味の最も近きをとれば實物教授の如きものであるが、それとも亦大いに異なるものである。

▲第二自然研究の目的

此の目的に二つある。

一は新しき眞理を發見する事、卽ち人類知識の分量を增加せしむるを目的とする。

二は自然研究に由つて、被教育者の心を直接自然に接せしめ、これを研究し之を愛するの念を養ふ事、卽ち人類生活の幸福を增進せしむるを目的とす、第一の目的は科學者に由つて達せられるが、第二の目的は吾々の云ふ所の自然研究で、これに依つて人々の生活を豐富にする事が出來るのみならず、最も確實なる知識を養ふに必要なるものである。而して此の自然研究が段々進步すると、植物學、生物學の研究に入り、こゝに初めて第一の目的をとり、科學專門の研究が出來る樣になるのである。併し此の自然研究は科學ではなく、其の眞髓は精神であると思ふ。故にこれは知識といふよりも、精神に重きを置くから、宗教、文學、哲學、卽ち感情、情操といふ傾きを多く有するものと思ふ。

▲第三自然研究と他の學科との關係

此の自然研究といふ事は、從來採用して居る所の種々の科目の外にもう一つ別の仕事を加へたのではなく、又今迄の理學、地理等を學ぶ上に於て學生の感情を惹き起し、其の活動を助けて彼等の知識を確實にするための補助學科でもなく、無論これ等の事も其の結果として附隨しては來るが、ただそれのみに止らず、更に一層重要なものであつて、これは凡ての學問の基となるものである。未だ言語の通じないさきに、未だ書物の讀めない前に兒童が其の心に受ける自然の感化は實に夥しいもので、彼等の知識の基となり、彼等の學問の土臺となるものは、自然研究を措いて他に求むる事は出來ない。如何となれば此の自然研究の特色は實際であり、確實であり、自發である。教育は是非とも實際的でなければ、自然的教育を施す事は出來ないのである。然るに我國從來の教育法は、殆ど眠つて居る。否、死んで居る所の方法といふも不可なきもので、兒童は極めて不自然に機械的に働いて居ると云はねばならぬ。故に實際から全く離れて居るために、兒童の心は少しも想像のつかない事のみを教へられ、其の結果として兒童は書物より學びたる事と實物と大いに違ひのある事を感じ、遂には却てこれを怪しむ樣になるので、彼等は實際事物の變化現象を見ても、少しもこれを了解するの知識なく、只書物の上のみで知つて居るのである。たとへば一首の歌を作るにしても、唯立派な詞を暗誦しておい

て、實際見た事も聞いた事もなく、自ら深く感じた事もない事を作るのであるから、大思想家も大詩人も、到底養成する事は出來ない。これが今日我國教育の缺點である。これが教育を殺して居るのである。これが今日青年男女をいためて居るのである。薄志弱行の人を作つて居るのである。

自然研究は卽ちこの缺點を補ふべき唯一の方法である。これを教へる教場は如何なる所を選ぶべきかといへば、先づ戶外と思うてよいのである。從來の教場の如く、四季少しも變化のないただ夏冬に、ストーブを備へたり除いたりするだけの、極めて無味乾燥な場所に、生徒を閉ぢ込めてこれを最も大切なる教場と考へて居るのは、大いなる誤りである。吾々の理想の教場は天然である。兒童をして變化して居る所の天然に接せしめて、其の中で極く自由に自ら學ばせ、自ら研究させ、自ら活動せしむるのである。故に吾々の所謂、教場は野であり、山であり、川である。到る所教場とならぬ所はないのである。かくの如き、自然界の活きたる現象に接せしめて、活動的に教育する事、卽ち自然研究である。

▲第四自然研究の教授法

自然研究の教授法に二つある。

一、事實によりて教授すべき方法

二、想像によりて教授すべき方法

科學者及び其の他の人々は、天然を解釋するに當り、先づ事實によりて自然の現象を分析し、分解することによりて其の知識を得るものであるが、文學者、美術家、又は兒童などは、只事實によるのみである。感情、想像、又は同情によりて、直覺的に天然を見る傾向がある。併し如何なる科學者と雖も、感情、想像のないものはなく、如何なる詩人と雖も、事實に對して少しも知識のない事に同情の起る道理はない。斯くの如く、この事實にせよ、想像にせよ、全く同時に人間の心の中に起るものであつて、決して事實なり、想像なりの、一方に偏するものではないのである。兒童の教育にも、此の二つの能力が結び付いて並び行はれる事が必要である。故に此の二つの要素を缺くことは出來ない。或科學者は、兒童も、婦人も、直覺的であると言つたが、殊に兒童は直覺的に天然を觀察し、自分と同じ樣な同情を以て、之を想像するものである。

先日私が輕井澤に於て散歩の節、ふと澤山の蟻が忙しげに地上を這つて居るのを見つけ、なほよく觀察した所が、或岩の下に穴があつて、其處に食物を運んで居つたので、或は穴から土を運び、或は二三尺も上の處に自分の身體よりも大きなものを

引いて行く等、それ〳〵目的のために働いて居り、それから隨分遠方まで行くものもあるが、一體これらの蟻は其の歸途如何にして自分の穴に歸つて來るのであらう、其の行路には何か目標となるべきものがありはせぬかと、不思議に感じたのである。然るに翌日小山に登つた時、地上に白く銀の樣に光つた跡が網のやうについて居つて其の筋はなめくじの跡にしては小さい。して見るとこれは昨日の蟻のではあるまいか、自分で這つた所には斯樣な一種の臭氣か何かを殘して、後から來るものを案内するのではないかと云ふ樣な感じがしたのであつた。若し兒童がかゝる事を見たならば、必ず石を取り除けて見るか、穴を掘つて見るかして、彼等の頭に蟻のホームや寢床などを想像し、又夫れ等の下等動物の食物は如何なるものであるか等といふ事に迄想像が働いて、精密にそれを觀察するであらう。これが兒童の性質であつて、其の間に同情が起るのである。獨り兒童は動植物のみならず、太陽や星などに就ても、同樣なのである。例へば太陽を見て、天にある金の鈕であるとか、天の神の眼であるとかいひ、又或星は自分の友であると思ひ、種々の想像を描きつつ其の星を見る事を無上の樂しみとして、每夜其の星が出るのを待つて居る等の事は珍しくはないのである。

斯樣に兒童が生命なきものをも有情のものと見做す所は如何にも詩的で、彼等は概して事實的よりも文學的、詩的の觀察を持つて居る。併し前述の如く想像空想のみに偏するは、最もよくない事であるから、其の詩的の思想、想像を必ず事實に結び付け、明白なる事實に由つて、確實なる知識を得させる樣に、兒童を導かねばならぬ。兒童が太陽や、星を見て、其の方に飛んで行きたいといふ想像は天外遙かに描いても宜しいけれども、其の前に、先づ自分の實際生活して居る所の、此の世の中の事實を土臺として、其の想像を太陽にも、星にも及ぼすべきである、又此の自然研究は、決して、書物を以て教授するのではない。卽ちアカジーの言の如く、書物に賴らないで、自然其の物を學ばしむるのである。書物を讀ましむる時は、其の實物、事實を示して、それを學ばしめたる後に、書物を讀ませて、其の不足を補はしむる位に止まるので、斯くの如き教授をなすには、教師の最もよき指導が必要なのである。

教師は指導者たれ　生徒をして模倣的にせしむべからず。この教授法によると教師は教へるのではなく、導くので、卽ち暗示を與へる指導者となつて、生徒自ら學ばしむるので、模倣的ではない。例へば花に就て教へるにも、從來の教授法によると、教師は先づ或花の標本を示し、或は書物で教へて置いて後、生徒をして之と同じもの、或は類似したものを持ち來らし

む様な事であるけれども、自然研究の教授法として、我々の執る所の方法は、唯花に就ての詞を知らしめ、或は説明を與へるのではなく、生徒自身によく實物を探さしめ、教師も亦生徒と共に自然の風光に接して、或ものを發見し、これは何であらう、この事實は何故であらうといふ疑問を起して、其の原因、道理を調べて行くのであつて、これが從來の教育法と異つて居る點である。

今一つは從來の教授法では、何によらず先に定義を示したものである。これは大いなる誤りで我々の考によると、兒童自ら自然物を研究し、觀察したる結果によつて、生徒自身に其の定義を作らせるのである。故に此の自然研究を教授する上に最も大切なるものは、教師と生徒との態度である。即ち教へられるのではなく、自ら學ぶといふ態度、又教へるのではなく、導く態度が兩者にとつて必要なのである。

教師の資格　自然研究を導く教師の最も大切なる事は其の人の人格である。兒童が其の人格に接して、自然に感化を受ける様な人格のある教師でなければならぬ。そして其の人格又は自分の經驗に照らし、且つ其の生徒の性格を學んで、これに就ての自分の教授法を編み出して、生徒を導き得る所の實力が必要なのである。

斯くの如き人格を作るには、次の二つの事が必要である。第一熱心、第二知識、これである。

專門的の深い知識は少くとも、能く事物を觀察する事が出來、其の思考を確實に統一して、熱心に導く事の出來る人ならば此の自然研究を導き得る教師といふ事が出來るのであらう。

教授題目の選擇法　自然研究を教授するには、先づ今日其の題目を花にしよう、明日は馬にしようかと云ふ様に割り當てゝ、豫め定むべきであるが、又如何なる題目を選んで教ふべきかといふ事が、問題であらうと思ふ。

其の選ぶべき題目は兒童に緣遠いものではいけぬ。極めて兒童に接近して居るもので、兒童が直ちに見出す事が出來、且つ最も夫れを愛し、又最も喜ぶ所のものを選ばなければならぬ。さうすれば、兒童は最初餘り興味をもたなかつた物でも漸々に兒童との關係が深くなり、其の關係が密接になるに從つて、兒童の興味も高まつて來るから、いくらでも其の題目を見出す事が出來るのである。

如何なる教場及び器械を用ふべきか　教場は時と場合とに應じて室内で學ぶべき必要もある。けれども、概して戸外で學ばせるのが最もよい方法であらう、又それを研究する器具は、先づ鳥籠とか鳥の巣とか、其の他硝子箱の如き器具があれば、充

分であると思ふ。そして十二歳以上になれば極簡單な顯微鏡等を用ひさせ、夫れ等の器具は出來るだけ兒童自身に製作せしむる事が又教育上必要な事であるが、今この教授につき、最も重要な事を擧げて見ると

一、事實に就て、二、事實に就ての說明、卽ち事物の道理、

三、生徒の心に殘つて居る所の疑問、

以上の三要素は自然を研究する上に於て、如何なる事物に就ても必要である。例へば花を見る事は一の事實であるが、事實には必ず原因があるので、夫れを知る事は、兒童の最も望む所なのである。

今一二の例をいへば、或一種の枝を研究するのに、兒童が三人居れば、三人共に枝に就ての觀察が違ふのである。或者は「この枝は大層曲つて居る」といひ、或者は「それは赤い枝であるが、こなたは靑い枝である」等といひ、又他の者は「この枝は同じ幹から出て來るのに、三本の枝が皆違つて居るのは何故でせう」といふ樣な疑問をよく起すものである。其の時教師は、各兒童の種々なる答、又は疑問の中で、最も共通して適當せる事、又凡ての兒童の注意を惹く樣なる問題を選んで、一層興味を起さしめ、其の事物の在る原因などに就て、兒童自ら考へさせ、或日は森などに連れて行つて、既有の知識を愈々確實にし、それに因つて新しき經驗を得させるのである。それで兒童は、自然に就て却々難しき疑問を起して、教師や、父母等に尋ねるから、教師でも、父母でも、隨分知らぬ問題が起るのであるが、其の時知らぬと言ふのは、教師なり、父母なりの威嚴が落ちる樣に考へられるけれども、決してさうではない。是は教育者の最も大切なる事で、知らぬ事を知らぬと答へるのは、却て其の人の人格を、益々高からしむるのである。故に知らぬ問題は宿題として、教師も、生徒も、共に研究するのが宜しい、又生徒各自に調べさせて其の結果を見るも善からうと思ふ。卽ち此の問題の起る事が、教師にとつて最も大切な事である。教育家といふ者は何時迄も先生と云ふ考をもたずに、生徒と共に學ぶ、研究するといふ事が必要である。我々の知らぬ事を、却て生徒がよく知つて居る事もあるから、生徒から學ぶといふ事も忘れてはならぬ。又教師にせよ、母親にせよ、自分よりも優れたる生徒又は兒童を作ることが出來れば、それが教育者にとつては非常な名譽であり、又其の母親は益々尊敬せらるべきものである。

▲第五自然研究を教育に加へたる結果及び其の價値

終りに臨み、此の自然研究を教育上に加へたる結果、及び價値といふ事に就て述べたいと思ふのであるが、時が迫つたから遺憾ながらここにホッヂ、スタンレーホール諸氏の言葉をひいて、この話を結ばうと思ふ。

「自然研究と人生」といふ書を著したホッヂは、これに就て六つの價値を認めて居る。

一、美術的　二、倫理的　三、宗教的　四、教育的　五、心理的　六、經濟的

なほこの書をかく前に、左の事を云うて居られる。

「私に最初に於る動物と、自然の美とを保つために開拓せざる原野と、花園とを與へ、又私のために故郷の家の傍に美しきニレの木や、野の美しき草花を植ゑて下された所の父上に、この書を捧げませう」

實に私の經驗に照らしても、如何に自然が兒童に感化を及ぼすかといふ事を深く感ずるのである。私は幼少の時から遊び馴れた山や、川や、丘や、又最も好きな谷間などは決して忘れられない。我々は此の幼少時代に於る自然の境遇に依つて、如何に高尚なる志を鼓舞せられたるか、又これが教育上如何なる良感化を與へたかといふ事は、實に計り難いのである。

スタンレーホールの「アドツセレンス」卽ち青年研究と云ふ大著の中に、

「自然を愛するといふ事は、文學、美術、宗教、哲學、化學等の基礎を與へるのである。人間の宗教は、自然に接する事から始まつたものである」

と書いてあるが、私も至極同感である。私は今後我國に起るべき文學、宗教、科學は、自然に接する事に重きを置かなければならぬと考へる。夫れで私は、諸姉が農業、園藝、家畜等を御研究なさる事を非常に喜ぶのである。諸姉の中には、既に家庭を有つて居られる方もあらう、又教育に從事して御出での方もあらう。孰れの方面に拘らず皆さんが此の主義を持つて起つて、社會を導いて戴きたいのである。此の自然研究を導く所の教師は、無論必要である、又孰れの學校でも音樂や、裁縫などの專門家と同じく、この自然研究についての需要が出來てくるであらう。併し諸姉が悉くその專門家となるには及ばぬ。兎も角も御婦人はこれが如何に大切なものであるかといふ事、並に他の學科との關係を調べて家庭にも學校にも、此の要素を入れる事に、一致協力せられんことを切望するのである。

（「家庭週報」第三十一、二號・婦人農藝會）明治三十八年七月

家庭の意義

家庭、學校、社會は櫻楓會の三要素であつて、之は今日の文明を拵へて居り、又發達させて行く所の三要素である。故にこの三者は孤立することが出來ない密接な關係を持つて居るので、此の三者は我々生活の三階段、又は三方面と云うても宜しい。今日は其の要素なる家庭について云はうと思ふ。

宇內の進化によつて拵へあげられたるもの丶中で一番貴いものは我々の精神であるが、其の精神の完全を得るには先づ完全なる身體を要し、完全なる身體を得るには完全なる家庭を要し、完全なる家庭を作るには完全なる學校を要し、完全なる學校を得るには又完全なる社會を要するので、此の四の境遇を完全なる調和、單一の中に善く發展し得る人は、最も偉大なる人、最も善良なる人、最も幸福なる人と云ふことが出來る。此の精神と云ふものは眞の我である。家庭で大きくなり、學校で大きくなり、更に一段大きくなつた所の自我が卽ち社會である。斯かる順序で發達するものと云ふことが出來る。

私共の身體及び家庭といふことに就て、一言申したいと思ひます。我々の靈と云ふものが基となつて身體が出來たであらうか、或は身體が基となつて精神が出來たであらうか、之は哲學上の問題であるが、先づ夫れ等の事に於て、知つて居ることは、身體のない靈といふものはなく、又靈なしに生命を保つて居る身體はないのである。精神がなければ身體は死んでしまふのであるから、此の二者は一の者である。又離れて存在することも出來ないのである。さうして活動の方から云うても共に働いて居ることは事實であります。之は前から我々の思うて居たよりも驚くべき程密接なものであります。我々の精神の健全なること、完全なること、快活なることは、どうしても身體によらざるを得ないのである。故に私共は精神の働きをしようと思ふ時には是非身體といふ境遇をよく拵へねばならぬ。我々は物を考へる時にインスピレーションを受けんことを希望する。一度インスピレーションをうける時には、我々の思想は非常なる勢を以て活動を始め、忽ち種々の考が群り起るのである。玆に於て其の群り起れる思想を早く纏めようと云ふ願望が起るのである。この何人も物が明らかにわかる明晰な頭腦がほしいと思ふのである。忍耐力が欲しいと思ふのである。さうして事に耐へる身體がほしいと云ふことになる。或人は何事をなすのも只精神であると申します。之も一理あることではあるけれども、其の精神は必ず身體の健康によらねばならぬ。明晰なる頭腦、

決心忍耐など云ふものは皆健全な身體の働きに依る。我々の靈妙なる精神の作用と云ふものは、我々の身體の中の潜伏力が發現するものと云うて宜しい。夫れで我々の精神は身體と云ふ器械の助けを得ねばならぬ。換言すれば、身體といふ、境遇を得なければどうしても精神は成立しないのである。是は最も玄妙なものであるが、例へば極めて解り易い五官の作用にしても明らかなことであります。若しも身體の健全を失うたならば、精神の働きは其の半ばを失ふのである。。物を考へるにしても、書物を讀まねばならぬ。人の考を聽かねばならぬ。手を動かし、足を動かし、世界の事情に通じなければなりませぬ。故に身體を少しも構はずして、立派な考を作らうとする人があるが、夫れは出來得る筈がないのであります。夫れで我々の修養をするには、是非とも身體といふ境遇を作らねばならぬ。夫れと同様に身體の力を增し、健康を增進することは、我々の家庭から得ねばなりませぬ。夫れで家庭は凡て人間の能力の潜伏して居る所の場所である。故に社會學者は家庭をさして Basic unit と云ふのである。道德でも宗教でも凡て家庭に其の基を置いて居るのである。故に社會は必ず健全な家庭を持たねばなりませぬ。玆に一つあなた方の間違つた考を正して置きたいと思ひます。

家庭は結婚によりてのみ成立すると思ふのは間違ひである。獨身者は家庭を持たないものと思へば誤りである。之が人のライフを不完全にする大原因であると思ふ。併し誤解をしてはならぬ。結婚をすると云ふこと、子孫をあげると云ふことは、人間の自然であつて、又結婚と云ふことが家庭の一要素であることは相違ないのである。併し夫婦があり、子孫があるのみであるならば原人時代の家である。是は只感情の家庭、本能の家庭である。動物でも之を持つて居るのである。併し人間のホームはそれのみに止まらずもつと高尚なものでなくてはならぬ。我々は半ば動物的の所もあるけれども、その動物より勝つて居る所は精神である。故に人間の家庭は精神的の關係が加はらなくてはならぬ。例へば此所に母があり子供があるとすれば、之は動物にもその關係はありうるのです。もし其の母が衣食にのみ心を勞し、只月給の額と云ふこと計りを思うて、我子の將來大いに成す所あらむとする事をも察せず、天下國家の爲と云ふことは少しも解らず、只、美衣、美食をのみ、これ喜ぶといふ様な人であつたならば、其の母子の間には、精神的關係といふものはないのである。精神的愛情というものはないのである。夫婦にしても、妻が只夫の官職を恃みて衣食を立派にしたいと云ふ位な者ならば、決して眞の夫婦ではない。唯肉體上の關係

があるのみである、唯それだけで人間の家庭がどうして成立するであろうか。

さてもう一つ考ふべきことは精神的の家庭は出來ても、たゞ昔からのことを繰り返すのみではいけない。家庭は精神上よりいふも物質上よりいふも、進歩といふ事が伴はなければならぬ。其の意味から云ふと、昔から進歩發達して時々刻々歩を進めて行く人ならば、皆家庭があるのである。進歩して行く人は假令獨身であつても家庭をもつて居るのであります。家庭のないといふは人間の人間たるべき家庭がないのである。我々は生れてから死ぬ迄家庭が要るのである。子供の時には、凡ての事の發達する所、壯年時代には理想の出來得る所、老年時代には天國とも云ふべき所の家庭がなければならぬ。故に子供の時から誰も皆家庭を要するので、ブロークンホームと云ふのは卽ち己を破つたものである、然らば、其の家庭とは如何なる所であるか。

第一　家庭は心身の疲勞を回復する所、卽ち休養の場所であつて、今迄有せる力と品性よりもそれ以上高いものに進みうる我々を改善し行くに足る所でなければならぬ。我々は非常に活動するのである。故に其の勞れたる者を回復させる所がなければならぬ。人間が勞働して居る時身體又は精神の働いて居る時には腦が勞れるのである。之を如何にして回復するかと云ふと、變化を與へると云ふことが大切である。

私は幼少の時からの習慣によつて、境遇について我儘なことは申しませぬが、今日の身體には非常に休養を要するのである。今日は以前よりも大切な精神が私の身體にあるのである。これを働かせるのには、これに適當した境遇が要るのである。夫れで眠る時には安眠せねばなりませぬ。過度の働きをする者には非常な休養を要するのである。それで家庭とは安眠の出來得る所でなければなりませぬ。之は身體上の事でありますが、精神上にも同じ事である。種々な心配をして疲れて歸つて來るに當り、これに心より同情をよせてくれる溫かい友情があるとか、又は無邪氣な子供があるとかすると大層愉快である。之は獨身者にも出來得るのである。然るに惡しき妻君は是が出來ないのである。却て心配さうな顏をして、夫の歸りを待つて、苦情などを持ちかけるのである。之では家庭が休養を與へる場所とはならぬのである。

家庭は唯休養するのみでなく、それ以上に發達しなければなりませぬ。卽ち修養の場所である。之は最も大切なものであります。故に家庭にて最も必要な者はプライベートである。我品性を修養し、我勢力を增進する所のものでなければならぬ。こ

のプライベートは何萬の金を費しても、仕方が惡ければ得られぬのである。卽ち自分に適合した境遇を作つて、始めて得られるのであります。私は質素な勉强室を持つて居る。然しこのプライベートに居るほど愉快な事はない。自分に必要なものは大方備へてあるので、讀書すべく、運動すべく、また休養すべく、自由、自在の境遇である。私は假令旅行しても、直ちに其所に家庭を作るのであります。旅行中だからというても矢張自分を進めるといふ所、卽ちプライベートが必要であります。私共は到る處、何處にでも家庭を作らねばなりませぬ。己の家庭を作らない人は、他に慰安を求め、娛樂を追ふに至るのである。故に私は諸子が眞の家庭を作ることが出來るやう希望します、このプライベートが思想を作り、計畫を立てる所であつて、人間のライフの最も大切なことであります。之がなければ進步することは出來ませぬ。

次に家庭は人間の幸福を受ける所である。幸福といへば愉快といふ事もありますが、快樂には高尙なのも劣等なものもあります。私は無論高尙なものをいふのでありますが、我々の幸福といふ事、及び不愉快といふことが、如何に健康に影響を及ぼすのであるかと云ふことは、諸子も既に御承知であらう。我々が愉快であると呼吸が深く大きくなり、脈管の血行が盛んになるから、身體の健康が增して來るのであります。然るに心に不愉快な事がある時には、全くこの反對であります。精神上でもどうも物がよく出來た、卽ち自己實現が出來たと思ふと、大變快活になつて彌々活動が增すのである。家庭に幸福といふものがあれば、凡て事が活動的に發達して行くのであります。此の愉快といふ事は精神の調和、及び其の他凡ての調和から來るので、幸福と云ふものは滿足から來るのであります。自己實現の出來得る處、進步發達の出來る處には、必ず滿足が來るのであります。さて今一つ幸福を授けるものは愛と同情となければなりませぬ。之は精神的のものであつて、夫婦があれば妻は夫の爲に身を捧げ、夫は妻を愛するといふ事に依つて成立するのであります。然らば獨身の人は如何にして家庭をつくるかといふと、フレンドシップといふものがあるのです。コント、カント、スペンサーといふ樣な人は何れも獨身であつたけれども、實に幸福な家庭を持つたのであります。夫れは、獨身の人は終始何か捧げる所があるのである。我々は凡てのものを捧げる所がなければならぬ。又家庭には自身を相續する所の子といふ者がある。獨身者であつても、主義を同じくするものは、皆子孫である。又自分の精神、品性といふ者はこの主義を同じくするものゝ爲に、永久相續せらるゝのである。故にたとへ、獨身者

であつても、必ず以上の意味を有する家庭を持たねばならぬ。夫れがなければ教育も決して行はれないのである。實に家庭は凡ての力を潜伏してある所である。

終りに臨んで一言を加へて注意を促したいと思ふのであります。家庭をつくるには幸福といふ事が必要である。其の幸福といふ事は適應といふ事から來たのである。あなた方が自分の家庭を作つて、人の幸福とともに自分の幸福を進めるといふ事は、卽ち適應である。自己といふものを四圍の境遇に適合せしめて、自分を改め、また四圍の境遇を開拓して行くことが改良であります。故に之が出來ねば幸福は得られないのであります。其の適應の最も必要なのは、何時も申す處の必要に應じて物をして行くと云ふこと、換言すれば我々の目的とする所の者を仕遂げるといふことであります。目的を仕遂げようとすれば、どうしても今日迄の通りで行かないから、改良しなければならぬといふ必要が起る。其の向上心、熱心に依つて進歩するのである。此の適應といふ事によつて家庭は益々幸福を增進して來る。幸福のある家庭には活動があり、滿足がある。玆に於てか始めて人の品性も知識も磨かれるのである。家庭は實に社會、國家の單位となつて、其の進化の能力の潜伏して居る所であると思ふ。

家庭の成立に就て

（「講演集」第一・夏季研究會）明治三十八年七月

第一　家庭の關係

家庭の關係を大別して三とする、第一夫婦の關係、第二親子の關係、第三兄弟姉妹の關係これである。此の三つの關係は家庭に於ての主なるものであつて、其の順序から云うても、其の輕重より考へても、前述の次第である。而して家庭の和合又調和等云ふ所の、凡て家庭に於る最も大切な狀態は、之等相互の關係其の當を得るより生ずるのである。第一夫婦の關係の神聖にして、且つ親密なるは、親子の關係をして、益々親密圓滿ならしむるもので、之に反し、第一の關係が不調和であつたならば、第二の關係も、亦不調和を免れないのである。從來の人の經驗によつても、夫婦の關係親密なる時は、其の子は大抵孝子である、孝子は必ず兄弟の間も調和するものである。又斯くの如き家庭に育つた子供は、必ず將來公德ある國民となり、國家有爲の人物となるのである。故に夫婦間の調和は、家庭の道德、社會の道德の源泉となるものであつて、あらゆる社會的勢

力は又、皆、源を玆に發するものである。而して其の關係の調和すると否とは、結婚の當事者たる男女の將來に於ける進歩發達に影響を及ぼす事大なるものであつて、人の生涯を殺すか、生かすかは、實にこれに由つて定まるものである。此の大切なる結婚が失敗に終つた人の例は澤山あるが、殊に婦人が其の當を失つた結婚をした場合には、男子が失敗したよりも、なほ甚しき慘狀に陷るものである。卽ち今日の實狀は、婦人と云ふものは獨立して社會に立ち、其の生存を營むのでなく、男子に依つて居る有樣であるから、如何に婦人が高尙な人格を有する人でも男子が低ければ其處に於て境遇を切り開いて、自己を發展するの道は大抵はないので、往々かやうな境遇の人は非常な悲觀的の考に陷り、生涯死んだやうな人になるか、又は終に自分も墮落するに至る事は珍しからぬのである。

而して反對に兩者其の當を得ば、双方とも數倍の速力を以て、益々其の運命を開拓し、自己の天職に向つて進むことが出來る實に幸福なる境遇に至るものである。此の神聖にして、且つ大切なる夫婦の關係は、結婚によりて始まるものであるから、結婚は社會問題としても、個人問題としても、最も重大なものである。

第二　結婚の根本並に目的

結婚は如何なる根本より發生するかと云ふに、凡そ五つの根より成るものである、

結婚とは、一男一女が相婚して夫妻の關係を結ぶことであつて、之より、舅姑と嫁、小姑と嫁、又、親子等の關係を生ずるものである。而して、之等の種々の關係を調和し、統一して、幸福なる狀態を作る所の一大連鎖は實に愛情である。尙之等の種々なる關係は、決して一樣ではなくして、各特殊の關係があり、又特殊の形式を持つて居る。又其の關係には、自然と人工との二方面がある。卽ち自然的に起る愛、心靈的關係は第一に屬し、經濟、法律、習慣、風俗は第二に屬するのである。此の關係は又必ず其の國の法律、風俗、習慣より導かれて來るものである。今我國の風俗習慣より之を見れば、結婚の目的は

第一、孝

第二、夫婦の和（之も間接には孝に歸す）

第三、舅姑と嫁との關係

となる。我國の結婚に就ての考は、其の源を支那に發したものであつて、西洋の結婚の如く夫婦を以て本とせずして、親子を以て本として居る。故に結婚の目的は、遂に直接にも、間接にも、孝行と云ふ考に歸するのである。支那思想にて所謂家族は、父と子を基とし、之を第一の目的として居る。支那の教では、遠き祖先にも近きものにも、生きて在ますが如く事ふるなりとあり。又生きては之に事ふる禮を以てし、死しては之を葬るに禮を以てし、之を祭るに禮を以てすと云ひ、又春秋祭祀して之を偲び、生に事ふるに敬愛し、死しては之を哀惜し、三年父の道を改めざるは孝と云ふべしとある。之卽ち支那並に日本に於る結婚の目的である。

女大學の冒頭第一にも「夫れ女子は成長して他人の家に行き、舅姑に仕ふるものなれば、男子よりも親の教忽せにすべからず」と云うて居る。若し婦たるものが、此の目的を達せず、其の關係よく調和せざるときは、卽ち舅姑の意に適はざる時は、其の婚姻は破れるのである。而して又七去の制を立て、其の離婚の標準を立てたのである。

一、嫜に順はざる女は去るべし、

二、子なき女は去るべし、是妻を娶るは子孫相續の爲なればなり、然れども婦人の心正しく、行儀よくして、妬心なくば、去らずとも同姓の子を養ふべし。或は妾に子あらば、妻に子なくとも去るに及ばず。

三、淫亂なれば去る。

四、恪氣深ければ去る。

五、癩病などの惡しき疾あれば去る。

六、多言にして愼しみなく、物云ひ過すは、親類とも中惡しくなり、家亂るゝもとゐなれば去るべし。

七、物を盜む心有れば去る。

此の七去は皆聖人の教で、背くべからざることであるとしてある。

又夫の家に行きては、嫜を我親よりも重んじて、厚く愛しみ、敬ひ、孝行を盡すべし。親の方を重んじ、舅の方を輕んずること勿れ。嫜の方の勤むべき業を怠るべからず。若し嫜の命あらば愼しみ行ひて背くべからず。萬の事舅姑に問うて、其の教に任すべし。嫜若し我を憫み誹り給ふとも、怒り恨む勿れ。孝を盡して、誠を以て仕ふれば、後は必ず中好くなるものなりぬ、と云つて居る。以上の所說によれば、西洋の如く夫婦間の愛情と云ふことを以て基礎とするのではなく、親に仕ふること

を以て、結婚の主なる目的として居るのである。

西洋にては、結婚の目的は、夫婦を基としてあるから、結婚すれば、親の家庭と離れて、別に家庭を作るのである。けれども日本にては既に作られたる家に行き其の舅姑に事へ、其の家風に從ふのを、凡て目的として居るから、其の關係は非常に複雜なるものである。而して此の複雜なる家庭には、夫や舅姑の外に、尙數多の家庭があつて、恰も數多の君主を持つた如き有樣であるから、婦人は全く己を殺し、自由を捧げ、身を犧牲となして、他人の意志にのみ服從しなければ家は治まらないのである。人世婦人の身となる勿れ、一生の苦樂他人に依る、と實に之等の風俗思想は我國古來の習慣で、之を以て最も尊き婦人の道と心得て居つたのである。然るに近來西洋思想が入り來つてから夫婦間の關係にも、從つて西洋風を加へ始めたが、然し全く我國古來の風俗習慣をも忘れることは出來ない。我國の習慣に從へば、夫婦の愛と雖も、親子の間の孝に歸せねばならぬと云ふ關係で、全く夫妻間に重きを置かなかつたから、西洋にて云ふ神聖なる愛と云ふ觀念も、我國にては、未だ割合に發達して居らぬ。其の發達せざる社會へ、西洋から夫婦の愛を基とする思想が入り來りて、青年男女の心中を亂すのである。往々かの國の小說や詩を譯したものが一般に讀まれるに當つて、其の風俗習慣を誤り傳へる所となり、青年の男女をして、かゝる問題に就て因る所を失はしめた。之が今日男女をして最も危險なる狀態に導いた原因である。而して此の愛と云ふことは一方に最も人を欺き、人を惑はし易きもので、一度誤れば危險極るものであるが、又一方には非常に大切なるもので、是が凡て人生の活動の原動力となるものである。

日本の結婚は、人工的のもので、孝と云ふ目的の爲にのみ行はれるのであるが、西洋の所謂 Love なるものは、夫れと異つて、夫婦相互の間の關係に基して居る。抑も愛と云ふことは、色々の場合に用ゐられ、意義の範圍は甚だ廣きものである。其の一部なる夫婦間の愛と云つても、又非常に複雜なる關係のものである。

先づ結婚を成り立たしむる所の愛、換言すれば、其の引力とも云ふべきもの、及び結婚より進化し來る愛を大別すれば、左の五つとなる。

(一)自然的愛
(二)理想的愛
(三)夫婦の愛
(四)母の愛
(五)血族的愛

一、自然的愛

此の愛はたとひ教育せずとも、又文明にならずとも、苟くも生を享けたる以上は、自然生れつきにあるものである。然して自然の愛の力は、之を惡しく用ふれば、誠に卑しきものであり、又汚れたるものである。此の力が生れつき人間に植ゑ付けられてある爲に、人をして罪惡を多からしめ、遂に身を誤り、又其の身體をも亡ぼすやうになるのである。其の惡しき例は、古今東西何處にでも澤山ある。殊に佛教では、女は汚れたるものなれば、神聖なる所には出入すべからざるものとし、眞に人が潔白なるものとならんには、全く女性に離れざれば能はずとして、終に佛門に歸依するものは、獨身にて生涯を送ることゝなつて居る位である。かくの如く東洋にては、殊に婦人を卑しみ、婦人を家族の要素として、又人格ある一員として、見做さゞるのみか、宗教とか、精神とか云ふ所の高尚なる方面からは、度外視され、女子は到底かゝる問題には、關すべからざるものとなつて居つた。然らば此の如く、自然的の愛は、果して汚れたるものなるか、又此の心を有することは、罪惡の源となるべきであらうか。

此の力は、佛法の云ふ如く、それ程惡いものではない。否、人間になくてはならぬ必要の力である。今其の必要であると云ふ故は、第一、自然的愛は社會の模型的のものであつて、社會の成立すべき源をなせるものであること。第二、人生の中最も大切なものとして考へられる所の愛、忠孝、仁惠、博愛、凡てのものゝ原形質である。自然的愛は卽ち幹であつて、之より生ずる數多の枝がある。換言すれば、之が進化して、凡ての他のものを生ずるに至るのである。第三、繁殖力はこの力による。第四、進化の法則に從ひて、萬有が低きものから、高きものに進化するところの動的勢力、卽ち進化力とも云ふべきものはこの力の中に含まれて居る。故に此の力は、家族をなす上に於て、又人間の發展する上に於て、自然的に附與せられたる處の能力であると云うてもよろしい。而して今其の力が如何に發達するかと云ふことを知ることが大切である。人間社會の發展する凡ての動機となる處の、最大の力は、卽ち愛と食慾であると云ふことが出來る、之を分けると內界卽ち心靈的のものと、外界卽ち肉體的のものとの區別を立てることが出來る、愛は卽ち心靈に屬する最も强大なる衝動である、食慾は肉體の命を繫ぐに缺くべからざる慾望である。若し此の二つの慾望を人間より除き去れば、萬事休するの外死に至るの止むを得ぬものである。動物は只これ等本能的衝動と感情とによりてのみ行動する

が、人間には此處に理性があり、主義があり、目的がある。故に身體から起る所の之等の衝動を理性に訴へ、主義に照して行ひ、目的に統一して行く處から、道德は起り、人格も作られるのである。而して社會も、國家も、亦其の中に現はれる音樂、美術、宗教も出來るのである。凡ての高尚なる純潔なる思想、凡ての人の敬服する所の行爲は、愛の進化したものであると云うてよろしい。之に反して、若し衝動のままに從ふときは、無秩序、不統一生活となつて、凡て、罪はこれより生み出されるのである。

之を以て、自然に附與せられたる愛は、人生のあらゆる現象の單位をなす要素であるが、併し人が理性を缺きて、衝動にのみよる、所謂、自然的愛によりて支配されて居る如きは、決して人とは云はれぬ。全く動物的の生活である、若し結婚の要素が、自然的愛にのみ由つて定められるときは、野蠻人と選ぶ所がないのである。愛の最も高尚なるものを認めんとならば人は其の理性を發達せしめねばならぬ、理性發達して、始めて高尚なる愛を認むことが出來るのである。

二、理想的愛

之は天然に備はる自然的愛に、人文が發達した結果、理想を備ふるに至つたものである。

併し之も未だ感情的のものである。感情には肉體的のものと、心靈的のものとがあり、これを分ちて、外界的感情と、內界的感情に分つことが出來る。併し愛は何れに屬すべきかと云へば、無論心靈的のもの、卽ち內界的感情である。されども、凡て人が心に感ずる所は、身體にも影響を及ぼすもので、又身體上からも心に影響を及ぼすものであるから、無關係のものであるとは云へぬ。從つて全然之は內界的のもの、又外界的のものと區別することも出來ない。然らば、如何なるものを以て、最も高尚なる、且つ純潔なる愛、卽ち理想的愛とする事が出來るかと云ふに、これは最も內界的の感情で、最も永久に繼續せられるものでなければならぬ。

此の內界的にして、且つ心靈的なる理想的愛も、もとは矢張り自然的愛に由來したものである。然しこれが次第に發達して、理想想像が加つて來たものである。理想的愛は普通に用ゐられる所の戀愛など云ふ語を用ゐても其の當を得ないのであるのみならず英語 Love の相當すべき觀念も亦我國にては認められないのである。自然の愛は、如何なる野蠻人にも原人にもあるのである。但しモンテローがニグロー、又は西部亞弗利加の野蠻人に就て調べたところによると、愛及び之に伴うて起る

べき嫉妬等の語はないと云つて居る。我國で愛と云へば自然の愛若しくは夫婦の愛の孰れかであつて、西洋に云ふ純粹の理想の愛と云ふべきものはないが、之は昔から男女席を同じうせずと云ふ嚴しい掟の中に養はれ、親の爲に結婚すると云ふ樣な習慣の存する所には發達しやうがないのである。卽ち此の愛は、結婚する迄の男女の心情であつて最も心靈的の又高尙なものである。我國では甚だ其の例は少いが西洋と雖も餘程人文の發達して後に現れたのである。然らば理想的愛とは如何なるものであるか。

第一に缺くべからざるものは、男女相互の感情で、相互的のものである。

西洋の結婚は、男女同等に選擇する權を有し、又意氣投合と云ふ事より成立する。故に社會の反映とも云ふべき文學に於て、斯くの如き風俗を見出すことが出來る。それは如何なる心の狀態であるかと云ふに、男女相互間に於ける所の將來に屬望する想像・理想である、又之が感情的に流れる方より云へば、恰も、夢か幻である。又其の實際に實現し難き所より云へば、恰も空中の樓閣の如きものである。英語に所謂 Sweet home とは、社會學者の稱へる樂園の如きもので、實に無上の快樂、幸福を得らるべき所と想像を描いて居る男女の心的狀態である。之は科學では見出すことは出來ない。文學によりて現れるもので、それは全くの想像、理想で、之を實現すれば其の思狀は消えてしまふやうなものである。其の想像を描く間、又其の理想を追及する時の男女の樂しい心狀である。今日の我國の若き人の心に、スヰートホームとか、愛とか云ふものゝ描かれたのは、かゝる事を表す西洋の文學より得た思想である。併し乍ら西洋の風俗に從へば、男女の交際が自由に行はれ、又或範圍內に於て、公然許されて居るから、交際せんとする前に、先づ善く其の人物、性質を知悉し、互の間に一の引力起りて後、相互に交際が始まるのである。其の交際の間に描かれる情緖、卽ち結婚する迄の間に起る所の最も神聖なる情が理想的である。西洋では、男女共相當の教育を受け相當の年齡に達し、相互に人格ある男子として、女子として、相尊び、相親しみ、自ら選擇するの力が出來なければ、結婚しないのであるが、日本では、無論男女の交際は行はれず、又女子の方には、選擇の自由もなく互に人格を認むる迄の教育も與へられて居らず、全く人の指圖に從うて、結婚するのであるから、結婚する迄の間の愛と云ふのは、日本では認められない。然し、我國でも稍類似するものはあるが、全く其の趣を異にして居る。故に此の愛を誤解せるものは、己を欺き、人を欺く、これ程危險なるものはな

い。我國が、かゝる狀態にある間は、矢張り從前の通り、經驗ある兩親が定める方がまだしも安心である。今一つ我國では早婚の弊があるから、眞の理想的愛と云ふべきものを見る能はざるは止むを得ないのである。然るに今日何故に之を述ぶる必要があるか、そはさきに述べたる如く、之を誤解する時は弊害の伴ふこと多く、延いて一身をも滅す如き禍を蒙るに至るのである。又一方には諸子が教育を受けたる結果知識が發達するに從ひて愈々理想が高まるものであるから、是非此の點を明らかにすることが必要である。しかのみならず、我國の風俗上では、女の方は選擇の自由はないが、法律上から云ふと、結婚は當事者の承諾を要するものなることを定めてあるから、其の理を明らかにし、自らも又誤らざる所の眼識を備へねばならぬのである。

抑も理想的愛といふものは、一男一女が互に敬慕する、所謂心服すると云ふ如きものであるが、又兄弟姉妹間にある處の同情の如きものであるかと云ふにこは孰れにもあらずして、單純ならざる感情、理想、目的、想像等の輻輳せる情緒であつて、之は必ず直接交際したる上で、其の人と人との間に起る一種の情であるから、他人より聞きたること、又は父母兄弟に勸められたる事のみによりて起るものではない。西洋では此の事が自叙傳などにも現れて居り、又如何にして、斯かる約束を結ぶに至りしかといふ事など屢々記されてある。

我國では、自身の意に適したる人に嫁ぐと云ふは、我儘なり、不埒なりとし、又其の身自らも恥づべきものとして居る。然し結婚に、若しも此の理想的愛を缺くならば單に諸子一代の不幸なるのみならず、其の害子孫に及び、延いては、國運の消長に關するものである。理想的愛情は何故必要であるかと云へば、個人の性格を圓滿にし、國民をして完全なる發達を遂げしむ上に於て缺くべからざるものである。例へば、今日我國の人種は、體格矮少にして、氣質は多血質である。これは或歷史家の云へる如く、歷史を凡て健全なる國民の行動として見るは誤りなり、そは多くは病的なればなりと云へる事と同一で、此の理想的愛は國民的短所及び個人的缺點を矯むる上に缺くべからざるものである。何となれば、凡ての要求は、其の目的によりて生ずるものである。知識でも食物でも、人には必ず願望があるが、あゝ云ふものが欲しいと思ふのは、必ず己に缺乏を感ずるに因るからである。而して之と同じく我々の心の中にも好みがある。我々の好む所のもの慕ふ所のものは何であるか、例へば、決斷力の乏しき人であるならば、必ず決斷力を與へられんことを渴望すべく、常に沈欝なる人は快活にせられんことを欲

するのである。此の缺點を補はんが爲に是非得たしと思ふものは、卽ち吾人の願望である。又要求である。結婚の目的は子孫にあるから、最も完全なる子孫を得んとするには勢ひ理想的愛によらねばならぬ。理想的愛は卽ち缺乏を補はんとする所から起るのである。英語の want なる詞は缺乏を意味し、同時に願望を意味するのである。例へば、男女が相慕ふ樣になるのは、自分の缺點を長所として備へたる人我缺點を補ふに足るべき人を好む樣になるものである。卽ち、色の黑き人は白き人を、背の低き人は高き人を好み、性質に於ても同じものを愛せず、自分の缺點にして、しかも先方は之を長所として居る人を愛するのである。其の他體質、氣質、品性等、凡て己の缺けて居るものと、其の反對に此の長所を持つて居るものとの間に相慕ふことゝなるものである。之は最も無意識の間の情で、其の無意識の間に己の缺點を補ひ得るものと結婚せんと云ふ傾きがある。卽ち理想的愛の起るは、この目的に對する働きの間に起るものであると知られる。故に近親結婚の如きは、相似たる所多く、缺點と缺點と相集るので自然に子孫を弱くすると云ふことゝなり、品性も遺傳もあまり面白からぬ結果となる。之を以て結婚當事者が自ら相選ぶと云ふことは、決して我儘にもあらず、避くべきことでもない。適せざる人と人とを以て夫妻たらしめんか、其の不和合は免れないのみならず、人を殺し家を亡ぼすもので、國家の爲に最も不幸なる結果を來すのである。故に之を選擇して誤らざるの心掛けがなければならぬ。而して人の經驗によると、適當に之を選擇することは餘程困難なることゝ思はれる。何となれば男女の愛は、彼等を盲目となすと云ふものであるから、感情にのみ制せられ易く、善きも惡しきも、相互に見わけのつかぬ樣になり、結婚後夢より醒めて、後悔すると云ふ如き狀態となるものが多い、さればとて、親又は他人にばかり選擇を任したのでは到底生涯和合する所の結果は得られないものである。次に理想的愛が社會に及ぼす利益とも云ふべきものを擧げて見れば、之によりて男女の理想を高め理想の實現力を刺戟する働きを爲すものである。ショーペンハウエルは、理想的愛は小說の中に多く其の材料を見出すことを得るものであるが、此の理想的愛は曾て實現せられ居る有樣を云ひ表された事はない。只此の作者が勉める處は、其の理想的狀態を得んとて男女が苦しみあがき、或は心配し、或は失望する所の人類の最も烈しき努力を描くに止まつて居るといつた。併し、此の情は實に激しきもので、人をして、凡ての困難を凌がしむべき克己力をも起させ、之が爲に一身を犧牲にするの勇氣をも、容易に起さしめるものである、此の情の盛んなる時に於

ては、殆ど自らの生命を認めず火にも水にも猛進せしめるものであるから、一方では青年男女の爲頗る危險で、且つ弊害に陷り易きものであると云ふことは、西洋でも認めて居るのである。今日日本で此の愛が發達せぬと云ふのも其の弊害を恐れて居る爲である。之等の弊は隨分文明國にも、其の跡を認むべきものであるが、又一方には、如何なる困難にも堪へしむると云ふやうな勇氣をも出さしむるものである。理想的愛は相互的の愛であるから敬慕とは異るけれども、亦幾分か其の意味も加はつて居るのである。そは其の人の愛を得んと思はゞ、何か其の人を感ぜしむるに足るべき行をなさねばならぬ、卽ち男子は婦人の歡心を買はんが爲に非常に理想を高くし、行を愼まねばならない、或は義俠心を起し、國の爲、又世の爲、盡すと云ふことも起るのである。又婦人も同樣で、男子より敬愛されるには、婦人の德を高めねばならぬ爲に、益々其の美を發揮するのである。故に理想的愛は大いに社會を進步發達せしむべき原動力となるものである。例へば支那人は妻を得んが爲に、金を得んとし、猶太の女子は婚嫁の資格として、貯金するが如きこともある。彼等の目的は單に之に止るけれども、此の風が漸次國民的精神とならば善惡共に社會全體に及ぼす影響は蓋し少からぬのである。されば英米などにても男女の交際は自由であるが、理想的愛となれば無論男女共其の生涯を定むる大切の場合であるから、注意に注意を加へるのである。男女が如何に親密になりたりとも、其の一方に少しにても缺點あらば直ちに絕交することもある程である。卽ち彼の人は高尙なる人格があるとか、智慧もあるとか、正直であるとか、義俠心もあると云ふやうな其の人の人格に就て感ずる所がなければ、其の情は忽ちさめ、其の愛は直ちに破れるのである。故に男女をして益々理想を高め、修養に勉め、其の事業に邁進し、益々國力を發揮せしむる原動力となるのである。

又理想的愛は、精神的の愛であるから、富とか爵位とかで動くものではなくして、其の人格、性質に基因するものである。故に男女が結婚することゝなれば、人間を淸廉にして修養に實現に大いに勉むるに至らしむるのである。而して餘程相知りて親密の度深厚になるとき、始めて申し込みをするので、西洋では男子の方より申し出づるが禮であるが、男子の身に取りて、これ程恐しいものはないといふのである。若し不成功の恥辱を見るならば、大いに失望して、往々自殺を企つるもの少からざる有樣である。彼の地に立派なる人の獨身で終るも、多くは之が爲であると云ふことである。故に婦人も男子と交際するには、非常に嚴格に身を愼んで居る。若しも婦人に其の意なくし

て、敬愛するものと認められ、男子をして誤解せしむる時は、一大事となるからである。而して愈々偕老の友とするに足る人と信ずるに至らば男子は其の理想を表白し、女子は又己の理想と適合するか否かを考へ、凡ての主義方針をも述べて全く意氣相投ずるや、そこに約束は成立するものである。斯くて成約の後も猶嚴格に交際し、善きが上にも善く思はれんと勉むる故、稍もすれば虚飾をも生ずることがある。之は別として、斯く男女互に相鍛ふ間に夫れが爲に學問をなし、夫れが爲に努力し、益々品格を高むるやうになる。之が益々人間が進化する所の動機となるのである。

理想的愛は、互に感情を平均し、男女の理想を高め、品行を愼ましむるものであるから、國家をして益々盛んならしめるものである。斯かる有樣に進まざれば社會が眞に改善されることは困難である。卽ち此の愛は最も男女の心を動かす强き力にて、其の强き力により、國民が益々修養に勉め品性を高尙にするのであるから、如何なる事でも出來得ざることはない。此の强き力によりて、國民を進步發達せしむることは、最も易きことである。今日の我國では全然理想的愛によりて結婚せしむるといふことは未だ行ふ能はざれども、男女共教育を受けて知識を得、思想の獨立を尊ぶ今日は、是非共此の思想を眼中におかねばならぬ。然らば如何にして之に近くべきかは後に結婚の方法を述べる時に說明しよう。我國今日の狀態では、急激に之を改善し得べからずと云つても男女の關係がかゝる狀態に迄進まざれば、眞の家庭は成立しないのみでなく、其の家庭は調和せず、子孫は實に不幸なることである。而して此の理想的愛は結婚によりて消滅し、次に夫婦の愛となるのである。

三、夫婦の愛

此の愛は、一人の男子が其の妻に對し、又一人の女子が其の夫に對して起る所の愛であるが、理想的愛とは全く其の性質異りたるもので、前者とは決して混同すべからざるものである。併しながら此の夫婦の愛と云ふものは、理想的愛より導かれて發達したものであるが、已に發達したる時は全く別性質のものとなつて理想的愛の中には缺けて居る要素をも具備せるものである。

多くの青年男女理想的愛の經驗を備へ居る人々は、理想的愛を結婚後に續けんことを希望し、又理想的愛の時代に交際せし時の喜びを限りなく持ち續くるものであらうと考へるから、結婚すれば、其の交際せる間の喜びに加へて夫婦の愛と云ふものが尙之に加はるから、前にも增して幸福なるものであらうと想

像するが、こは前者は全く理想、想像的狀態であるから實現に伴ふものではなく、後に至りて失望する者もある。然し其の結婚が正當であり、且つ夫婦の愛が正當に發達したならば決して失望せぬものである。之を喩へて見れば自然の愛は種の如く、理想的愛は花の如く、夫婦の愛は實の如きものである。花は美しく、芳ばしきものであるが、其の盛りは短かきものである。然しながら散つた後には實を結ぶものである。而して、其の實は最も尊きものであるが、此の時は麗しき花は既に散り果てゝ、影もなきと同樣には、夫婦の愛となりては、理想的愛は全く消滅するものである。社會學に動的狀態と靜的狀態といふことがある。理想的愛は動的であつて、將來の希望に屬する者である。故に此の狀態になれば、少しも靜まることなく、或は喜び、或は悲しみ、常に心中の動搖すること恰も大浪のうつが如き有樣である。然るに結婚して夫婦の愛となれば、全く其の波はおだやかとなるのである。ゼームスゼリーは結婚したる有樣を謳つて、

Lost lover good-by at love.

と、予は曾て米國に居る時、大學總長とか、醫者とか、或は社會學者等種々の方面の人々に就き研究したる所によれば、輕薄なる男子は結婚後甚だしく其の愛醒めて、相互に不幸なる狀態に陷るものであるとの事を聞いた。ショーペンハウエルは、夫婦間にある眞の友愛の情と云ふものは氣質の和合である。而して此の氣質の和合の大部分は、理想的愛が消滅せし後に發生するものなりと云つて居る。理想的愛は心靈的のものであるが、夫婦の愛は更に一層靈的のものである。男女の意氣相投合せねば、決して此の愛は出來るものではない。故に狂ふが如き理想的愛の消えて後に起るものなること、及び今一つ注意すべきことは、之は自然の愛の如く自然的のものにあらず、內より起る衝動にあらずして、己の意志を以て、支配し忍耐力及び注意力を以て、教育して後に起るものである。西洋にても、「如何にして結婚後を幸ならしむべきか」と云ふ書物がある位で、如何に教育すべきかと云ふことは甚だ大切なことであるが、之に就ては後に述べよう。

夫婦の愛は理想的愛に比較すれば、猶一層高き程度に於て、心靈的なるものである。併し乍ら理想的愛は感情的のものであるから、其の中には心配の心狀もあるにもせよ、又實に幸福なるものゝ如く考へられるのであるが、夫婦の愛は花散りし後の如く、人生は思ひし程幸福なるものに非ずと考へられるであらう。然し實は前者に比して容量多く實質に富み、且つ有益で、非常に貴重なるものである。故に結婚すれば、今迄の樂しき愛

を失ひし如き感あるも、其の實は却て貴重なる、しかも永く續く愛を得たのである。畢竟此の二つの愛と云ふものは、所謂一夫一婦の間に於てのみ行はれ、且つ發達するもので、一夫多妻の男女の間には決して見ること能はざる愛情である。一夫多妻の社會にあつては、自然的又は風俗習慣上の一種の關係はあるかもしらぬが、心靈的の愛は決してないのである。而して前に云つた樣に、理想的愛は相互のものであるが、夫婦の愛も互のものであるから、此の愛は双方より忍耐して育つべきものである。若し結婚後主義の衝突とか、氣質、思想等の調和せざる事などある時は、相互に惡感情起りて次第〳〵に双方遠ざかり行き、終に不幸なる狀態に陷るものである。斯かる有樣となつては、種々の事情纏綿し、別れんとするも、別るゝこと能はずして、唯法律上、風俗上、形式上の夫婦として、僅かに外形のみを保つけれども、其の心は次第〳〵に相背くものである。故に之程苦しきものはあるまいと思はれる。又此の間に育てられる子供程實に不幸なるものはないのである。此の狀態に陷りし人は息の通ふ死骸のやうな、憐れな不幸な生涯を送るものである。意志の强き人ならば、猶此の苦境に堪ふべきも、女子に於ては、堪ふべからざる苦悶であらうと思はれる。夫婦の愛も互に忍耐し互に修養して行かねば育つものではない。苦境に陷らざるやう、忍耐して人を喜ばしめ、人に仕へると云ふことを相互に勉めて行かねばならぬ。我國にては仕へて行くこと、人の氣を取りて行くこと、之を全く女子の責任とし、男子は我儘をなしてもよしと云ふ風であるけれども、女子の忍耐力强く、品性高尚ならば、漸々此の弊は改まるであらうと思ふ。たとへ一時夫婦の關係が理想の如く行かないでも、決して失望すべきものではない。今日我國の狀態では眞の一夫一婦は望むことは困難なる狀態である。家庭を如何に改良しようと思うても、夫婦の間に眞に夫婦の愛が行はれ、主義、氣質、思想が調和し、意志が結合せざれば、如何ともする能はざるものである。夫婦間の問題は決して一時的のことではない、永久續くべきもので、其の結果は實に子孫に及ぶものである。此の問題を男女が互によく熟慮して實行することゝならば、社會は著しく進步發達し、其の裏面に於る弊風、罪惡は掃除せられるのである。今日は教育によりて男女の理想を高め、相互に行を愼しみ、其の人格を高尚にせねばならぬと云ふことを、自覺せしむることが、大切であるが、之は無論現今に於て實現し得べきことではない。子女の代に至りて始めて其の理想が行はれ、眞の理想的家庭は建設せられるのである。

上述し來りし如く、結婚の第一の目的は愛であるが、第二の

目的物は家庭である。我々は丁度自身の身體に適當したる衣服を要するが如く、人間は己の棲息するに必要なる住所を願望するは自然の情である。併し人は其の住所は少しも他人に干渉せられることなく、自分の自由になるものを欲するのである。人間の生活に共同生活と云ふものがある。例へば、寮舍の如き、寄宿舍又は兵營の如きものもあるが、之は餘程不便利なるもので、各自の必要に適する樣にすることはむづかしきもので、凡ての事を自分の好む通りにするには、獨身生活が最もよろしき樣に思はれる。けれども、さりとて是は又一方に非常なる不便があり、且つ自然に背くのである。一女一男の夫婦にて、共同の生活をなすことは、最も自然に適ひ又最も經濟的のことである。故に婚禮すると云ふことの一の目的は卽ち家庭を作るにあるのである。之は東西共に同じことである。西洋では結婚の目的には必ず家庭と云ふ事があるから、若し結婚後の生活の準備が足りなければ、決して結婚はしない。故に男女共に充分教育を受け實力も出來、其の家を支持するだけの準備が出來て始めて結婚するのである。親の作り與へたる家に生活する如きことは決してない。故に西洋の結婚と云ふことは、家を作ると云ふことである。日本の結婚には、家を作ると云ふ觀念はないが、結婚の目的に家庭と云ふことは確かに一の要素となつて居る。古き書物を見るに、「家貧しうして良妻を思ふ」と云ひ或は「夫は外を治め、妻は家を齊ふること其の職分なり、家は偏に妻の力によりて榮え、或は衰ふ」と云つてある。西洋にて云ふ家庭を作ると云ふ觀念は我國にはなくつて、單に男子は家を繼ぎ女子ならば、家に歸る卽ち嫁ぐと云ふ觀念があるのみである。然れども日本從來の考のみでは、今日は到底滿足することは出來ない。故に、今日家庭を改良せんと云ふ考も起つて居る。諸子の中にも家庭を改良すると云ふことは常に云はれて居り、又企圖されて居る所である。然し永き間の風俗習慣であるから一朝一夕に之を改良することは出來ないのである。貝原益軒先生の家訓に、「人の子孫たるものは、其の家の先祖の家法をよく守りて失はざれば、たとへ、其の子孫才力なしとも、其の家を保ちて長久なり、其の子孫才力聰明勝れたる人ありとも、始めて家を持ち立てたる先祖には及び難し。若し其の子孫利口にして、昔の先祖の定め置きたる事、今の世には合ひ難しとて、其の先祖を蔑ろにして、其の法を破り、新法を立つれば其の家は必ず滅ぶなり」と、云つて居る。此の如き考に尙支配されて居るから、家庭改良など云ふことは中々行はれない事である。然れ共、舊風のみを固守して、之に改良を加へざれば決して進歩することは出來ない、家庭を改善することが出來なけ

れば、其の社會も矢張り舊風を脱することが出來ない、從つて社會は何時迄も進まない。かゝる家庭、社會に人となる國民は、決して因循姑息たるを免れないのである。故に漸々之を改善しなければならぬ。

第三の結婚の目的物は子孫である。子孫と云ふこと、又は種族保存と云ふことは、自然に結婚と云ふことに關係を持つて居る。故に夫婦と云へば必ず子孫を思ひ、子と云へば直ぐ樣父母と云ふ事を思ふものである。故に此の父と、母と、子とは三つにして一つ、一つにして三つと云ふべきもので、所謂三位一體と云ふのと同じことである。此の關係はいつ迄も永續するもので、此の關係は卽ち、人種をして永續せしめ發達せしむるものである。實に子孫を欲すると云ふことは、人間の心に植ゑ付けられたる自然の情である。而して子孫を望む願望が終に家庭を組織せしむるのである。若し子孫を欲すると云ふ情が人間になかつたならば、今日よりも尙一層獨身者を增加せしむるであらう。然るに人間は永遠に續かんことを希望し、己一身にて終りを告ぐることを嫌ふのが自然の情であるから、或事情の爲に、子孫を持つことの出來ないものは、他に己が志を永久に遺さんとする傾きがある。例へば敎育の爲に一身を捧げて之が犧牲となり、事業の爲に獨身にて終る人もあるが、其の思想精神を弟子に傳へ、又爲始めたる事業をば後進者に繼がしめて、精神的に子孫をつくり、限りなく生存せしめんと考へるのである。故に斯かる人は、血緣に由りては繫がれざるも、其の思想、精神は矢張り續くのである。我國に養子の制度行はれる如きも、皆此の情に基くものである。故に夫婦の愛と云ふことも自然であり、又之が發達して家庭を作らんとするのも皆自然である。此の愛と云ふものと、家庭を作らんと云ふ情とが相よりて、子孫を欲しいと云ふ情を生ずるのである。故に順序より云へば、結婚を成立せしむる所の愛は種子で、之が熟して成立する所の家庭は花であり、更に第三の階級となりて子孫と云ふ實を結ばしむるものである。故に子孫と云ふものが出來て、今度始めて、母の愛と云ふものを生ずるのである。

四、母の愛

母の愛と、兩親の愛と云ふものとは別である。又兄弟の愛と云ふものもあるが之とも異つたものである。進化論者は曰く、母の愛と、親の愛とは、弱きものに對する同情心より起るものなりと云うて居る。併し之は一致し難き說であると考へられる。何となれば、同情と云ふものは、人の苦しみを見て、之を己の經驗に比較することによりて、自分の心に起る情である。

加之、殆ど其の苦しみを分ちて助くるのが同情で、英語に云ふSympathy 漢字に云ふ惻隱の情で多少人文進みて後見られるのであるが、母の愛は、野蠻人にも、原人にもあるので自然的愛が男女の心中に植ゑ付けられたると同じく、又適者生存と云ふ事が、動物の生存する上に、又發達する上に、又繁殖する上に缺くべからざるものなるが如くに、此の愛も自然即ち本能的に存するものである。故に母の愛と兩親の愛とは別のものである。而して是が發達して、血族的愛となり、親子の愛、兄弟姉妹の愛が漸々發達して同類意識と云ふものとなるのである。此の同類意識に伴うて起る所の反對の情もある。之は憎むとか嫌ふとか云ふ情である。母が子を愛する餘りに子を害せんとする者ならば、之憎み、嫌ふの情である。國民としても其の安寧を妨げんとするものあらば、忽ち叛旗を翻し、又之に反對をする、之が爲に世の文明は進むのである。今一つの愛に伴ふ所のものは嫉妬心である。之は夫婦の間にも、親子の間にもあるのである。親が不心得なる子を殺し、かよわき妻が夫を殺すと云ふ樣なことがあるが、之は全く此の愛情の激發より出づるものである。親友の爲に惡しきことを見逃すこと能はず、君の爲に死を鴻毛の輕きにおくも皆之が爲である。殺すと云ふこと、叱ると云ふこと、怒ると云ふこと、必ずしも此の事が惡いのではない。戰爭も同じことである、戰端を開くの外には救ふべき道なき場合がある。其の場合よく戰ひ、肉體上にも、精神上にも、適者生存といふこと行はれて、世の文明は進むものである。

五、血族的愛

血族的愛が漸々發達して種族的愛となり、又一方には憎み、或は嫉みと云ふことが之に伴うて起る。聖書に、「吾は嫉みの神なり」と云へることばがある。宇宙間には、惡魔と云ふものあり、神は善に向ふ樣にと勉むるも、若し人間が惡魔にひかされる事などあらば、神は非常に嫌ひ、又嫉み給ふのである。或時は怒りて火を降して、人を燒きたりと云ふことも、舊約書などには書いてある。親の子を愛する情の强きにも拘らず、子が不心得なる時は、怒りて嫉むのである。日本では古來嫉みと云ふことは惡しき事にのみ考へられたが、之は愛の變形に外ならぬのである。

第三、結婚及び離婚

一國の文野を知るには、社會學者の言へる如く、家庭に就て見るのが最も當れるのである。而して其の國の家庭が健全であ

るか、否かと云ふ事は家庭建設の基となる所の結婚、及び其の反對の結果たる離婚の統計に由つて調査すれば大體窺ひ知られるのである。

今世界の文明國中、最も強大なる勢力を以て進歩しつゝあるは北米合衆國である。此の國は教育に於ても、商工業に於ても其の他文明の程度に於て、最も發達し、又最も自由を尊ぶ國である。殊に女子が自由を得て居り、男女交際も自由である。かくの如くすべての點に自由なる生活を與へられて居るから、人間に最も尊ぶべき自主獨立の精神が活躍して居る。そこで一般に獨立自營の氣象盛んなる結果、定めて男女共獨身者が增加し家庭の建設を少くし、從つて人口の減少を來すであらうとは、世界の學者の想像する所であるが、實際の統計に就て調べて見ると決してさうではない。益々完全なる結婚が行はれ、立派なる家庭が建設されて、國民精神の源泉をなして居る。然らば家庭を破壞する所の離婚は如何なる有樣であるかと云ふに、殆ど卅年間に倍數の增加を示した。併し此の現象を以て直ちに道德の頽廢に因るものと判斷するは誤りであつて、これには種々の理由が存して居る。

先づ最近の實例に由つて見るに四十二の離婚中其の五分の四は次に擧ぐる原因に屬するものである。第一姦淫の罪、第二虐待、第三棄てられたる事、第四生活品を與へざる事等これである。而して離婚を訴へ出でたる總數の三分の二は妻、三分の一は夫よりしたものである。卽ち女子より離婚を請求するものゝ方が多いのである。これは女子の德義心が鈍い爲であると考へるのは誤りで、確かに女子の知識、人格の進歩を示すものと云はなければならない。昔は男子は殆ど生殺の權利を有し、女子に於ては如何なる虐待を受けても、これを訴へ出づる權利がなかつたのである。殊に我日本では妻は打擲は愚かどれ程酷薄の取扱を受けても毫も抵抗する事なく身を殺して夫に仕へるのを貞操の德と稱へた程であつた。併しながら家庭の調和しない原因は男子が惡いばかりではない。女子にも確かに缺點がある事に起因するのを忘れてはならぬ。而して我國家庭の狀態は如何と云ふに明治三十三年以降の統計によれば離婚數は漸次減少しつゝあるけれども、數年間の統計に由れば、我國は離婚數の多い事に於て世界各國の第二位に居るのである。而して離婚の原因は、要するに、結婚法の不完全に歸するのである。

今一つ我國家庭の不健全を示す驚くべき兆候がある。そは我國出產數中庶子、私生子の數が非常に多い事である。これに由つて、我國結婚の目的たる家庭の有樣、及びこれより生ずる腐敗の事實等を考へれば、一刻も忽せにすべからざる事である。

然らば如何にしてこれを改良すべきであるか、これは實に研究を要する問題であると思ふ。由つてこゝに余が考を述べて諸子の參考に供しようとするのである。

米國に於る離婚の增加は女權の發達したる爲である。故に法律の結果として增したのである。我國の離婚の減少はまた道德の高まりたる故にあらずして、法律上離婚が困難なる爲である。されば今假に法律を嚴にし、離婚は容易に許すべからざるの規則を設けたならば表面上離婚を減ずる事は出來るのである。又昔のクリスト教の法律は、姦淫の罪の外如何なる虐待を受くるとも、離婚をする事は出來ぬとしたのであるが、これは必ず離婚を少くしたのであらう。又離婚は結婚が餘りに容易であるより起る弊害であるから、結婚を今一層むづかしくすれば、離婚は減ずるであらうと。此の樣な考も一應尤もに聞えるが、是等の如くする時は必ず一方に一層多くの弊害を伴ふ事を免れないのである。其の一例を擧ぐればバイエルムで一八四三年に於て「一定の資產を有せざれば結婚する事能はず」といふ法律を設けて以來、從前九十の割合であつた私生兒の數が百五十に增したといふ事である。其の外虐待、自殺等の結果を生じて、社會の罪惡は增すとも減ずる事はないのである。されば離婚を少からしめん爲に、種々なる法律上の制裁を設くるは、たとへ離婚の數を減ずる上に於て効果ありとするも、一方にそれよりもなほ大いなる弊害を增す事は明白なる道理である。畢竟社會を改良し、文明に進ましむる道は、先づ第一に結婚法を改め、家庭の不健全を救ふにありと云はねばならぬ。然るに我國にありては、結婚といふものが、當事者の愛、及び意志に由つて成立つのでなく、親の爲に、或は情實の爲に、形のみ結合するのである。殊に女は必ず嫁がねばならぬものとして、一身の自由さへ與へられず、又嫁ぎたる以上は如何に苦しき目に遇ふとも、其の家を死場所として生涯辛抱すべきもの、これを破るは非常なる不德であるとするのであるから、壓制的に形式上の夫婦を作つても、眞の意味の家庭は成立たぬ事は云ふ迄もない。

かゝる家庭を單位として成立つ國家は健全なるものであるべき道理がない。かやうにして不健全の國民を增すとも決して喜ぶべき事でない。故に少くとも結婚は意志の一致と、相互の愛とによつて成立つものでなければならぬ。併しながら今日の社會の事情、教育の程度の下に急速にこれを改良する事は、又必ず多大の弊害を釀すのである。故にこれは百年の仕事として徐々に着手しなければならぬ。然りと雖も結婚、離婚の責任は、もとより其の當事者にある事であるから、先づ根本たる當

事者を改めなければならぬ。そこで今日の當事者は如何なる決心を以てこれに臨まねばならぬかと云ふに、我々は犧牲的精神を以て世に處するは其の本務であるけれども、かやうな誤まれる風俗習慣の犧牲となつて、在來の結婚法に從ふとも、これは國家社會の爲にならない。のみならず、却て其の進歩を妨ぐる所以である。併しながらアメリカの如き先進國、英國の如き、家庭と云ふことを生涯の目的とする彼等の間にも、上述の如き悲しむべき離婚があるのであるから、人生に於て眞に意氣相投合せる夫婦、調和統一せる健全なる家庭と云ふは、實に僅少なる事を覺悟せねばならぬ。今一つ考ふべきは各國の統計を比較するに何れも全人口中、寡婦、結婚者の數と、未婚者の數と相半ばするのである。此の中から未成年者を引き去るとしても未婚者の數は非常に多いのである。それは此の表に由つて明らかである。(下表參照)

其の人達は結婚を厭ふのであらうかと云ふにさうではない。人間は確かに社會的の性質をもつものであるから、寧ろ之を欲するのである。然るに、其の望みを捨てゝ獨身生活をするものは、或は其の生涯の事業の爲に、家庭の幸福をも犧牲にするものがあらうが、其他の多くは必ず家庭を持ちたい慾望はあるのである。併し凡て教育ある人程、思慮深くなるものであるから

名百子女人成數ルス對ニ			名百子男人成數ルス對ニ			名百各人成數ルス對ニ			種類＼國別
鰥寡	既婚者	未婚者	鰥寡	既婚者	未婚者	鰥寡	既婚者	未婚者	
13	67	20	5	64	31	9	65	26	合衆國
14	58	28	6	65	29	10	61	29	英蘭及威斯
14	51	35	6	59	35	11	55	34	蘇格蘭
17	46	37	7	40	44	12	47	41	愛蘭
13	55	32	7	59	37	10	55	35	伯耳義
14	58	28	5	62	33	10	59	31	澳太利匈牙利

輕々には行はぬのである。而して眞に健全なる意志の結合せる夫婦關係を成り立たする事は如何に困難なるか、又一方に如何に社會の經濟上困難が存するかを知らねばならぬ。經濟上の困難とは卽ち結婚する前には必ず結婚後生活の準備、及び其の子供の教育をなし得るの準備を要するので、自然夫れだけの貯へがなければ、結婚する事は出來ないのである。

第四、婚約につきて注意すべき事

此の問題は最も重大なるものであるから、餘程愼重にして、且つ良心を明らかにして判斷をしたる上行はなければならないのである。是を定むるに二つの方法がある。第一は抽籤式とも云ふべき、卽ち媒介人の口に任せて、親も知らず、又自らも一面識もない人に嫁するのである。これは實に危險である。第二は選擇によるもの、此の選擇を分てば次の如くである。

選擇
- (1)他人の選擇に任するもの
  - 兩親又は親友等自分の最も信任する人の判斷に委ぬる事
- (2)自身にて選擇するもの
  - (イ)感情（本能）
  - (ロ)理性
  - (ハ)永く交際して双方の關係を知悉して後、定むる事、

此の二つの中、孰れが安全なるかと云ふに、

第一の抽籤式の方法は實に危險である。又選擇をする第一の方法なる自分の最も信任する人、卽ち年もたけ思慮もある所の兩親、親友等に選擇を委ね、これに判斷を任すればすべて安全であるかと云ふに是とても全く安全でない。然らば自身にて選擇すれば如何、我々の感情は甚だ我々を眩まし易きものである。我々の理性は不完全のものであつて、殊に兩性間の問題に就ては、感情、理性共に誤り易いのである。殊に世の中は複雜なる關係のもので、其の事情を內外より調べ如何によく考へ、又思慮を以て判斷してさへも、間違は起り易いものである。然らば双方共に永く交際して後、取極むるは如何といふに、西洋にても多く此の法によるが、是とても間違は免れないのである。學識、經驗共に該博にして、凡ての點には、非常に明るい人が、念に念を入れて取り極めた結婚でも、中々間違があるのである。況んや我國の如く交際の自由もなく、又之を調ぶる事も困難なる事情、習慣の下に、結婚するに至つては、實に間違のみの多いのは必然である。

理想の家庭は理想的結婚が行はれなければ決して作られない

のである。余が女子教育に從事した始めから、最も心配になるのは此の事である。青年子女が學校にある間は、各々理想を懷き、希望に滿ちて、向上するが、卒業後結婚して如何なる狀態になるであらうか。卒業後、學校時代の精神を全く失ふのも、又其の境遇を開拓して、自ら進んで行く力が出ないのも、皆此の結婚を誤るからである。多くの例によると大抵、婦人が結婚をすると人格が一變して、進歩の見込あつた人も、更に向上心がなくなり、只僅かに境遇に順應して行くだけより出來ない樣であるが、只社會に順應して行く丈で、どうして社會の弊を改め、罪惡を根底から拭ふ事が出來るであらうか。然し、普通の人は其の境遇に順應して、一家の調和を計る丈でも、餘程困難なので、終に破鏡の嘆に陷るのが多いのである。余が是を述べる理由は、結婚はよほど愼重にして、取り極めなければならないのであるが、然しまた一方には理想の結婚は容易に出來るものではなく理想の家庭も決して多いものではない。それで餘り理想は高過ぎてはならないと云ふ事である。然らば寧ろ獨身で終らんかと云ふと是は又誤りである。故により善きものを選ぶと云ふ考で、已はたとへ理想に達し得ざるとも犧牲となつて、次の人が眞の幸福を受けるやう、又理想的家庭の建設せられるやうにといふ願ひを以て進まねばならないのである。諸子の生涯を汽車の旅行に比して見れば、

第一等車に乘る人……理想的結婚
第二等……不完全の結婚
第三等……不都合の結婚
等外……慘憺たる結婚
特別……獨身者

此の中一等は論ずる迄もない。二等と三等とは結婚せぬよりは結婚する方がよろしいのである。次は寧ろ結婚せざるの勝れるに如かずである。獨身者と雖も或る意味に於て必ずしも家庭なきに非ず、子孫なきに非ず、高尙なる考に由つて、世の爲、人の爲働き得れば決して不幸な事はないのである。等外よりは特別に屬する方が幸福であると云はねばならぬ。

第五、結婚に就ての態度

(イ)用心深かれ、(ロ)謹愼なれ、(ハ)良心に從へ、(ニ)利己を去れ、(ホ)急ぐ事勿れ、(ヘ)冷靜なれ、(ト)普通の規則に從へ、といふこれだけを心得なければならぬ。

こゝに普通の規則といふは何であるか。これは一、正當なる愛、二、家庭、三、子孫といふこの三者の三位一體が結婚の目的物であつて、これを欲する事が動機とならねばならないとい

ふわけである。

第六、結婚に就て注意すべき個條

(イ)身體と精神との充分なる成熟を必要とす。双方の年齢よりも尚最も大切な事は身體の機關と、心意の力とが或程度迄の發達を遂げなければ理想的の結婚は行はれないのである。卽ち結婚せんとする男女は自ら維持し、子供を敎育し、親となるの力が備らねばならないのである。

(ロ)愛　此の要素の缺くべからざる事は前に述べたからこゝには略する。

(ハ)健康　自分の身體も必ず健康でなければならぬ。又先方も健全でなければならぬ。若し一方が健全でない時は、其の家庭は不幸である。故に虛弱な人は寧ろ結婚しないのを良しとするが之は程度による事であるから、一概には云ひ難いのである。癩病、癲癇、梅毒、偏狂等の病ある人、其の他生れない方が幸せであると云ふが如き人は、かゝる不幸を子孫に殘さない方が反つて社會の爲である。加答兒、胃病、神經過敏、弱質、身長の高過ぎる人、低過ぎる人、肥え過ぎ、痩せすぎ、是等も、遺傳するものであるから、同じ樣に似た體格の人同志の結婚は惡いのである。近親結婚の惡いのも是が爲である。

(ニ)双方の氣質の適合　双方の氣質は全く同じくない方がよろしい。何となれば餘り同じ樣なれば、双方の間が常に單調で、趣味なく、冷靜になり易いのである。又餘り違ひ過ぎると反つて一家の調和を得る事が出來ない。故に中庸を得なければ一家の幸福、及び健全な子孫を得難いのである。

(ホ)第五　結婚する人は家庭を持つ事、子供を育てる事を喜ぶ人でなければならない。

(ヘ)第六　道德の主義が一致して居らねばならぬ。例へば虛榮家と着實家との間、利己主義者と博愛主義者との間の如きは、到底調和し難いのである。然し全然其の主義が一致するといふ事は、望んで得られぬ事であるから、始めに於て互に充分注意して、同主義の者を求める事は必要であるが、不幸にして主義を異にする者であつた時には、互に感化し合ふ事、また互に恕し合ふ事が必要である。勿論、感化と云ふ事は、容易ならぬ事であるといふ事は、始めから覺悟しなければならぬ。然しまた少しでも人を感化するといふ事は、甚だ愉快の事である。

(ト)第七　敎育も双方相近からざる時は不幸である。一方は敎育高く、修養に勉むるにも拘らず、一方が無學文盲である時には、決して同情の通ふものではない。また趣味の合ふ筈もない。家庭に於て同情通はず、趣味合はずとしたならば、勢ひ外

に友を求め、娯樂を求めんとするもので、これ往々人の墮落する原因をなすものである。しかのみならず、妻は夫が彌々其の職務を全うせしむる樣、之を助け、たとへ辛苦の境遇を敢て迎ふるも、夫の志せる所を知つて、內顧の憂なからしむるだけの理解力がなければならぬ。力量がなければならぬ。夫も亦妻の家政、育兒等を出來る丈助くる事が必要である。夫に家庭といふ觀念のあるなしは、妻の働きに大關係があるのみならず、また一族の幸、不幸にも影響を及ぼす事多大である。

其の他家と家との關係は勿論、前に述べた、身體、敎育、精神上の事、及び主義等が凡て調和統一しなければ、眞の結婚は出來ないのである。金に嫁ぎ、家に嫁ぎ、官職、學位に嫁ぐ者が往往あるが、之等は其の生涯を誤る基である事は今更ではない、故に以上の注意を特に參考する事大切である。さて之等の注意を參照して判斷を誤らぬ樣にするには如何にすべきかと云へば、此處に又種々の問題が生ずるのである。

結婚に就て從前は、何故にするとか、何時するとか云ふ問題を重く考へたが、今後は如何にすべきと云ふ事を研究せねばならない。併し、其の全體を云ふ暇はないから、其の一部に就て云はんとするのである。先づ

第一、如何にして双方の適合性を知るか

といふに先方の事情、性質、學問、傾向、品性等を知る事は概して困難であるが、第一に、自分は如何なるものであるかを知らねばならぬ。是を知るには己が身體、性質は祖先より傳つて來て居るから、己が祖先の事から、父母、兄弟、親族の血統を考へ、己の體質、氣質、品性、趣味は如何なるものなるかと云ふ事を知る事が必要である。而して先方より申し込ありたる時は、先方は凡ての點に於て己より勝つて居るから、彼處に嫁がば自身の爲には幸福なりとする。併し先方の望みに對しては、彼方に知れずして己のみ知つた缺點があると思ふ時は、斷然謝絕しなければならない、卽ち判斷をするに就て無我でなければならない。往々自身の弱點を秘して嫁ぐものがあるが、かゝる人は、たとへ外見は如何に幸福な樣でも、遂に其の意思、思想、感情、趣味等が適合する事が出來ないから、互に忌み嫌ふ樣になつて、遂には破鏡の原因となるのである。是迄の經驗によるに多くの女子は、望外に望みを抱く者が少くないのである。是は己の分を知らない者といはねばならぬ。

第二、如何にして先方を知るべきか

先づ其の人の先祖、親類について調べなければならない。（但し親は賢くて子は愚な者所謂不肖の子もある。かゝる例は免れないのである）次に其の人の交際する朋友、殊に親友によ

つてわかるのである。而して又其の人の趣味、例へば書物、室内の裝飾、平素の衣服、金錢の使用法等によつて、主義、品性、志等は大抵推察せられるのである。

兎も角我國の今日は斯かる事は、結婚の當事者、殊に女子にあつては自ら直接に調査する事は出來ないのであるから、間接に兩親、其の他に任せなければならない。親が其の双方の事情を委しく調べて、當事者の判斷を助ける事の必要なことは、我邦のみならず、比較的結婚に就て自由の思想を有する西洋でも最も重んずる事である。但し名ばかりの親で、子の方が餘程判斷の出來る者もあるから、之は其の限りではない。次に最も我々の相談相手となるものは、親友である。時としては親が知らない事、例へば體質、趣味等も却て親友の方がよく知つて居る事がある。或は双方の事をよく熟知して、昔時云ふ媒酌人以上に、非常の厚意を以て媒酌に立つ事がある。然し親友も兩親も宜しからんといふので、自分はよく先方を知らないが乘り氣になる樣なのは、最も輕卒なものと云はなければならない。親もよしと云ひ、親友もよしとする位ならば、相當の監督者の下に自分も交際して見る事が必要である。然れどもそこ迄話を進めては、斷然拒絶しなければならぬ場合に困難を感ずるから其の邊は大いに斟酌をしなければならないのである。それからまた親、或は其の他の信任すべき人の監督のもとに、男子と交際するにしても、餘程嚴格にしなければならない。佛國人は文明國民中輕卒なる傾きがあると云ふが、矢張り男女交際に就ては非常に嚴格である。直ちに心安だてをしたり、又輕卒な擧動などある人は、實に其の人の品性をおとし、其の人の生涯を誤るものである。風采、言語、思想、感情からすべてに犯すべからざる威嚴を保ち、眞に淑女たるの品位を保たなければならない。此の嚴格な風俗が行はれなければ、決して我日本に、男女交際は行はれないのである。

第七、家庭を作りて後の心得

結婚と云ふものは、常に詩の材料となり、又は種々の小說などに描かれてある。其の結婚より生ずる家庭と云ふものは、實に幸福の滿ちた所で、家庭と天國と殆ど同じものの如く、若い人の胸には響くのである。然し是は我國は勿論、歐米にても得難い事である。家庭は始めより斯く樂しくゆくべきものではない。兎も角も異つた男女の相によつて成立せしむるものであるから、始めより其の爲に意志の統一、思想、感情、趣味の調和があつて琴瑟相和するが如く行かないのは當然である。苟くも此の幸福なる狀態に進めようと思ふならば男女相互に努力を要

するのである。かくしてよく調和を保つて居る家庭は、一つの美術である、音樂である、又詩である。併しながらいつも詩と云ふ麗しいものも之を作る人は非常に苦しんで居つたものである事を忘れてはならない。涙あるのみが眞の詩人ではない、其の感情を教育し、之を支配した者が詩人である。又如何なる大大詩人と雖も、其の感情を詩化するのには非常なる努力を要するのである。音樂も又同樣である。音樂には階音、調和、音律と云ふものがあつて、始めて麗しいと感ぜしむるものとなるのである。我々が家庭に入れば双方に感情がある、其の感情が只むやみに働いたとて、眞正の愛は生れるものではない。大いに己を殺し、努力、奮鬪して、始めて眞の幸福又眞の意志の結合は出來るのである。本校生徒が寮風を作り、櫻楓會を組織する事も同樣である。寮監が數多の學生を育てるのは誠に愉快であると云はれるが、其の中には如何に多くの、困難があるかと思うて見られよ。如何に適合性の人と結婚しても始めの中は互に遠慮があり、珍しい處より睦ましいが、其の後は餘程互に修養を務めなければ、良風を作り育てゝゆく譯にゆかぬのである。男子愼まなければならないが、殊に女子は家庭の主宰者であるより、家庭をして和氣靄然たらしめ、人も樂しみ、自らも樂しむ迄に、克己忍耐して、其の良風を育てる事に務めねばならぬ。夫婦の愛よりも更に自然的なものは、親子の愛であるが、親子の愛でも矢張り教育しなければ調和せぬ。

予は今諸子に別れるに臨んで「(記者云ふ、當時恰も第一回卒業生が將に業を終へんとする頃なりき。)餞別として諸子に與へたいものがある。それは一本の短刀である。昔は武士の娘が他に嫁するに當つては必ず短刀を與へたものである。其の心は一は護身の爲であるが、一は一旦嫁した後は、決して生きて歸らないと云ふ決心を現したものである。諸子は何卒此の精神を以て、本校を出られん事を切望するのである。彼のスパルタの婦人が我子の出陣に際して、盾を渡したのも是の決心を示したのである。諸子が世に出でて家庭を作り、社會事業に携り、或は教育に從事するに當りて、戰をすると云ふ考を以て、進まば、如何なる事にも堪へられるのである。

其の行く道は荊棘があり、誘惑がある。然し決死の精神あらば、麗しき家庭を作り、又世の爲、人の爲に盡す事が出來るであらう。天國は我等が苦心して作るべき所のものである。如何に小さい事でも、己の本務を全ふするには、充分の用意をしなければならぬ。戰をなすにも準備、計畫を要するのである、我々も將來に就て經綸が立たなければ、矢張り勝利は得られないのである。如何に天佑によるとは云へ、働かない者の上には

決して最後の勝利は與へられないのである。故に諸子が充分の用意をして、生涯の經綸を立て、其處に向つて進まねばならぬ。家庭に入る人も社會に出づる人も、學校に教鞭をとる人も、皆同じ事である。實に誠の事を成さんと欲すれば、實際は非常に骨の折れる事で、努力、奮闘を要するのである。

然らば如何なる態度を以て進まねばならぬかといふに、第一柔順といふ事が大切である。從順とは如何なるものであらうか。之に答えて、幼にしては父母に從ひ、嫁しては夫に從ひ、老いては子に從ふ如く、凡て己の一身をあげて他人に服する事であると云へる。實にその通りである。從順は己の本務に服從する事であつて、親に對して爲さねばならぬ事に服し、夫に對して爲すべき本務を盡し、子に對しては負ふべき義務を果し、或は君主、國家の命令を遵奉するが如く、孝、貞、愛、忠等、自他の關係の理想的なるものを含むものである。其の關係より生ずる働きをさして奉仕といふので、己の身命を喜んで捧げて、人の安寧幸福を計り、人の要求に應じ、人の希望を叶へる事である。故に從順卽ち人の爲に奉仕するは、よく自らを境遇に適合せしめて、自他の關係を理想的に結合せしむるに足る、知識と、品性のあるものが始めてなし能ふのである。而してこれは決して卑屈と混同すべきではない。卽ち從順と云ふは全く自分の人格を無視するものではないので、意志あり、力あり、高尙なる人格がなければここに云ふ眞正の從順は決してなし能はないのである。

第二に辛抱といふ事が大切である。人の一生は決して平坦のものではない、風も吹かう、波も荒れよう、また人の性質も亦圓滿のものではない、朝夕共に居る時には、其の長所もよくわかるであらうが、缺點は猶更見えて苦しいであらう。この時に當つて境遇を啓く爲に努力し、感化する爲に奪闘する事、もとより大切であるが、一朝一夕に其の効果をあせらず、辛抱する事が大切である。「石の上にも三年」である。辛抱するものが、苦痛の中に慰安を覺え、暗黑の中に光明を認むる事が出來るのである。

第三には犧牲的精神を持たなければならぬ。人としてこの精神なきものは誠に不幸である。「受くるより與ふるは幸なり」受けんとする時いかほど授けられても滿足するものでない、人間の慾望は限りがない。そこで不平が起り、不平はあらゆる光明を奪ふもので、何處に行きても樂しからず、何人に對しても溫かでない樣に覺えるのである。之に反して與へんとするものは、何れを向いても愉快な世界である。人にもし缺點あれば、己の長所を以て之を感化せんとし、世にもし不快の事があれ

ば、親切な心を以てこれを矯正せんとするものである。諺にも蒔かぬ種は生へぬと云ふ事がある。人の重荷を負はざれば、我重荷は輕くならないものである。この犧牲的精神あるものは、安心立命の域にあるものというてよろしい、此の心を以て家庭を營むならば、家庭は實に麗しく、學校の爲に此の精神を以て進まばその感化は洽くゆき渡るのである。今一つ諸子の爲に心配する事は、四圍の境遇の變るにつれて決心の動かされる事はないかといふ事である。柔順といひ、犧牲というても、決して自分の主義を曲げ、或は之を葬るものでない事は前に述べた如くである。主義は經驗或は世の大勢に從つて成長する事は必要であるが、變化すべきものではない。勿論、世人の惡風に染み惡化せられるといふ事は最も忌むべき事であるが、この惡風は往々麗しき姿を以て誘ふので惑はされ易いのである。故に諸子は判斷を正しくする事が大切である。實に判斷は人の一生の幸、不幸を分つもので、一朝判斷を誤つた爲に、終生取りかへしのつかぬ不幸に陷る事はめづらしくない。判斷を正しくする爲には、常に知識を養ひ、その見界を廣めねばならぬ。判斷を誤らす第一の原因は知識の狹小と偏見とである事を忘れてはならぬ。諸子も我國に於ては、始めて高等教育を受けた者である。一度社會に出るに及んでは、四圍の人々の目を峙てゝ迎へられるに遇ひ、批難攻擊の的となる事は明らかである。諸子の境遇は決して順境ではなく、多くは逆境であらう。然し恰も船舶が、風浪にあつて、蒸汽力を彌々增すが如く、諸子は逆境にあつて益々主義を愛する情は燃えねばならぬ。之と闘はんとする力は湧き出でねばならぬ。然し無智なる爲、不注意なる爲に、敢て逆境を買ふといふ事は、獨り自分の生涯を殺すのみならず、國家の活力を奪ふ罪人といはねばならぬ。結婚は實に人の運命の黑白を分つ最大問題である、家庭の成立する重要事件である。國家、社會の根本は、玆に源を發するというても、敢て過言でない。人類進運の原動力は、こゝに基因するというても、敢て不當の言ではない。その最大にして、重要なる結婚問題に關し、男女とも聊かの知識なく、主義なく、理想なくして可なるべきものであらうか。苟くも教育あるものは、斯くの如き問題を、只自分一個の事として取扱ふことなく、國家、社會に對する關係を省み、人類に對する責任を感じて、愼重の態度と、周到なる注意との元に決定する事が出來うる丈の知識を養ひ、主義と理想とを抱く事が必要である。

（「講演集」第一）

人類生活の三制度

家庭、學校、社會の關係に就て

家庭、學校、社會の三者は、各自密接の關係を有するものにして、三者は各々互に三者の性質を備ふるものなり。卽ち家庭は吾人の經べき最初の社會にして、何人と雖も、必ず經驗する處なり。この家庭はやがて延長して學校といふ社會となり、一層延長して國家社會となる。また家庭は最も大切なる人生の基礎となる學校なり。而して學校を出で國家社會の人となる、そこに大學あり、教師あるなり。人、家庭を離れて學校に入るとも、學校は一つの家庭なり。國家社會はまた一つの大いなる家庭にして、一つの國土のもと、法律のもとに業を營む國民は兄弟にして、王者は父なり。

以上の三者は社會の構成せる最も大切なる制度にして、この三つの制度は各々文明に貢献する理由となるべき理想の上に建てらる。

家庭は如何なる理想の上に建てらるべきか。一言を以ていへば柔順といふ理想の上に建てらるべきなり。人の動物的性情を化し、高尚なる精神的のものに教育して、實現し、發展しゆくも、亦國家に、社會に、忠良なる國民となりうるも、皆、只、柔順の德によりて、己を適應せしむるによる。

この柔順の德を養ふこと、家庭の最も大切なる働きなり。元來柔順は秩序を保つ上に缺くべからず。宇内に一大秩序あるは、萬有悉く萬古不易の宇内の法則の柔順なるによる。こは必然的にして自由の意志あるにあらず。然るに人間は自由の意志あるを以て、時に意志の選擇を誤り、柔順の德を缺くことあり。

この柔順の德は最初母に從ふ事より起り、延いて父に從ひ、王者に從ひ、教師に從ひ、眞理に從ふ。この從ふということは社會を構成する最も大切なる要素なり。之卽ち人に身を委ね、心を捧ぐることなればなり。

この德は最初模倣によりて養はれ、稍々進みては暗示をうけて自ら考へ、工夫して從ふ。終に進みてはインスピレーションをうけ、眞に自ら眞理と考へ如何にもして、これに自身を適應せしめんと從ふものなり。

約言すれば人の實現、發展は柔順によるものにして家庭はこれを養ふ所なり。

學校は如何なる理想の上にたつべきか、進化或は發達の上に立つべきものなり。卽ち人の自然より受けたる伏能をして、自

然が許す限り發展せしむる所なり。家庭に於ては、全く人に身を委ねたれども、學校に至り、始めて獨立心起り、個人性發達し、我に附與されたる心身の力を發展し、複雜なる發達を遂げて適性を發揮し、人格を作るなり。

社會を構成する基礎となる理想は、貢献、奉仕なり。卽ち己を失うて、社會を作るものにして己は社會の命を養ふ材料となるなり。

今右の三者の關係を示せば

人類生活の三制度

家庭　小兒、他人のもの、依信、感化をうく、從順、　家庭生活

學校　青年、吾もの、　獨立、實現、　進步發達、　學校生活

社會　大人、社會のもの、救濟、感化を與ふ、貢献、　社會生活

以上の三者は何れも人類に必要にして、人類生活の三方面、進步の三階段なり。而してこの三方面の生活を終始具備せざれば、人は完全なる發達を遂ぐること能はざるなり。常に幼兒の如く從順となりて、感化をうくること大切なるとともに、一日、一時と雖も、我の進步、發達を忽せにすべからず。換言すれば學校生活を離るべからざるなり。而して最も發達進步したる我を社會に貢献することは、最後の目的たるなり。社會に貢献すとは、所謂人道に貢献するものにして、この精神と實行とは、この社會を命あらしむるものなり。發展せしむるものなり。個人もまた貢献によりて品性作らるれば、永遠に己が精神を生かすことをうる者なり。何れの人と雖も如何なる處にありと雖も、この三者の生活を離るゝ時は、人間としての價値を離るるものなることを忘るべからず。

（「家庭週報」第三十號）明治三十八年八月

研究に就て

模倣、創始といへば、全く相異れるが如く聞ゆ。勿論、兩者は相同じからずと雖も、程度論にして、絕對に異れるにあらず、されば決して絕對的模倣なきと同時に、絕對的創始もなし。模倣は已に表現せられたるものに習ふ分子多きを云ひ、創造とは新たに考へ出したる分子多きをいふ。研究また模倣と創造との働きに外ならず。

研究といへば容易ならぬものゝ如く考へ、最も高き教育をう

けたる大學生の外、能はぬものなり、となすは、研究の進歩發達を妨ぐるものなり。勿論こは、最も頭腦の進歩したる人、及び最も發達したる國民の頭腦の有するものにしてこれ等の人の頭腦を俟ちて始めて、改良進歩は行はるゝものなり。されども婦人なるが故に能はず、年若きが故に能はずといふは大いなる誤りなり。見よこの能力は幼稚園の兒童に最も多く表るゝものならずや。これを抑壓したるは、從來の教育の、最も主なる弊害といふべし、即ちこの働きを充分に發達せしめんが爲、教師たるものは出來得るだけその個性を現さんことに注意すべきなり。人が人として命を保ちて働くをうるは、只研究の力あるによるものにして、この力を養ふこそ、實に教育の任務なれ。

研究は人を傲慢にするの恐れなきかと、これまた杞憂にして、研究の主義に生くる人は却て着實にして謙遜なり。如何となれば只知らんが爲に學ばず學びたる知識を實現することを目的とするを以て、學びたる知識は凡て已に同化す。同化せざれば、表現すること能はざればなり。故に學ぶことも着實となり知識もまた正確となり、定理空想を喜ばざるに至る。その結果自然謙遜となる。また研究創始するの人は、教師または他人の說を取らざる頑固なる人となるが如く考へらるゝは大いなる誤りにして、却て獨斷を喜ばずして、廣く人の說を容るゝに至る。

研究創始等いふ時は、感情教育に害あらざるかと。これまた正反對にして、この方法によるは最もよく感情、趣味の發達するものなり。即ち研究創始せんが爲には、本能興味をもとゝせざるべからず。本能興味は感情に基するを以て、自然感情を教育するをうるなり。さればこの方法は直感力を養ふ、今日の文學の骨董視せらるゝ弊を敗るには、唯一の方法なりといふべし。

研究をなすものは常識を缺くの恐れあらずやと。物事を表現するには、最も常識を要するものなり。如何となればこの動機は、常に人の爲、社會の爲、その需要に應ずるに外ならざればなり。されば研究、實現をなすの人は、最も己を知り、人を知るを得るの人にして、己を知り、人を知るには、常識により、適當の判斷を下さざるべからざるを以てなり。

研究は經驗を重んずるを以て、讀書を厭ふに至らざるかと。然れども最も多くの書を最も有益に用ふるの人は、實に研究心に富みたる人なりといふべし。「吾人はたゞに書物を味ふのみならず、之を食し、之を消化せよ」とは、研究を重んずる人の讀書の法なり。

（「家庭週報」第三十三號）明治三十八年九月

櫻楓館開館式の辭

來賓諸君、今日は殊に三井さん御夫妻の御出でを願ひまして、本校に最も關係の深い方々と本校教職員、並に櫻楓會員、大學部生一同及び附屬高等女學校の各級から出ました代表者、此の堂に集うて、丁度先年皇后陛下より本校へ御下賜のありました、本校に於て何時までも記念致しまする當日に於て、今度落成になりました櫻楓館の開館式を擧行することを得るは我々の誠に深く喜ぶ所であります。我々は何故に今日は深き喜びを以て此の式に臨みましたか、是には喜ぶべき理由を有して居ることゝ私は信じます、故に一言其の理由に就て私は申述べて今日の式辭に代へたいと思ひます。

今日櫻楓館の落成しましたに就て我々の深く喜ぶことの其の主なるものゝ一つは、此の櫻楓會が御婦人の手で經營されて御婦人の自動的の働きによつて成長發達して今日あるを致したといふことゝ、此の事業の爲に缺くべからざる殆ど此の櫻楓會の身體とも云ふべき櫻楓館が全く御婦人の手に依つて成就されたといふ事であらうと思ふ。今日迄我邦に於る婦人の事業、卽ち女子教育事業の如きも、其の他婦人に關係ある殆ど婦人の領分たる、婦人自身の外に誰も手を着けることの出來ない仕事迄も多くは男子の手に依つて經營され、男子に依つて維持され、男子の力に依つて支配されて女子は唯受動的に動くのである。恰も女子は人形であつて、之を動かす者は黑幕の中に常に男子が隱れて働いて居つたに過ぎぬ樣な觀があるのです。我女子大學の如きも一見外面より之を見れば亦男子の手に依つて企てられ、男子に依つて維持され、男子に依つて動いて居る樣に見えるのであります。無論本校の今日あるは大隈伯爵の如き有力なる方が創立委員長として御働き下され、又實業界に信用ある手腕ある澁澤男爵の如きが會計監督として熱心に此の事業を成立たせんとして御盡力を下され、其の他西園寺公爵の如き、岡部子爵の如き、有力なる創立委員があつて、多くの力がそこに集中されまして、此の結果を得たのであるといふことは事實であります。併しながら此の事業が他の我邦の女子の名を以て起つたものゝ如くに、全く男子の手に依つて出來、男子の力に依つて支配されて居ると考へたならば、是は皮相の觀察であります。唯半面の眞理であります。其の實を言へば、實は本校は半ば女子の手に依つて出來たものであり、女子の手によつて動いて居るといふことは、決して過言ではあるまいと思ふのです。

本校の起るに當りまして、最も有力なる發起人の一人は御婦

人であつたといふ事は誰も認めて居ることであります。私は常に御婦人の價値を認めたいといふことを渇望して居つた。然るに大阪に於て此の廣岡夫人に御面會をして、始めて其の經營に係るところの炭鑛事業を拜見致しました。殆ど夫人の全力、其の生涯の半ばを此の事業に集中されて居るといふことを見出しました。また夫人は此の大學を建てる事を女子の天職と御感じになり我邦の必要といふことを認められて殆ど其の炭鑛事業の如き熱心を以て此の事業の爲に御盡し下さつた。爲に此の學校が困難なるにも拘らず其の目的を達する樣になつたといふ事は事實であります。

次に本校に最も深い感動を與へ、校風を作る上に偉大なる感化力を與へ給うたものは、是より四ケ年前明治三十四年の九月二十五日、皇后陛下の御思召に依りまして本校に二千圓を御下賜になりました事であります。此の事が如何に本校生徒に感動を與へ、又婦人社會に感化を及ぼしましたかといふことは、私共が常に其後の色々に現るゝ事に依つて感じて居る所であります。其の翌年に於まして、女子自ら起たなければならぬといふ動機からして、櫻楓會を起すといふ議が起り、其の一年間に充分な精神が表れて、第一回の卒業生を出すと共に、健全なる櫻楓會といふものが生れ出たのです。其の櫻楓會の精神と、其の働き、其の各部の關係の大體は、今度の櫻楓館の二階の所に櫻楓樹の形に書き表して居ることによつて略々分りますが、社會部と家庭部と教育部の三部に分れて、御婦人の頭を集めて三部の研究を重ね、其の考を實行する爲に色々なる機關を備へて今日に至つたのであります。

又本校全體の教育の上に、寮風を作り、校風を作る上に、此の櫻楓會の教育部の働きが大いに與つて力があつたことは、今年から一年生の倫理に於まして、早く本校の主義に同化する働きを櫻楓會より御助けになつて、其の効果が著しく現れたと思ふのであります。色々精神上の働きが現れたのみならず、形に現れた事業即ち櫻楓會の機關雜誌並に新聞の如き、又は實業部、商業部、園藝部、牧畜部といふやうな職業に關する事業の如きものも、全く此のあなた方の考を以て經營し、あなた方の自動的の働きに依つて、實行されて、色々なる結果を現して居るといふことは事實であります。其の實業部の目的には色々あるが、其の主なるものは、我校の教育の中に、經濟的要素、實業的要素を加へるといふこと、我邦の教育に自營獨立の精神を吹込む、之を爲すには勞働を貴び、職業を重んずるといふ風を養はなければならない。皆みな襷をかけて喜んで勞働に服したのであります。其の働きは未だ微々たるものであるが、兎も角

も其の働きに依りて、昨年は十七人ばかり、今年は二十二名の自給生を養ふことを得たのである。是が若し西洋の大學の如くスカラーシップ（奬學金）の基金といふに依つて、是だけの人を養はうと思つたならば、少く積りましても七萬圓の基金が無ければ出來なかつたのであります。然るに御婦人であつて、少しも經驗の無い仕事を、創めて自ら維持し、且つ其の實業部から今度の櫻楓館にも二百五十圓を寄附する事になつた、毎月其の利潤を積んで行くことが出來るやうな經濟を立てゝ行くことが出來るといふことは、私共の最も喜ぶ所である。

然るに事業は段々擴がつて參りました。今度消費組合を始めるやうになつた、色々教育部に必要なる園藝も、牧畜も擴張されるやうになつて居る。其の複雜なる事務、銀行部の事務も、商業部の事務も、櫻楓會の事務も、僅かに四坪の小さな受付の内で不便極まる内に於て事務を執つて御いでになつたのである。それも尙忍ぶ可しであるが、どうしても此の「週報」などを、本當の週刊にするには、編輯上便利な場所に置かねばならぬ事になつて來る。身體なしに、機關なしに、充分な働きを遂げるといふ事は、到底爲し能はぬ場合になりまして、此の必要を見て本校の評議員三井三郎助氏夫人は喜んで此の櫻楓館といふものを建てようといふ決心をして下さつたのです。是は櫻楓會員の皆御存じの通り、最初から櫻楓會には非常に同情を寄せて、出來るだけの力を櫻楓會の爲に致して居られる譯でありますから、誠に櫻楓會がさう云ふ事に苦しんで居ることを見、又櫻楓會の事業に必要なる此の櫻楓館の機關の必要を認めて、遂に櫻楓館を御建て下さり、今日其の落成を見るに至つたのであります。

斯くの如く櫻楓會の事業は、最初より婦人の手によつて經營され、その働きは暫くも停止することはない。もう無限に色々な發達の兆が見えて居る。此の頃櫻楓會の働きの一枝に幼稚園、小學校がある。その幼稚園、小學校に必要なる幼稚者の家の開設、卽ち理想の教育をする場所が必要であるといふことを本校の或評議員の御夫人が聞かれて、之に要する五千圓を御寄附になつたのである。私は本校の事業と生命は、半ば御婦人の手に依つて成つたものである、御婦人自身の働きによつて今活動しつゝあるといふことを私共が、見遁してはならない事實であらうと思ふ。是が今日此の櫻楓館の落成に就て私の最も喜ぶ理由の一つであります。

併しながら此の事を以て櫻楓會員たる皆さんが決して滿足なさることは出來まい。必ず今日此の事を考へるに當つては、一方には不充分に、遺憾に感ずるところのものが多々あるだらう

と思ひます。唯我々は今日此の席に於て、今日までの跡方を見て喜ぶのみではいけない。同時に將來を慮つて將來の責任を考へて大いに奮起せねばならない、決心せねばならないと思ふ。私共今日あなた方と喜ぶのに一面を見てはならぬ。更に他の一面を見れば誠に不滿足に感ずるのです。其の不滿足に感ずる所の譯も同時にあなた方に現して置く。其の不滿足なる感じの起る所の源が三つ程あるのです。そこで喜ぶべき方面からいふと、今日までの我邦の婦人と今日のあなた方とを比較して見、又今日我日本にあるところの婦人の事業と、本校に現れた此の有樣とを比較して見ると、大いに異る點を見出すのであります。併しながら之をあなた方の將來の理想の働きと比較して見、又は之を世界各國の文明國の婦人の働きに比較して見、又我校の中を男女の二要素に成つてゐるものと看做して、其の男子の部分と、女子の部分とを比較して見ますと、誠にどうもまだ足らない、不滿足であるといふやうな感が起らざるを得ないのであります。

第一に我校の成立つてゐる男子の働きの部分と、女子の働きの部分とを比較して見たら如何であるか。前の比較は精神から見て內側から見て言ふところのものであるが、今度は外側から之を比較して見たらどうであるか。先づ此の學校を作るに必要なる基金はどうして、誰の手によつて出來たかといふと、一部分は御婦人の手に依つて出來た。今の廣岡夫人、三井夫人其の他の御婦人方が、本校に御寄附なすつた高を調べますと三萬圓である。畏くも皇后陛下よりの御下賜金も加へまして三萬圓これが御婦人に依つて寄附された所のものであります。男子の方は初めから寄附された總てを集めますと、約三十五萬圓であります。三十五萬圓の內で三萬圓だけは女子の寄附になるのであるから、之を百分比例して見ると、女子の働きは百分の八であります。あとの百分の九十二は男子である。女子大學の百分の八といふものが婦人の手に依つて出來たのである。又本校教授の男女の比較をして見ると、如何であるかと申しますと、大學部に於ては女子の教授は三名である。あとの六十人あまりは悉く男子である。甚しきは女子に禮儀作法を教へる先生も、料理を教へる先生も矢張り男子である。斯ういふ事は段々比較して見ると、どうもまだ滿足が出來ないといふ事が起つて來るのであります。

第二に之を西洋各國の婦人の働きに比較して見たら如何であるか。亞米利加の最も有力なる大學の一つなるスミス大學は、スミス夫人といふ女の手一つに依つて成立つたものである。亞米利加の女子教育の淵源をなしたマウントホーリーヨーク大學

は、メリーライオンの手に依つて成つたものである。女子教育を主張し女子教育を實行し、總ての男子の反對に戰うて、遂に此の女子教育をして勝利を得せしめたものは、悉く婦人の手である。我邦の女子教育も男子に依つて主張され、男子に依つて經營され、男子に依つて教育され、男子に依つて高められんとしてゐる。亞米利加は卽ち女子自ら自らを高め、自ら自らを研究し、自ら自らを教へ、自ら自らを改革したのではないか、自ら自らの働きを取つたではないか、是が非常に盛んなる所以である。マウントホーリーヨーク大學は、校長から小使に至るまで悉く女子である。男子といふものは一人も無い。ウエルスレー女子大學の如きも其の校長から教授まで悉く女子である。其の中一人か二人男子が混つて居るといふ比例である。中には男子が校長をやつて居る大學もありますが、其の教授の大部分は悉く女子自らやつて居る。獨りそればかりではない、中學若くは師範學校或は中學校から以下の教育は悉く女子の手でやつて居る。高等學校は無論、校長も、先生も、皆女子であります。我邦では二百ばかりある高等女學校の校長は男子であり、其の内一人か二人は婦人の校長があるかも知れませぬ。それも覺束ない、教師も過半以上男子である。女子を教育するに男子が働かなければならぬ。かの國の婦人は、獨り己の領分に屬する仕事ばかりぢやない。男子の領分にまでも這入り、或は男子の酒呑を改革し、或は兵隊の中に入つて働き、或は勞働者の中に入つて働くといふ樣に、大部分の働きは女子の手に依つて成つてゐる。眞に社會を高め、社會を清め、社會を改革するといふやうな眞面目な働き、高尙な働き、道德的働きは、女子の頭腦に依つて經營され女子の手に依つて是が成就されて行き居るのであります。斯くの如き女子の力、女子の働きを、我日本の女子の働きと比較して見たらどうであるか、雲泥の差があるではないか。斯ういふ樣に比較して見たら、私共此の現狀に滿足して居られるか、是で女子が大分高まつたのである、女子が眼を覺ましたのであるといふ事が出來ませうか。

第三にはあなた方が今日實現して居ることゝ、發表して居ることゝ、あなた方の將來に屬する理想と目的に比較して見たならば滿足が出來ないのであります。あなた方は此の櫻楓會の起る當時に於まして、五十年の經綸を立てたではないか、第二の維新は我々の手に依つて成さるべきものであるといふ確信を置いたでは無いか。我が第二の國民を教育し、教育を改良するには我々の手によつて成さなければならない、といふ必要を感じて居るでは無いか。眞に此の社會の犧牲的精神を深く印象し、社會心を健全に發達させるといふことは、實に我々の天職であ

るといふことをあなた方は信じて御出でになるでは無いか。其のあなた方の使命と、あなた方の責任と、今日あなた方がやつて居る實力と、あなた方が發表した所の力とは釣合ひますか。若し釣合はなかつたならばさう云ふ希望は空望である、空想である。私は決してあなた方に男子と競爭をし、男子と職業を爭ひ、男子と同じ様な教育を受けよといふのではない。併しながらあなた方の使命を全ふするには、分量に於て、程度に於ては男子と同様に進歩し、男子が持つて居る其の力、男子が持つてゐる資力なり、知識なりを持たねばならぬ。殊に婦人の天職である、此の社會心を養ひ、犧牲の精神を弘め、平和の神となつて社會を融和するといふ如き働きをなすには、男子に數倍する道德、同情、犧牲の精神といふやうなものが出來なければ到底言ふべくして行はれない事である。故に德といふやうなもの、理想といふやうなもの、犧牲の精神といふものが男子に數倍優つて來なければならぬ。然るに今日のあなた方の希望と、あなた方の實力とを比較すれば雲泥の差があるから、到底現狀に安じて居つて、大分婦人の働きが現れた如き考を持つて居るならば、大變間違ひである。實に謙遜つて我々の責任の重い事を感じ、我々が今日より眼を覺まさなければならない。今日屹立としてゐる櫻楓館の聳へた様に、願はくばあなた方は今日より一層奮起して進んで貰ひたいです。此の櫻楓館の基礎が鞏固に定まつた如くあなたの決心を一層固めて貰ひたい。此の櫻楓館の木や石や裝飾の材料が一つに寄つて調和統一して、今日の美觀を呈し、あなた方に斯くの如き便宜を與へて吳れる様に、あなた方が全會一致して調和統一して櫻楓會の光を輝かし、櫻楓會の機關となつて充分なる活動を試み、充分なる發展を試みて、あなた方の使命、此の世紀に於るところの我日本婦人の大責任を全ふするといふ決心を以て此の櫻楓館を今日は御開きにならなければならぬといふ事を私は深く感ずるのであります。

（「家庭週報」第三十四號）明治三十八年九月

平和の勇士を作れ

曩に日露戰爭の開始せらるゝに當り、吾人は當時我國民の態度の樂天的、厭世的にして、忽ち喜び、忽ち悲しみ、忽ち笑ひ、忽ち憂ひ、極端より他の極端に移るの速かにして、而も消極的、受動的なるを觀て、吾人は須らく改善主義、卽ち積極的態度を以て、世界の大舞臺に立ち、百年の大戰に耐ふるの大覺悟なかるべからざるを論じたりしが、今や戰爭の終らんとするに際して、再び前言を繰返すの必要あるを感ぜずんばあらず。

日露の戰爭が、國家運命の消長に關する大事にして、其の勝敗は我民族の興敗の岐るゝ所たるを自覺したる我國民の態度は、期せずして莊重となり、眞面目となり、愛國の情熱燃ゆるが如く而も勝ちて誇らず、沈着雄大、道德あり、勇氣あり、知慮ある國民の性格は、端なくも多年異人種、異教國として、其の文明の眞相を疑ひたる世界列國民の迷想を攪破し、輕侮嫉視の念は一變して讃嘆尊敬となり、其の發達に對して深き希望を喚起するに至れり。然るに一度講和の軟風吹き來るや、國民の態度變じて稍愼重を失ひ、勝利の光榮に幻惑し、幾十億の償金を夢想して、浮雲の如き前途の榮華を待望して餘念なかりしが如きものあり。而して講和條約の眞相の傳へらるるに及びては、驚歎悲痛、異論百說、冷靜にして善後を策するの途に出でず、再び悲觀の極に陷るに至れり。固より國民が平和の回復を喜び、或は時事の非なるを憤る、之人心の自然なりと云ふと雖も、餘りに極端に移り易き國民の態度は、列國の感情に影響する所甚大にして、決して其の尊敬と同情を維持する所以にあらず。我帝國の全權委員が、海陸連勝の餘威を以てして、尙且つ國民の不滿を惹起するが如き、不本意の結末を見ざるを得ざるに至りたるもの、實に列國感情の推移に因するもの多かるべきを信ずると共に、露國全權をして乘ずべき間隙を與へたるもの、此の國民の態度、亦實に其の一因たるべきを認む。嗚呼此の千歲一遇の時期に會して、油斷大敵を釀成するに至れるを深く悲しまずんばあらざるなり。

茲に於て、吾人は講和の結末の不首尾を以て單に罪を當局に歸して止むべきにあらず。其の朝にあると野にあるとを問はず、國民たる者、須らく其の性格の弱點を反省し、進んで國家百年の大計を確定せざるべからず。況んや干戈の戰爭、纔に終局を告げんとして、早く既に第二の戰爭たる商工業の戰爭は開始せられたるにあらずや。宜しく一歩を進めて積極的自動的態度を以て新なる戰場に猛進し、四千萬の同胞男女となく、老若となく、協心戮力、勇戰するの覺悟なかるべからず。若し不幸此の戰場に敗るゝあらんか、其の結果は干戈の戰に敗れたるの比にあらずして國家の運命實に是によりて永久に決せらるゝに至るべきなり。抑も今回の戰爭によりて發顯したる忠勇義烈なる國民の精神、勇武果敢なる軍人の精神は、淵源遠く、幾千年以來遺傳せられたる國民的性格にして、加ふるに維新以來養成せられたる軍人教育の結果に外ならず。是を以て一旦緩急あれば勇將猛卒雲の如く起り、建國以來外敵に侵されざる帝國の歷史に幾層の光彩を添へたるものあり。然り而して商工業の戰爭に於ても、亦忠勇果敢の將卒を要する事、敢て干戈の戰爭に異

ならず。苟くも此の戰爭に勝利を占め、帝國の光榮を永遠に全ふせんと欲せば、須らく知慮あり、勇氣あり、技倆ある戰士の養成に力めざるべからず。我女子大學校が多年商工的國民教育の精神を捧持する所以のもの、此の理由に外ならず。而して吾人は更に刻下の國勢に鑑みる所あり、大いに道德的教育、科學的教育、經濟的國家的教育を振興せん事を期す。

以上の三者之を統一して教育の全體を具ふるものにして、一幹に連れる三枝の如きものあり。吾人は茲に專ら經濟的國家的教育の方法に就て之を論ずれば、經濟的國家的教育に於て最も重要なるは其の材料にして、又其の材料をして生命あらしめ、學生をして自ら企て、營み、之を建設し、之を發表せしむるにあり。而して四圍の境遇、家庭、職業、社會、國家、悉く是其の材料にして、我校が商業、園藝、銀行、料理等の實科を設備し、更に各種の工藝部を設けんと欲するは卽ち生命ある材料を以て、國民として經濟、貿易、職業を學び、實務に當りて自己の責任を感じ自ら經營し、之を發表して、以て自動的發動の能力を開發するにあり。是實に國民として缺くべからざる要素にして、之を積極的方面に見れば、職業を學びて經濟的能力ある國民を養成するにあり。今日青年男女の多數が勇氣なく、確信なく、薄志弱行、忽ち樂天、忽ち悲觀に陷るが如き多くは其の天職を解せず、無職の遊民たるに由る。而して社會不平の分子は、茲に其の萠芽を發して、遂に國家の發達を沮害するに至るべきなり。是故に各自の職を信じ、之を重んじ、之を全ふするは國民教育の最大要素と稱すべきなり。他の消極的方面は節約にして、卽ち各自の能力、時間、金錢の浪費を戒め、之を有益に用ふるにあり。夫れ生產者は男子の任にして、消費は女子の務なりとすれば、此の方面の責任は殊に女子に於て多く荷はざるべからず。米國ハーバード大學總理、嘗て其の經驗を吾人に語りて、「予の最も困難を感ずるは資金を集るにあらずして、集りたる資金を如何に用ふべきやにあり。世人が予の大學に資金を投ずを惜まざるもの、我大學が其の資金をして無益に費さず、國家の爲に働かしめ、永久滅せざるの方針を以て資金を用ふるに依れり」と。斯くの如く消費の任に當るべき女子にして、克く實益の有無を判斷するの知慮あり、國家永久の利益の爲に消費するの能力を具へんか、生產を計る男子の奬勵者となり、慰藉者となり、富國の基茲に確立すべきものなり。

今や我國既に十數億の外債を負ひ、戰後各種の經營亦莫大なる資金を要するあり。此の巨億の資金を產するの任は懸りて我國民の双肩にあり。況んや世界商工業的競爭の波動は、澎湃として島帝國の四方に迫り、我民族の興敗此處に決せられんとす

るにあらずや。國民たるもの勇往邁進、以て國家百年の大計を確立せざるべからざるなり。

（「家庭週報」第三十五號）明治三十八年十月

今年の運動會

時、恰も、我國は世界に取つて最も大いなる日である。曠古の戰役、其の大局を結び、今や海に一大觀艦式行はれ、遠からずまた陸にも凱旋の勇士を迎へんとす。のみならず、再び日英同盟成立して、國際上一段の光彩を添ふると共に、外國—殊に英米の賓客、續々來遊せられ、國民またその歡迎に多忙である。此の時こそ實に一層我國民の團體心を鼓舞し、愛國心を促す時である。否我國民の心をして、一變せんとする時であり、國民は各々その責任を感ぜんとする時である。

外國の賓客を迎へて、國民は如何なる感じを持つであらう。必ずや有形、無形、樣々の刺戟をうけ、種々の感化を受けるであらう。その一として余は常に彼我の體格に就て感ぜざるを得ない。彼はその體格に於て勝つて居る事著しい。タフト卿といひ、ローズヴエルト卿といひ、ノーウエル大將といひ、またブライアン氏といひ、長大肥滿の體格を具へ、眞に大國民として雄飛するに足る力は、かゝる身體にこそ宿るべきであらうとうなづかれる。また彼等の表情の活々として巧みである事は、よく大國民たる資格を具へてゐる。これ等の傍に於ては、我國民は凡てに於て未だ小さい、劣つてゐる。ブライアン氏が演說中に「神は貴きものを特に小さき器を選びて入れ給ふ」と云はれたが、つく〴〵と我國民が小さいと感じたのであらうが、例の巧妙なはなしぶりで、かゝる讃辭を以てあらはされた。

然らばこの國民の體格は誰が進步せしむるのであらう。誰が改造の任に當るのであらう。第二の國民を作る權利を持つものは諸子、卽ち女子であるではないか。

此の時に際し、體育の試業とも云ふべき運動會を行ふのである。殊に今年は增築の工事中で、來賓をも招待せぬのであるから、例年より充分の時をもつ事が出來、思ふまゝの試驗をする事が出來る。今年の運動會こそ、以上の如く、大にしては國家が體育の必要をまのあたり示し、小にしては本校の都合上、充分に業を試す事を得るまたなき好機會の運動會といはねばならぬのである。

運動會場に於ての勝敗、優劣は、卽ち準備に於ての勝敗、優劣である。よく衆に拔でたる體力を得んには、日頃の衛生に注意して、食物を選び、衣服を便利にし、或は日頃から運動に興

味をもたなければならぬのである。外國の大學で、運動の選手などといふものは、日頃、居室も、最もよく光線通じ、空氣の流通のよい、快濶なるものを與へられ、此處に規則正しく起臥し、食物も材料に於て、分量に於て、最も適當なるものを選ぶのであります。しかも内外の珍書を集めて體育を研究し、有名なる體育家を聘して、其の說を聞き、技を見るのみならず、自ら日々一定の練習を怠らぬのはもとよりであります。實に選手の赫々たる技量は、かゝる準備にひそむので、僥倖をたのむといふが如き淺墓なものでない。運動會に於て全部選手となるが如きことは、もとより望んで得られない事であるが、その體育に熱心なる事は、全部選手の如きでありたいのである。また運動會より得た習慣は、自己の品性に加へて進んで行かねばならぬ。

運動會によつて如何なる習慣が加へらるゝのであらうか。それは精神上に、身體上に、多々あらうが、先づ總じて、體育の目的とする所を、幾分なりと實現し、その實現さるゝ丈づつ、自らの品性に加へる事が出來るのであります。本校の體育の目的とする所は、常に述ぶるが如く、眞であり、善であり、美であつて、また興味をもつて、身體の健康、教育、休養を計るのであります。これが如何ほど實現され、如何ほど個人或は學校の品性となつたかは、常に見聞するものゝ觀察に任しませうし、またこの目的を實現すると否とは、只單に諸子の與かる所であります。

運動會に於て父兄來賓を招待するのは、學校と家庭とを聯絡し、學校と社會とを聯絡するのに誠によい機會であり、生徒もまたこれ等の人々を迎へる爲に、學ぶ所も多くありませう。さりながら今年の運動會に於て、これ等の人々を招く事が出來ないとはいへ、決して學ぶ事が少ないのではない。また充分に準備をし、充分に發表する機會を妨ぐるものではない。却て例年よりも、體育の目的を果すのに、便利である事は疑ひもない事である。

（「家庭週報」第三十七號）明治三十八年十月

時勢を見て各自其の任務をつくせ

此の間此の學校の傾向であるか櫻楓會の仕事であるか知らぬけれども、此の學校でする事が急進であると言ふた者があると聞きました。私は斯かる說を若い人の口から聞くのを少しく不審に感じるのである。昔から何處の歷史を見ても革新をする者は皆青年で之を妨げる者は老人である。然るに廣岡さん奧村さ

ん森村さん方が是ではならぬと火の様になつて御盡しなさる、其の一方で、あなた方若い人が餘り急進であると云はるゝことを私は甚だ遺憾に思ひ又不審に感じました。之は一體どう云ふ心理の作用であらうか、如何なる反動であるか、實に不思議に堪へないのです。之はどう云ふ事から出たものであらうか研究しなければならぬ事と思ひます。夫れで私は其の原因を知りたいのです。故に各部で研究して其の理由を出して戴いて明らかにせねばならぬと思ひます。

何故廣岡さんなり奥村さんなりかう云ふ御老人があなた方よりも一層元氣を出して殆ど狂するが如く、何を皆さんぐず〳〵して居るかと叱る様に云うて心を痛めていらつしやるでせうか。之をあなた方は考へて御覽なさらねばならぬ。尚早いと云ふ事を何をするにも何時でも聞く事である。私が此の學校を立てる時にいろ〳〵趣意書を書いて發表する時に、私の親友は未だ十五年早いと申しましたが、公然發表して見ると案外賛成の人は多くて此の議論をうちこはさうとする様な新聞雜誌は一つもなかつたのである。其の時には一般の教育論は甚だ保守のものであつたのに少しも反對を試みるものがなかつたのは實に案外でした。加ふるに開校をしても入學者は幾らもあるまいと人々から云はれましたけれども、愈々開校して見ると到底希望に應ずる事は出來ない程であつて、之にも誰も一驚を喫したのである。私は一方には大變急進の様であるが、又一方には用心深い方であるから、此の學校に斯様に實業部、商業部をおく事から凡ての事に餘程氣をつけて致しましたが、世間では成程かうでなければならぬと云ふ風になつて社會は何時の間にか進んで居ります。

夫れからたつた此の間あなた方に宗教の事を申しました。今の宗教家のあたまに黴が生へて居る故に、自分の信仰はまだ云はないつもりであつたけれども、誰も起つ人がないから之からはあなた方に云ふのみならず、世間にも公に私の信仰を發表するのであると申しました。然るに昨日も宗教家ばかり二十五人程大隈伯の所に集りました。此の人達は私の餘程古い友人ですが、其の人達は考も既に著しい進歩をして居るのです。社會は知らぬ間に進んで決して長夜の夢を結んでは居られなくなつたのである。故に餘程急進と思うても社會はとくに進んで居るのである。私の考ではあなた方は此の進歩に伴うて行く程にまだ足は起たないのです。事を始めようとしてもまだ人は出來ないのである。力は足りないのである。日本が世界的戰爭をするのはまだ早いのである。けれどもどうしてもそれに加つて活動しなければ自ら立つ事が出來ないから斯かる戰爭をしたのであ

る。それを同じ様に私共は是丈の事をしなければ滅亡であります。日露戰爭をするのはまだ早かつたかも知れぬけれども、戰はねば三百年を保つ事は出來ぬ、今ならば或は生命を回復する事が出來るかも知れぬと云ふ所から國命を賭して戰端を開いたのである。夫れと同じく日本婦人の起たねばならない時は卽ち今である。今よりないのである。之が廣岡さん方のやかましく云はるゝ譯である。兎も角も廣岡さん奥村さん森村市左衞門君の様な方は Self はないのである。全く國家の爲に人道のために身を捧げられた方である。然るに此の方々の餘命は既に幾らもありませぬ。人間は元來限りなき生を望むものである、故に誰も世嗣と云ふ事を考へざるを得ないのです。其の財産を嗣ぐ人、家名を嗣ぐ人、血統を嗣ぐ人は已に出來て居ても、かう云ふ人はさう云ふ事を少しも考へるのではない。此の方々が今日迄全力をこめてお作りになつた所の最も尊いもの、其の限りなき實を誰かに嗣がせねばならぬ。其の尊い人格、得がたい精神、其の國家の爲に盡された精神を嗣ぐ者がなければ、到底滿足は出來ないのである。

吾人は永遠の生命を望む者である。吾々の目的は何百年もの先きにあるのである。此の精神事業人格を嗣ぐ者がなくてはならぬ。單に財産血統をつぐだけの相續人すらも中々得難いものである。然るに此の尊い精神を嗣ぐ所の者が何處にあるか。今は金だけを相續する人もないのである。夫れは事實については明らかであります。或大阪の財産家が云はるゝのに、此の金は公共の爲に捧ぐるのである。然るに誰に任せたならば最も有益に用ひて下さるであらうか、實に其の人を得ないのである。新島襄君此の人ならば定めて財産を有益に使つて下さるだらうと思つて見て居られたのに早く病歿せられた。福澤諭吉氏此の人こそと頼みをかけて居られたのに、同じく不歸の客となつてしまはれたので、實に金すらも嗣ぐ人のないのに困るとの御話でありました。

奥村さん廣岡さん森村さん方はあなた方に望みを屬せられて此の人々なら、此の働きを嗣いで呉れるものであると信じられたのです。然るに皆さんは未だ其處迄も氣がつかないのである。私も其の一人であります。今かうして御話をして居りましても明日の命は知られないのです。廣岡さん達も、此の熱心なる評議員方も皆死んだ時には、誰が之を嗣ぐのであるか、相續人の出來ない中にはどうも瞑する事は出來ないのです。此の様に人物は中々一朝一夕に出來るものではありません。是が廣岡さんが日夜心にかけて御歸阪も御延ばしなさつて、お前だち起たねばならぬではないかと親も及ばぬ様に皆さんを叱つてどう

もまだ之では物足らぬ、出來て居ないと仰やるのです。

私は玆に二つ大切なものがあります。是がまだどうも生れないのである、是が出來たなら何時眠つても善いのである。さうして之を全ふするものはあなた方の外にはないのです。老人はぽつりぽつりと死んで行きます。どうしても若い人が之をしなければ日本は救はれないのである。かう云ふ事を考へても急進どころではない。あなた方はどうか之を御考へになつて御起ちになる樣に致したいものです。

もう一つ申しておきたいのは、廣岡さんはどうもお前方夫れではいけないと云はれる。私もあなた方の力も計らずに仕事を負はせると思はれる程に申すのである。廣岡さんはあなた方の缺點を一番鋭く仰やるのですが、又一方にあなた方の長所を一番善く見て世界に紹介なさるのです。私もあなた方が一番末賴母しい樣に見えてならぬが、其の一方にはどうもあなた方の缺點が見えて仕方がありません。此の間には大變矛盾がある樣ですが、皆さんはどうか善く考へて下さい、廣岡さんが嚴しく仰やるのは一番善くあなた方を見ていらつしやるからです。あなた方は櫻楓會の事でも人にわからぬ所で非常に忠實にお盡しになつた善くなさつたと思ふ事も澤山あります。けれどもあなた方の力はまだ足りないのです。けれどもあなた方には出來るものと信ずるのである。若い者が一旦志を立てゝ決心したなら非常なる力の出るものです。私は之を確信するのであります。

私共は十七八の時決心して生涯を國の爲に捧ぐると云ふ事を決心しました。さうして人を集めて演說をして殆ど迫害せられやうとした事も度々ある。そして身體を制すると云ふ事を勉め酒と煙草もやめたのである。是は自分にやめるのみならず、人にもとめる事を說いた。之等は六かしい樣であるけれども心一つで出來るのである。如何なる事も如何なる力も心一つで出來るのである。只決心一つであります。如何なる攻擊非難も不名譽な事を受けても、自分の志は抂げないと云ふ事、或は親から促されても友達から勸められても決して動かないと云ふ決心をする事は少しも六かしくはない。既に是等の事を試みた者もあります。そして凡ての情慾を制する事も難しくない。美しい衣服を着たいとか云ふやうな事も直ぐ制せられますが、之からは夫れだけではいけないのである。世にはかう云ふ風に情慾を制して身を捧げようと決心した人もあります。或は社會に叫んで輿論を立てると云ふ事を祈りをして人の心を導くと云ふ事をした人もあります。是も必要である。けれども之丈けでは事は出來ないのである。日本の將來と云ふ事を考へて社會家庭を私共の理想通りに導いて行くと云ふ事は實に難いのである。伴し私

は信ずるに之は出來る事である。是の事の出來ないのはわからぬ、卽ち無知 Ignorant であるからである。と思ひます。故に之は研究を要するのである。研究して確實な知識を得て凡ての關係がわかり原因結果が明らかになつて死ぬる迄骨を折つて行くと云ふ決心がなければ出來ないのである。どうしても働かねばならぬ研究せねばならぬ知識を研かねばならぬ骨を折らねばならぬのである。私は皆さんが日本の先導者となり第二の國民の母となつて御起ちになるには此の研究が出來ねばならぬと思ひます。どうかかう云ふ御老人の精神を受けついでかう云ふ戰に勝ち得ると云ふ事を自信せられたいと思ひます。婦人と雖も自信力を以て自ら研究して進めば如何なる事も出來得るのである、どうか今の時を見て自分の責任を充分深く御考へになる事を希望致します。

（「花紅葉」第二號・廣岡夫人及び奥村五百子女史來校の折）

明治三十八年十一月

自ら直接社會に立つて働かんより斯かる人物を養成すべき根本につくせ

先日或方が私の處へ御出でになつて將來の目的を御相談になりました時、私は少し其の目的に反對してそれは間違つて居るだらうと申しておきました、其の人の目的は青年教育をするとのことでありましたが、其の後四五人猶其の目的を持つて御出でになる方があつた樣に思ひます。それに就て私は一言御注意を申して置きます。之は唯青年教育をする人のみならず、社會部、教育部、家庭部に入る方々の御參考にもなるかと思ひますから私の考を申して、皆樣が個人として團體としてお働きになる上に御參考に致したいと思ひます、私は別に順序を立てないで申しますからおわかりにならないことは後から御尋ね下さい。

男子の青年教育卽ち十四五歲から廿歲位の男子を教育する教育家を此の櫻楓會員から作らねばならぬかといふことも問題であります。無論あなた方は男の子も女の子も教育しなければならぬ責任があり、又社會の全體に就て考へて居る以上は、青年男子の教育に就ても女子の手を借らねば男子だけでは不完全であるといふことも、決して間違はない道理であります。けれども男子の教育殊に一番男子教育の大切な時期を直接に教育する人をあなた方の中より出し、學校を起し、寄宿舍を作り、或は倶樂部を起してする必要があるかといふと勿論それもある。然らば其の必要に應じる力のある婦人があるかといふと、それは

餘程困難なのであるが、それも櫻楓會から出る事が出來ませう。けれども果してあなた方の時代に於て、あなた方が是非それに着手しなければならぬかといふことに就ては餘程考へねばならぬことである。斯かる男子教育はまづ男子の事業の領分である。男子に若し有力な教育家があるならば、あなた方が斯かることを思ひ立ちになる筈はない。然るにあなた方は男子の教育家の責任にまで、あなた方が入りこんでしなければ覺束ないといふことをお感じになつたのである。獨り教育家のみならず實業界に於ても眞の手本となるべき方、たとへば森村さんといふ樣な人は實に指を屈する程よりない。そして其の方々の後を嗣ぐべき人は何處にあるかといふと、なか〳〵見當らないのであります。そこで女であつても是非實業を起して改良せねばならぬといふ感が皆樣方に起るのでありませう。是至極尤もなことであります。

其の他政治界にしても實に心配である。假令二三の人があるにしても、我國の將來を托するには足りない。男子の領分を見ると實に心細いのであります。何時迄待てば實に賴もしい人物が顯れるであらうか。自分は女と生れたけれども、是非男子の領土に踏み込んで之を改良しなければならぬといふ考が社會部に屬する人の中では隨分ある樣に見えます。是は櫻楓會の爲には喜ぶべきことで、亞米利加のことに比しても、女子も男子に劣らぬ位の進歩をせねばなりません。男子の出來得ることならば女子も出來ないことはないといふ決心を以て、亞米利加の女子高等教育は起つて男子と競爭して見て女子も決して男子に劣るものでないといふことを證明したのである。これも必要なことではあるが、斯かる動機を持つて今女子の立つべき必要は我國にはないのである。けれどもあなた方のおたちなさるのは男子と競爭する譯ではなくて男子の仕事でも今の男子のみにまかしておくことが安心でないから其の必要を認めて自ら奮起したのであるから是又尤もなことで、出來ないこともありません。併し、此の目的は達しなければならぬが、其の方針は今あなた方のお定めになつた通りで成し得らるゝや否や、これは少し疑問であります。私はあなた方にかくお考の足りない所があると思ひますからそれを申したいと思ひます。それは唯私の感情ではなくて、私が四十年間さういふことに就て種々研究して定めたことでありますから、充分根據のある道理であらうと思ひます。先づ初めに私の經驗から御話致しませう。皆樣方は婦人の手で男子を教育することは困難ではない西洋では出來得ると仰やるが、成程西洋では女の手を借りては居ります、けれども亞米利加の樣に男女の區別の餘りにない國に於ましても男子の大

學教育はやはり男子に依つてせられて居ります。如何に有力な婦人と雖も、男子に勝る教育をした人は未だ曾て聞かないのであります。

それに我國に於ては大に風俗を異にして居ります。

第一、我國では男の子は小さい時から母や姉を心から尊敬して居ない。表面では感服して居る樣でも、腹の中では、なに、あそこが女性であるといふ考を持つて居ります。斯かる國風といふものは餘程女の品位が高まつて來なければ容易に改めることは出來ない。

第二、男女の區別は小さい時からであるので、此の垣を立てるのは我國の國風のみならず東洋の風であつて、此の垣を取り去ると大變なことゝなる。男女の交際の自由でない國風を吾々の一生の中に改めるといふことは能はざることである。

それであなた方が日本の樣な國に生れて青年教育をなさるのは殊に困難であると申します。是に就てあなた方は多分それでは先生は男子であるのに、女子教育をなさるのは誠に矛盾したことであるとお考へなさるでせう。是は私が十七八歳の時一大疑問としたことであります。然らば如何して私は男子でありながら女子教育を天職として、かゝつたのでありますか。第一、私も男の一匹であつてアンビツシヨンが在つた。何となれば私の國からは今の伊藤とか山縣とかいふ樣な人が志を立てゝ身を起し天下の政治を左右して居るのである。自分も人と生れたからには大に志を立てゝ世界を動かす樣なことが仕たいと思ひました。ところが父は如何の考で在つたか私を醫者にしようと思うて醫者の所に遣つたのである。けれども人の身體をいじくるのが、つまらなくて、天下の事がしたくてたまらないから種々して教育界に入らうと思つて師範學校に入つて六ケ月間に眞面目に致しましたけれども、どうも束縛教育を受けるのがイヤで詰らぬ詰らぬと思つて居りました。其の後宗教にも入つて種々生涯の事を考へて人類の爲に盡すといふ考から教育といふことに定めそれには女子の教育が最も急務であるから遂に女子教育に身を捧ぐることゝ定めました。其の時に疑問が起つて男子で女子の教育をするのは、お手傳をする樣なもので歴史に殘る事もなければ成功した所で自分の功にはならぬから、つまらないといふ所からアンビツシヨンは不賛成をいふのである。そして又果して男子で女子の教育が出來るかどうかと云ふ考も起りました。私がどういふ動機で女子教育を自分の天職と定める樣になつたかといふことは是はあなた方の天職をお定めになる上にも同じことである。あなた方はアンビツシヨンからお定めになるのでなくて、社會の必要から起つたのであることはよく分つ

て居ります。

私は何故にアンビッションを有しながら政治家となるなら總理大臣、教育家となるなら文部大臣になるといふ考を起さなかつたのであるか。私は政治家となるからには總理大臣となり、教育家となるからには文部大臣となるだけの自信力がなければ、よし女子教育に身を委ねても、其の効を奏することが出來ないといふことを知つて居りました、勿論私はこれで本統の女子教育家になれたとは申しません。併し我國に於て唯一人の實業家、政治界に唯一人の政治家、教育界に唯一人の教育家が在つても之を繼續する人がなかつたならば、餘り効果はないのであります。故に將來我國の爲を考へて本統に望む所は、有爲の人物を作り、續々其の後繼者を出すことであります。國家は決して一時的のものでありません。故に吾々は斯くの如き實業家の後繼者、政治家の後繼者、實業家の後繼者を出さねばならぬのである、自分は一個の人として効果を擧げ、名を表すことなくとも、立派な働きをする人を作り出すことが出來たならば、それで充分である。

此の立派な後繼者を作り出す人は誰であるか、卽ちあなた方婦人である。どうしても之は女子である。故に、吾々の目的の爲には先づ女子を是非教育しなければならないといふ信仰が起りました。それで私は男子の身を以て女子教育を天職と認めたのであります。此の考は今日あなた方が天職をお定めになる上に於て必要である、あなた方が立派な教育家となつて男子を教育して下さることは必要なことであるが、あなた方が日本の青年を教育する人となつて一人二人お立ち下さつても、あなた方が死ねばそれだけのことです。若しあなた方が男子を立派に教育する力のある人ならば、其の力を以て其の立派な教育家、宗教家を造る本にお盡しになつたならばどうでせう。是は永久滅せざる事業であります。私は何時も申します、今は力の集注を勉めなければならないからで、ある時一の力を以て十の効果あらしむる樣にしなければならぬのである。然るにあなた方が青年教育をなさるといふことは實に百の力を以て十の効を擧げようとなさることゝなるのです。

今日は實に人物拂底の世の中である。故に自分が表面に立つてお働きにならずとも、其の働をする人物を養成する方にお盡しなさつたならば多くの實を結ばないでせうか。私が最も望む所は自分の働が自分の生涯に於て顯れなくてもよい、吾々は多くの人物を作り多くの力を與へ、人をして立派に働くことの出來得る樣にするのである。此の方法をとるならば、唯一人の力からして幾百の人物を作るかも知れない、若し私が政治家にな

つたならば唯一人の政治家が我國に出來たかも知れないけれども、たつた一人の政治家一人の實業家の手によつて決して此の日本が救はれるものでない。私はあなた方にどうか根本のことに目をつけて貰ひたいのである。あなた方が男子の力のない腐敗して居ることを觀て斯かる決心をなさつたことは私は喜びます。殊に准會員は種々目的を明らかになさつて各部にお入りになり種々の人物の出ることを喜びます。どうかあなた方はよく私の申した道理をお考へになつて多くの人物の後繼者を作る本となつて戴きたいのです。私の第二の維新と申すのはこれである。まだ男子の領分に踏み込むべき餘地がないのである。私は唯今の我日本の現狀について餘りに失望をしないのである。何となれば私は此の櫻楓會員が第二の維新を作つて下さることを信じて望を屬して居りますから。先日此處へ奥村さんと廣岡さんとが來られた。奥村さんはまづ成功した樣であるけれども、あの愛國婦人會の會員の中に奥村さんの樣な人が幾人ありますか。あの多くの會員は唯奥村さんに感じて入會したのであるから、若し奥村さんが斃れたならば外に奥村さんはないのである。廣岡さんは自分はもう年を取つて駄目である。自分の働は表れなくとも何でも世の爲に働いてくれる人物を出したいものであるというて、あなた方を刺戟して下さるのである。私はそれで廣岡さんは稍幸であると思ひますが、森村さん澁澤さんはどうでせう。政治家や元老が死ねば其の後はどうでせう。教育家はどうでせう。若し其の人が死ぬれば後嗣はないのである。

亞米利加ではルーズヴエルト氏が死んでもハーバーは何人あるか知れ幾人もある。ハーバー氏が死んでもハーバーは何人あるか知れません、けれども、我國に於ては新島さんがなくなつてから、もう他の新島さんはないのである。斯かることでは、其の事業は永久に成立つことは出來ない。私も此の事業を始めましたが、後繼者が出來なかつたなら到底目的を達することは出來ない。茲に至つて私は實に心細いのであります。我國に女子であつて本統の女子教育家たるの人が幾人ありますか。女子の領分ですら斯くの如くであるのに、どうして男子の領分に踏み込む暇がありませうか。私は櫻楓會から此の學校を受け嗣ぐ人が幾人出るであらうか。又多くの後繼者を作る母が幾人出るであらうかといふことを常に考へて居ります。それさへ出來れば私は何時死んでも宜しいのである。然るにあなた方が先達から種々御相談をなさつて其の決心を書いたり話したりして表して入らしやるのを見まして大分人が出來たのである、望を囑するに足るものであるといふことを深く感じまして、先日來から喜んで居りますが、唯其の方法が間違ひはしないかといふことを案じ

ます。賢母といふものも教育家といふ者も幾人もあるから吾々がするには及ばぬといふお考を、お起しでせうけれども、眞に家庭に入つて社會を導く人も教育をする人も實に乏しいのであります。大阪にも第二の大學を起さねばならぬけれども、大阪はおろか我本部に於てすら人はないのである。先日も申した樣に本校の教授は皆悉く男子である。是非其の教授は此の櫻楓會から出さねばならぬ。然るに謙遜かは知りませんが我校のプロフエッサーとなるといふ人は何れの科からも一人として聞かないのである。皆さんよく考へて御覽なさい。續々後繼者が出なければ、女子大學もやはり一時の花であります。今日あなた方の急務は、いくらも横つて居るではありませんか、どうかあなた方は其の必要を感じ急務を考へて銘々行くべき處に行つて貰ひたいと思ひます。

（「花紅葉」第二號・櫻楓會例會）明治三十八年十一月

宇宙を支配せる力をみとめ　無限の進歩をなせ

櫻楓會も亦之を組織して居らるゝ皆樣方も年と共に力が出來經驗が加はつて希望をまして御進みになることを喜びます。殊に今日は市中に御出でになる皆樣方の外臺灣からも御出でなつてまだよく御話は伺ひませんが、唯お顔を見ただけでも益々新しい經驗を積んで知識を實にし眞面目な態度を以て充分勇氣を鼓し御勉强になつて居る事が分るのは吾々の最も喜ぶ所であります。私はあなた方がどうか其の種々の經驗又はお得になつた事を御相談になつて、一家の如く姉妹の如く互に同情を以て此の會を有益にしたいものと思ひます。それで私はあなた方に對して少しお話がしたいと思ひますが、非常に多忙なので順序を立てゝ申す譯にも參りませんが、唯此所に來て報告を聞いたり又あなた方の種々なさることに就て氣のついたことを申します。

今家庭部、社會部、教育部の三部から研究會の御報告がありましたが其の時私の最も大切と思ふたことは、三部の統一といふことである。卽ち皆樣が三部何れの部に入つても互に其の三部の關係は離れないもので、何れの部の研究をなさつても本統にわかる人ならば他の部の事もわかる人である。それで三部が一になつて居て而も三部に分れて居るといふ風でなければ本統の事は出來ないのである。是は度々申すことでありますが、兎角人間は狹くなり易いものであるから一の事に偏ると全體が見えなくなり、全體に亘ると專門のことに淺くなり易いから、餘

程此の統一に心を注がねばならぬ、又櫻楓會の人は何處にお出でになつても終始連絡を保つて居ること、又今お話になつた様に櫻楓樹は社會にも世界にも連つて居て人類的の團體である故に餘程關係が廣いけれども、よく統一を保つて居るのである。これがわからないと常に活氣を持つて進むことが出來ないのである。然るに或日本人は封建の餘習と島國根性とが在つて人類的になり難い。殊に御婦人方には其の弊がある。併し今日の世界の潮流は實に之に外ならぬのである。故に私は思想の統一といふことに最も勉めて居るのです。

此の頃三年生に說いて居る所のものは則ち宗教問題である。是は世界的、人類的のもので在つて凡てに渡つた思想を統一した所の甚大なものである。けれども私はこれを始めて居ります。私はどうかして櫻楓會員の思想を其處迄導きたい。たとへ少數でもよい、其處まで悟を開いてもらひたいと思ひますが、聞く所によれば私の思ふたよりも多く其處に達せられさうであります。併し私は學校の外にお出になる方にも地方にお出になる方にもどうか其處まで此の思想にふれて感じてもらひたいのであります。私共が生涯希望にみちて如何なる境遇に立つても少しも動かされないといふ剛毅の德を養ふには宇宙を支配して居る偉大なる力にふれて心の中に命を得て進まなければ直ちに力がつきて進歩が止まるのみならず、直ちに腐敗して櫻楓會の生命を保つことが出來なくなるのである。所が皆様が地方にお歸りになると丁度適當な書物がないのである。昔ならバイブル一冊お經一冊でもよかつたけれども、今はそれだけでは保たれないのである。何時も迷はず饑ゑずして行く譯にゆかぬ。其の上皆様は愈々忙しくなるから時もなくなるのである。それでますます思想の自由を得て此の宇宙を支配して居る偉大なる力を認めて限りなき進歩をして行くことが困難になるのである。日本は今日の様に頭を持ち上げて來たが、兎も角我國では凡てのものが破壞してまだ新しいものは出來て居ない。さうして大なる使命を受けて世界の非常なる潮流に入つたのである。此の時に當つて最も人類的に進歩した處の思想にふれて私共が目を醒まして行く時は、教育でも宗教でも其の他の何事でも出來ぬといふことはない。是は私共が天から與へられた大使命であらうと思ひます。これを認めた人は日本としても世界としても極少數である。私共は今日は世界の最も進歩したる潮流に遲れないといふ事をつとめるの外、時も力もないのであります。

如何に多くの立派な書物を集めても、それを讀んで此の大なる思想に觸れるといふのには餘程の力がいるのである。けれども私は確かにこれにふれたと思ひます。そこには一の確信があ

るのである。あなた方もどうか此の大なる思想にふれて櫻楓會は、如何なる風に發達して居るかといふことをに目をつけて、それに離れない様になさることが必要である。是がないと直ちに退歩するのである。此の會に出席なさる御方は光が見えて居るのであるが、もし會に出席するのも億劫になつたといふ人は腐敗である。故に其の様な人々にもこの會員が餘程力を盡して導かねばならぬ。

第一　吾々は世界的に關係があり全體に統一した大きな體である。吾々の思想も事業の統一したものである。此の統一といふことがよく出來なければ大なる命は出來ないのである。三部の關係も同じことである。

第二　吾々には勇氣があるといふことである。勇氣といふことは危險を恐れず困難を辭せず、といふ力である。是は櫻楓會員が始めから御決心なされたことである。殊に今年の卒業生に是が輝いて居るのである。此の間もある方が御出でになり、自分は婦人に生れたけれども男子の教育に命を捧げるとか、又は實業に一生を捧ぐるとか、外國に行つて牧畜を研究して教育に結びつけたいとか、園藝をテキサスに行つてするとか、農科大學に行つて段々同志の人を呼び集めて理想的タウンを作りたいといふ様なことを御話しになりました。是はユートピヤの様であるけれども中々左様でない、本氣である。冒險的の起業といふ様なことが今年の卒業生の頭に大變起つたのである。よく聞いて見ると皆本氣であつて永い間の決心である。私はどうもそれは間違ひであらうと反對說を出して見たのです。其の他支那、朝鮮の教育とか移民とかいふ方面に熱心な方もあります。歷史で云へば神功皇后の三韓征伐といふ様なことは大變な冒險でありますが、今の人々の考も大變な冒險であります。けれどこれは本會の勇氣を顯して居るのである。兎も角も自分のすべきことゝ思へば、どの様な困難でも本氣になつて命を捨てゝ其の難をさけない屈しないといふ精神がなければ空想になつてしまうのである。私は窃かに喜んで居ります。困難と戰ふといふ勇氣がなければ駄目である。歷史に徵してもかく華美になり遊惰になると其の國民は腐敗するのである。私共が此の困難な複雜な中に生れたのは實に幸であります。今日迄偉大な人の跡を考へて御覽なさい。貧乏とか病氣とか何か非常な困難に戰つて而も己が天職に對して生命を捧ぐるといふ戰をなすに非ずして成功した人があるでせうか、此の勇氣が起つて凡ての難に勝つといふ決心でなければ私共の目的が實現せられるものではない。吾々の生涯に於てどういふ困難に遭ふても自我はもう無いのである。命は既に捧げたのである。如何なる場合にも泰然とし

て進むといふ勇氣がなければならぬのである。家を持つ人にしても誰にしても此の勇氣がなければ何一つ出來ないのである。

第三　吾々には智慧がいるのである。いくら決心をしても其の精神と熱心に智慧が伴はねば決して成功するものではない。

知といふ中には知識も判斷力もある。今日迄煩悶して獨立を得られぬ人の第一の缺點は知慧のないことである。まづ第一に己といふことを知らねばならぬ。己を知らず世界を知らないものが洋行したとて男子教育をしようとして、どうして出來やう筈はない。皆樣は若いからどうも空想に陷る事がある。どうして其の事業をするかといふ考はまだ何も出來て居ないのである。是が我國に於ては洋行をしても眞の人物の出來ない原因である。今日迄女學界に一人として人物の出ないのは知が足らぬからである。己を知らず世界を知らないのである。私は櫻楓會から眞の洋行者の出る事を希望します、又其の模範を出すことが必要であります。けれども、どうも知が足らぬから出來ないことを考へるのであります。

例へば櫻楓會から資金を出して、此の人は教育を研究するのであるから、ヂューエーの所へ送り、此の人は體育を研究する爲體育會へ遣らうとお思ひになつても困難でせう。自分の力も知らず亞米利加の學校も知らないで此の樣にして研究したいといふことは困難でせう。是は一の例でありますが、實にどうも知が足らぬ。昨日早稻田に病院を建てるから私にも賛成して呉れよとの事で、私も自分の意見を申しておきましたが、どうも折角病院を建てゝも、食物が不完全である。病者に適當な食物を與へる事が出來ない。もしもこゝに本統に食物の出來得る人があるならば幾多の病人が助かるのである。けれどもどうしても智慧が足らぬ判斷力が足らぬから丁度適當なことが出來ないのである。病人の多くは丁度適當な食物を與ふればあとは自然に治るのである。食物といふこと計りでも本統によく出來得る人が幾人あるでせう。研究というても考が足らぬ力が足らぬ。あなた方は熱心、精神といふものはあるけれども、まだ知が足らぬ。櫻楓會員は何處に居ても知力を磨いて行くことが大切である。今一つは戰をするのである。此の多くの敵に常に勝つて行くのです。周圍よりも自分の中に多くの敵があるのである、此の中に常に奮闘して凡ての敵に勝つといふ事には餘程の力がいるのである。凡ての所に力を配り深く考へ凡てを統一して行くといふ知慧がなければならぬ。

第四　吾々は實驗をしなければならない。平たくいへば實行するといふことである。本を學んだだけではいけない。私共が本

統に研究しようといふならば、其の中に篏りこんで常に之を實行してゆくことが必要である。此の中に教育家になる人、園藝をする人、牧畜をするといふ人がありますが、其の人の一生涯は今日なさることに由つて分るのである。私は先日子供の教育をすることについて申した事がありましたが、或方が自身に子を持つた事のない人がそれ程にわかるものでない。あれは書物の上の知識であると申されました。私は二ツばかりの子供を預つて「おとうさん」と云はして育てゝ見た事もある。そして私の教育をする事に就ての履歴をいへば師範學校に居た事もあり、新潟女學校、梅花女學校を建てたこともあるが、其の外私は郡山といふ所で青年を集めて教育したこともある。其の時の私の職業は別の事であつたけれども、町の青年を教育しなければ氣がすまぬのである。又此の學校を建てる事業の中でも家庭に於て銀行に於て何時も教育して居るのである。私が教育を自分の天職と認めて以來學校を建てる外に何處に居てもいふことなすこと凡て教育といふことを離れないのである。それで寮舍の中に居ても人の性質を直し確信を與へるとか、寮監でなくても寮監であり先生でなくても先生である人が眞の教育家になるのであります。衣服改良にしても家庭改良にしても同じ事である。書生の時から其の事をして居る人でなければ生涯眞の研究を續けて其の人になることは出來ないのである。昨日大倉氏の御話に「私は四千人職工を使つて居るけれどもどうも之を教育する人殊に女の方に左樣な人がないのに困る」とのことでした。それであなた方の中に若し四千人を一のタウンとし、其の人々が其の中で如何に生活し結婚し子を育てゝゆくかといふことを具體的にいひ表し、之を理想的にやつてゆかうといふ人があれば、直ちに此の話は纏まるのである。大倉さんのいはるゝには此の間から色々の人に遭うて此の話をすると、直ちにさういふことをするのにはいくら程手當が出るかといふこと計り尋ねられて、少しも案がないのである。眞に斯かることをしようとする人ならば事に臨んで直ちに考が立つ筈であつて、其の事に身を捧げるならば俸給といふ樣な事は自然に出來得る話である。櫻楓會でも其の通りです。眞に其の爲に身を捧げて居る人があるならば社會は決して之を見のがしはしないが實に人がないのである。教育家は眞に常に教育をして居らねばならぬ。衣服改良者は常に衣服改良を實行して居らねばならぬ。私共は其の地位に至らない中から、常に實行と知識とが伴つて居なければ、どうしても眞の事は出來ないであらうと思ひます。まだ種々申したいことがありますが、其の邊のことは櫻楓會員がお互によく相談し研究してお置きになる必要があらうと思ひま

す。

（「花紅葉」第二號・櫻楓會正會員會）明治三十八年十一月

社會教育と其の適例

先日森村氏の御話に、紐育で森村氏より十歳以上も年長なる老紳士で、既に大なる事業に成功せられたに滿足せず、日々數多の人々と共に活動して居らるゝ方が、氏に對して、「あなたはまだ靑年である」と云はれたさうです。かゝる少壯な氣風の人々に接しられた森村氏は、更に新たなる希望と生命とを得て御歸りになつた事は、我々の深く喜ぶ所であります。

亞米利加のカーネギー氏、スタンレイホール氏、又森村氏の如き人は、生涯實業を以て立たれ異數の成功をなさつた方である。併し其の目的は只財產を作るのみならず、これを社會の爲、人類の爲に有益に費す事、卽ち財產を有する權利を持つて居らるゝと同時に、これを使用する義務を知つて居らるゝ方であることは、誰も唱へる所であります。又かゝる實業家が、社會の根底である處の教育事業に其の力を注いで、國家百年の大計に盡される卓見にも感服し、又教育の物質的事業なる基本を助けられる恩人である事は、誰も認めて居る。併し森村氏御自身もよく、「私は商人である。教育のない人間である」と云はれます。世人も時として只教育の物質的方面に於て助けられる人であると解して居るかも知れぬ。併し私の經驗及び多くの人の觀察によりましてもかゝる人は我々の考へてゐる模範的實業家であり、又同時に教育家であり、又或意味に於ての學者である。これは世間の人が見落して居る點である。今これにつき、一二の點を申して置き度いと思ひます。

教育とは何

教育には廣狹の二があつて、廣い意味で云へば凡ての事は教育である。吾々が生れてから棺を蓋ふ迄、凡ての物は學校である。併し普通は狹い意味に解してゐる。極く狹く云へば學校に來て教科書を勉强したり、實驗室に入つて實驗したり、定つた學科目を勉强する事である。普通の意味で云へば教育を受けたといふ事は、どこかの學校に入つて學び、これを卒業する事である。この學校教育は初等教育が十四五歳で終り、中等教育が十八九歳で終り、高等教育は二十四五歳迄で終りになるのである。併しそれで人間の教育といふものが終りを告げるかといふと、決してさうではない。大人になつても、老人になつても、呼吸が續く限りは教育を受けてゐるのである。この教育を社會

教育と申します。

社會教育と學校教育

この社會教育と、學校教育卽ち普通教育、特殊教育、專門教育等といふものとの間には、違ひがあるのです。其の主なる所だけを申すなら、學校教育は選擇の自由が少いが、社會教育は全く自ら選擇する所の自由を得てゐる。自ら境遇を作り、自ら自らの力を研いて行くのである。又學校教育は、學問をする事を主とし、社會教育は職業をする事が主である。この違ひが、非常に人間を相違させてくるのです。吾々が度々聞く事は、學問をさせた者は役に立たない、のみならず人格も低いといふ。之は從來の學校教育の弊である。どうも偏した學校教育から、偉大な人物は餘り現はれない。昔から歷史に殘り、人類に貢獻した偉人は、多く社會教育から出てゐる。卽ち學校教育は餘り範圍を縮めて、人の自由を束縛するやうな嫌ひがあるので、自然の發達を妨げるといふ弊害があるのです。それで充分獨立自營の精神に富んだ靑年は、學校に入るよりも、却て社會教育によつた方が有効であるといふ說もあります。今此處に精しく學校教育と社會教育との區別に就て述べる暇がないが、唯最も注意すべき事は、人物を作る上に學校教育よりも一層有力なる教育のある事を氣付かねばならぬ。之に氣付かねば學校教育に於て起る所の弊害を救ふ事が出來ぬのである。この社會教育に於ては、世界の至る所、學校であり、世界の凡ての物はこの教育の教材であり、宇宙の震動（バイブレシヨン）はこの教育者である。人工的にこの社會教育に設けられた教育の機關は、書籍館、博覽會、音樂、美術、文學其の他商工業、政治等である。

旅行と實業

それでこの社會教育に最も大切なものが二つある。旅行と實業である。昔は隊商といふものがあり、これをトラヴエリング・スクール（旅行學校）と云つて居りますが、誠に尤もであります。これは實に當時其の國民を善く教育した原動力でありました。現今アメリカに世界を教場とする學校船、教育船といふものを拵へて有効な教育をしようと企てゝ居るものがあるさうです。これ旅行は教育上、最も有益なる事を示して居ります。近來學術上の發見により、汽船、電車等が出來、其の他種々の發見、發明は、社會教育を最も多く助ける教育機關である。

森村氏の旅行

然るに森村氏は丁度三回世界を廻つて來られましたが、まだ

テキサス等にも旅行するといふ希望を抱いて居られる。殊に今度の御旅行は森村氏が受けて居られる社會教育の最も大切な要素をなして居るものと考へます。

社會教育の實物教授といふのは、卽ち旅行であります。こゝに土産に戴いた椰子の樹があります。これは布哇にある天然物で、森村氏はかやうの事に注意をされる、卽ちこれで自然物研究をされたのである。又兒童研究をもされたのである。船中で外國人の子供を見て、どうも我國今日の子供の育て方では、大國民になるのは難しいやうであると感ぜられた御手紙があります。又紐育からの御手紙に、米國の進歩と東洋の進歩とを比較して居られます。かやうな御旅行は、世界各國の人種に接して比較を御感じになり、つまり學校に於て吾々が常に注意してゐる、宇宙の精神の震動に、頭腦が感染して居られる。只アメリカのみではなく、世界の新潮流に頭腦が接して其の新しい御經驗を得られた事は、先日の御話によると「あたまが生れ變つた」と云はるゝのであります。私は實に感じました。此の間は廣岡、奥村二老人の元氣に非常に感じましたが、これは白髮の小僧と自ら云はれる森村氏の頭腦が、最も進歩した頭腦すらなほ感ずる事の出來ない震動に御感じになつたのである。卽ち宗教的の最も進みたる潮流にも、政治上の自由にも、獨立自尊といふ事にも觸れ、觀るべき所を觀、採るべき處を採つて歸られたのであります。これが人格を御作りになつた大切な事であつたと考へます。

第二に大切なるものは、本校で常に尊ぶ所の發表的構成的自動である。森村氏の人格はこれに由つて得られたものである。名古屋の工場には四千人の人が働いて居る。此の工場は二十年間改良に改良を加へて、世界と競爭するの地位に達せられたのであります。これは社會教育の實驗場であります。これが學校教育と異る所は、社會教育の教場は若し一朝事を誤れば、忽ち恐慌、破滅を來すのである。それ故學校教育よりも一層の熱心と研究を以てせられてこそ、斯くの如き人格を得、斯くの如き研究が遂げられるのである。この大きな工場を支配する方は、社會教育の校長であります。大倉氏其の他の方々は教授、四千人の勞働者は生徒である。此の工場に於てどれだけ多くの研究が積まれる事でありませう。又森村組の精神は一の校風である。其の校風は四千人の頭腦に注がれ、又社會に感化を與へられるのであります。然らば如何なる點を以て教育のない人と云ふのでありませうか。私はかくの如き生きた知識を有し、尊い人格を備へて居られる方は、社會教育の學校長であり、宇宙の最も進歩したる潮流を受けて居られる方であると信ずるのであ

ります。

（「家庭週報」第四十三號・森村市左衞門氏歡迎會）

明治三十八年十二月

日本女子大學校の教育方針に就て

我日本女子大學校は、今回教育學部を開設し、小學校、幼稚園を附設する時期に際し、從來執り來りたる主義方針に從ひ、尙一層有効切實に本校教育の目的を達せんが爲新たに校内の設備を加へ、教授の方法を改め、之を來學年より實施せんとす。今や學科に於ては、本科は家政、文學、教育の三部となり、文學部は更に國文學、英文學の二部に分れ、豫科は普通、英語の二科とし、附屬としては高等女學校、小學校及び幼稚園を有するに至れり。

各部學科の細目は規則書に讓り、玆に之を詳述せずと雖も、期する所は本校の教育主義により女子に適當なる學藝を授け、人として、女子として、國民として、能く日進の社會に順應し、其の職分を完ふするの識德、品格を備へたる淑女たり、良妻賢母たるべき者を養成するに在り。而して一國として其の教育の一方に偏する結果の憂ふべきが如く、個人としても唯々專門の學科に偏して他を顧みざるが如きは、決して喜ぶべき傾向にあらざるを以て、此の弊を避けんが爲に、各部互に選修するの別を設け、以て其の趣味を廣からしめ、其の性情を圓滿に發達せしめんことを力めたり。又學生をして其の學ぶ所のものは、自ら之を實行して、自動的發表、構成の才能を養はしむることは本校の專ら意を注ぐ所、又彼の歐米に行はれんとしつゝある手工教育の如きは本校の夙に實行し來れる所にして、卽ち學校をして家庭的、社會的、工場的要素を具へしめ、文學も、手藝も、音樂も、美術も凡て之に包含せしめ、これによりて知育、德育、情育、體育を完全に行はんと欲するものなり。例せば割烹を教ふるにも、啻に魚鳥、蔬菜の調理を學び、煮炊の法を知らしむるに止まらず、理化學應用の能力を啓發し、衞生、經濟の工夫を實驗せしめ、又牧畜、園藝を授くるにも、動、植物發育の實際と、生物進化の狀態を不知不識の間に理解せしめ、微妙なる天然の法則もこれに依つて其の一班を會得せしめんことを期す。

されば本校には正科として課すべき藝術の外に園藝、牧畜の各部あり、文學に關する各種の團體あり、製菓部あり、商業部あり、これによりて自己の頭腦と手足とを以て、實物に就きて各種の練習をなし、或は天然の事物に觸れて文學的思想を誘發

し、或は社會の實務に接してこれが利用の法を明らかにし、考究、判斷、選擇、理解の力と、之を發達構成するの習慣を養はしむ。校内新たに庭園を增修し、池あり、畑あり、小丘あり、花園あり、芝生あり、小徑あり、家禽を放ち、牛羊を畜ふ。風致によりて詩歌文章を學び、地形によりて地理を學び、實物によりて博物を學び以て遊ぶべく、以て運動すべく、以て勞働すべく、趣味と教訓と併せて之を得せしめんことを計り、而して下は小學校より、上は大學部に至るまで、徒らに學科を注入するを避け、思考の材料と暗示とを與へ、自修的、自動的に、自然の本能を啓發せんことを期するなり。

營にこれのみに止まらず、手工教育の施設としては、上に記せる園藝、牧畜、製菓の各部の外、商業部には雜貨、書籍、銀行の三部あり、また近世歐米に行はるゝ購買組合（一名消費組合）の組織に倣ひて、寮舍日常の生計に必要なる食料、其の他の物品を供給する共同購買會あり、工藝の一部としては、陶器窯新たに築造せられんとす。而もこれ我校期する所の一部の實施に過ぎず、更に時日を俟つて施設せんと欲するもの尙尠からず。是卽ち本校主要の方針たる學校と社會と家庭との渾一に資すべき社會生活の要素にして、複雜なる社會の活動に接觸し、實驗、研究、以て社會改良の中心となり、進んで學校教育と社會教育生活との連絡を計り、之を融化するに至らん事を望むものなり。現に家庭と學校との渾一を保たんが爲に、本校の寮舍は通學の便宜を目的とする所謂寄宿舍となさず、學校教育の一要素として、通學生と雖も各之を各寮舍に分屬せしむる事となせり。而して現在の寮舍、其の數二十一、各寮に寮監ありて之を監督し、寮監の下に主婦あり、上級生交代、之に任じて家事を掌り、寮生亦代る〳〵庖厨洒掃の務に服す。各寮又經濟を別にし、炊事を異にし、別に一家をなすを以て、宛然幾多家族の集りたる一部落の觀あり。其の生活は校則によりて大體の寮規を定めたるの外は、凡て自治に任じて敢て拘束を加へず、衣食住、衛生、經濟、裝飾等の事、悉く自ら考究し實行し、親しく其の得失を實驗するを得ると共に、寮生をして責任を重んずるの心を起さしめ、一家相倚り、相扶け、友愛の情、團結の念、社交の趣味、犧牲の精神を養成せしむ。又時を期し、學生（寮生のみならず）をして令名ある諸家の夫人を訪問せしめ、或は之を學校に招待し、或は又寮舍の賓客となす。是一には經驗ある先輩の家庭を觀察して趣味あり、實益ある說話を聞き、以て自家の理想を實際に徵し、多種多樣なる家庭の狀態を比較研究して、其の長を採らしめ、一には自家研究の結果に就きて、先輩の批評を求め、其の缺點を悟り、其の不備を補足せしめんが

爲なり。斯くの如くして、學校と家庭とは互に觀察し、觀察せられ、相知り、相知られ、二者の間に密着なる連絡を生じ、遂に學校生活と實際生活との城壁を破り、更に之を社會に及ぼし、以て學校、社會、家庭の三者が、融化渾一を保つに至らんこと、敢て望み難きにあらざるなり。

之を要するに、學校と社會と家庭との間に渾一を保たしめ、以て教育の効果を有効完全ならしめんと欲するものにして、今回本校が設備に於て、教授の方法に於て、新たに計畫を實施せんとする所のもの、この目的を達するの楷梯たらんことを期するに外ならざるなり。如上の趣旨により學則に定められたる學科目の教授方法を、試みに組織的表示となしたるものを左に示せば（表1～6參照）

この表に掲ぐる所は、先づ來學年より實施せんとする高等女學校、小學校、幼稚園に於る教育の組織關係を明らかにしたるものにして、卽ち本校の教育方針に從ひ、自然教育と手工教育とにより、學ぶと同時に、これを表現し、常に知識と實施とを伴はしめ、充分に兒童の伏能を發揮せしめんことを期し、分ちて道德的教育、科學的教育、經濟的及國家的教育の三となし、各材料を自然と社會とに求め、自動を以て發表し、構成せしめ、以て實地に活用すべき教育を施さんとするにあり。而して

（表1）

幼稚園

	一之組	二之組
道德的教育 材料（人倫）	お伽噺、神話、唱歌、繪本	同上
道德的教育 發表的構成的（自動）	唱歌、遊戲、談話、畫方、英語	同上
科學的教育 材料（自然界）	自然物、動植物、天體、色彩、身體、繪本	同上 川陸空
科學的教育 發表的構成的（自動）	遊戲、唱歌、玩具、砂礫、遊戲、園藝、採集	同上
經濟的及國家的教育 材料（四圍ノ境遇）	衣食住	同上
經濟的及國家的教育 發表的構成的（自動）	積木球、板排、具排、豆細工、箸環排、畫方	同上 粘土細工、玩具製作

校學小常尋

（表2）

	道德的教育		科學的教育		經濟的及國家的教育	
	材料（人倫）	發表的構成的（自動）	材料（自然界）	發表的構成的（自動）	材料（四圍ノ境遇）	發表的構成的（自動）
第一年	お伽噺、神話、簡單ナル傳記、家庭社會ト詩歌、繪本	國語「發音假名及近易ナル普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方、話シ方」談話、唱歌、畫方、英語、體操	自然物、動植物、天體、氣候、天氣、色彩、身體、繪本	算術「二十以下ノ數ノ範圍内ニ於ケル數ヘ方、書キ方及加減乘除一外ノ事物觀察、園藝、競走遊戯、唱歌、體操	衣食住、簡單ナル職業繪本	織物、縫物、編物、手工、圖畫賣買等ノ遊戯
第二年	同上家庭社會ト關係	同上	同上礦物	同上砂模型（四邊ノ地圖作成）粘土模型（自然物ヲ算術（百以下ノ數ノ範圍内ニ於ケル數ヘ方書キ方及加減乘除）	同上	同上習字洗濯
第三年	同上家庭學校社會ノ關係	同上	同上	同上算術、通常ノ加減乘除、簡易ナル小數、分數、實驗、記述及筆記	同上國民義務	同上
第四年	同上英雄傳忠君愛國ノ話博愛慈善ニ關スル記事冒險談	同上	同上力ト運動	同上	同上外國貿易	同上實驗ニ用ユル器械製作

校學小等高

（表3）

	道德的教育		科學的教育		經濟的及國家的教育	
	材料（人倫）	發表的構成的（自動）	材料（自然界）	發表的構成的（自動）	材料（四圍ノ境遇）	發表的構成的（自動）
第一年	日本歷史ノ大要、簡單ナル傳記、冒險談詩歌、繪本、家庭、學校社會ノ關係	國語（日常須知ノ文字普通文ノ讀方、書方、綴方）字引ノ使用、詩歌、暗誦、音樂、體操、英語	自然物、動植物、天體、氣候、色彩、身體、繪本、容積ト場所トノ關係、理化學現象、日本地理ノ大要	算術（加減乘除、度量衡貨幣及時計等簡易ナル小數分數）地圖、地球儀ノ使用、實驗ノ記述、園藝、音樂、體操	商工業、運輸機關、國家國民ノ義務、繪本	習字、手工、器機製作、粘土細工、圖畫、必要品の製作
第二年	同上文集	同上	同上	同上簡易ナル比例幾何	同上	同上簡易ナル簿記

高等女學校

（表4）

	道德的教育		科學的教育		經濟的及國家的教育	
	材料的（人倫）	發表的構成的（自動）	材料（自然界）	發表的構成的（自動）	材料（四圍ノ境遇）	發表的構成的（自動）
第一年	歷史小說、旅行、日記、簿記、文集、詩歌、文明史、家庭學校社會ノ關係、繪本	國語、講讀作文、習字、談話、英語、字引使用、詩歌暗誦、音樂、體操	本邦地理、自然物、氣候、天氣、雲風等、天體、色彩、身體、動植礦物、繪本	算術、地理、地球儀使用、航海等計畫、園藝、牧畜、養蠶、記錄、實驗、音樂、體操及記述	商工業、需要供給、國家、國民義務、繪本	習字、手工、必要品ノ製作、器械構成（說明用）圖畫、圖案、裁縫
第二年	同上	同上	同上 外國地理	同上	同上 勞働分配ト富ト金錢	同上
第三年	同上 本邦史	同上	同上 物理學	同上	同上	同上 用器畫
第四年	同上 外國史	同上 國語文典	同上 化學 生理衛生學	同上 代數	同上 衣、食、住	同上
第五年	同上	同上	同上	同上 幾何	經濟	同上 家計簿記整理看病育兒

教育部學科課程表

（表5）

選習科目										
音學	國文學	計	體操	手工	英語	理科	數學	教育心理	倫理及社會學	
		二七	二	二	五	八	四	四	二	授業時間
			普通體操 教育體操 遊戲體操	園藝 牧畜 料理	講讀 文法	動物（四）植物（四）物理學（四）	算術 代數	心理學 教育史	實踐倫理 倫理學	第一學年
		二七	二	二	五	八	四	四	二	授業時間
			同上	同上	同上	生理衛生（四）化學（四）	代數 幾何	教育學 保育學	同上	第二學年
		二七	二	二	五	八	四	四	二	授業時間
			同上	同上	同上	礦物（四）實驗（四）	三角術 教授法	教授法、管理法、當今內外ノ教育問題	實踐倫理 應用社會學	第三學年
			第二學期以後ハ實地練習							

教育研究科程課

（表6）

	必修科目							選修科目		
	倫理	教育學	教授法	音樂	實地練習	體操	計	英語	習字	圖畫
授業時間	二	七	八	二		二	二一	二—五	二	二
第一期	實踐倫理 修養教授法	應用心理學 論理學 教育原理	教授法 管理法 保育法	唱歌 樂器練習		普通體操 遊戲體操 教育體操 容儀體操				
授業時間	二	六	八	二		二	二〇	二—五	二	二
第二期	同上	教育史 教育法令	同上	同上		同上				
授業時間					一五	二				
第三期	同上	當今內外ノ教育問題		同上	附屬學校幼稚園實地授業	同上				

茲に道德的、科學的、經濟的及國家的の三科に分ちたるものは、畢竟本校教育の目的を達するに缺くべからざる三方面を表出したるものにして、しかく相分つと雖も、三者互に分立する能はず、三にして一、一にして三、之を教育上の三位一體と稱するも可なり。三方面相合して始めて教育の全部をなす。故にこの分類は、嚴密なる論理に出でたるにあらず、寧ろ實際上の必要に考へ、分類によりて教育の目的を表明し、其の方針に基きて教材の選擇と配列及び其の關係を示し、且つ教授の方法を明らかにして、之が連絡、統一を計らんが爲のみ。道德的教育にあつては品性の涵養を主とし、科學的教育にあつては自然界の觀察研究によりて知識を啓發せしめ、經濟的及び國家的教育にありては、國家社會に對する關係と地位とを認識せしめ、以て自發、自動、强固なる意志と、健全なる情操と、精覈なる知識とを養成し、統ぶるに自ら勞し、自ら働くの習慣を作りて、身體の發育、健康を助長し、悉く有効適實なる人格を作るの大目的の中に包含せしむ。故に彼此相互に密接なる關係を保ち、調和結合、一の目的に向つて進むは論なきのみ。其の文學、歷史、傳記の如き、社會、家庭の如き、道德的教育に於て主要なる材料、若くは要素たるは、言を要せずと雖も、科學的教育の材料たる自然界の現象や、經濟的及び國家的教育の材料たる四

園の境遇や、皆互に相須つにあらざれば、決して健全にして確實なる道德の訓練を施すことを得ざるが如く、科學的教育の方面に於ても、他の二方面によりて養はれたる精神活力の伴ふなくんば、焉んぞ能く其の實効を見るを得ん。經濟的國家的教育に於る他の二科の關係、又此の理を免れず。彼の遊戯、體操の如き、其の道德的教育に於ては、之を以てよく忍耐克己の力を養ひ、調和一致の精神を育て、科學的教育に於ては、身體發育の原理を會得せしめて、之を訓練し、實現せしむるが如き、何れか之が輕重あるべきを知らざるなり。殊に兒童に於る遊戯は、此の關係、甚だ重要なるものあるを見る。元來遊戯は兒童自發的の活動にして、之に由つて道德觀念の萠芽を發生し、又種々の構成的、發表的自動の發源となる。教育者なるもの、唯其の衝動を善導すべきのみ。

要するに、斯くの如き分類は、其の主旨、圓滿なる教育の實効を擧ぐるに在り。力めて各科相互の關係を密ならしめ、延いては學校、家庭、社會の渾一に歸着せしめ、生徒をして自ら發表、構成の天性を啓發せしめ、其の性格の開展を促がさんとするに在り。

（「家庭週報」第四十四號）明治三十八年十二月

芽出度明治三十九年

今明治三十九年を殊に芽出度年と思ふのは、我が國家の新たな生命を維持し、更に之を發展するに足るべき種々の新芽を出さんとするからであります。今、其の理由を説明するに當り、一言芽の伏能に就いて申す必要があると思ふ。

此處に挿入した椰子の芽の寫眞は（寫眞略）今や將に實から芽を出しかけて居る。これは、先日森村さんが布哇からお持ち歸りになって、本校に贈られたのであるが、其の實は非常に大きくその上、上皮を非常に厚い殼をもつて包含され、またその内は、石の如き堅い層によつて包まれその中は柔かき、大蒜の如き白い味のよいコヽナツトで包まれ、その中房はミルクの如き、甘露の如き甘き汁を以て充ち、その隅の一角に、誠に微細な、誠に軟弱な芽を含んで居る。これは實に不思議な生命を保ち居るので、卽ち椰子樹の本體ともいふべきものである。此の不思議の芽といふものが、次第に力をあらはしてくると、石の如き堅い層を破り、非常に厚い殼を貫いて發生し、終には四十丈以上の大木となり無數の枝を生じ、實を結ぶに至るのである。

又その次ぎに掲げた寫眞は（略）本校に於て四月新設せらるゝ幼稚園に入學すべき子供であるが、之はもう一層不思議なる人間の芽生えである。この中には如何なるものが潛伏して居るのであらうか。實に不思議な實に偉大なるものが潛んで居る。卽ちこの芽より如何なる偉大なる人格もあらはれ出づる事が出來るのである。シーザーの手腕も、プラトーの頭腦も、クライストの心情も、釋迦の慈悲心も、孔子の仁も、セーキスピヤの詩才も、皆この中に包含されて居るものである。それでかゝる植物の芽や、人間の芽生えなる子供をよくお考へになると、此處に芽出度といふ意味は明瞭になつて來ると思ふ。然らば何故に殊に芽出度年かと申せば

先づ我が國家としては、一等國の班に伍し、列强と其の文明を競ふの芽ざしをそへた。更に韓國との關係確立して大和島根の山櫻の末頼もしき芽生えを移し植ゑられた。又清國との協商成立して、遼東の野、滿州の原、此處にも同じ色香に馨ばしく匂ふべく芽ざしそめた。これ東洋の天地に永遠の文明が成長發達すべき芽生えである。其の他芽出度ことを數ふれば限りもないが、何人も知る所であるから、たゞ主なるものを擧ぐるに止めておく。

而して我が日本女子大學校としては、

第一に寧ろ今世紀は婦人が芽を出す年であり、從つて我が校卒業生の組織にかゝる櫻楓會の如きも、將に芽をふかんとしてゐる。實に此の婦人の性は、柔和軟弱に見え、誠に小さきものとして社會では殆どその價値を認めないのである。その上に椰子の殼よりも尙一層强き抑壓を加へられて居るのであるが、一旦芽をふくや、到底人力で抑へきれぬ程非常なる力をあらはすものである。我が櫻楓會の今年は、實にその殼を破つて、芽をふかんとして居る。これは將來、偉大なる感化力となつて、その天職を全ふするに相違ない。これは誠に芽出度事である。

第二には、我が日本女子大學校は、豊明幼稚園及豊明小學校てふ芽を出して來た。これ今日は誠に微々たるものであり、數ふるに足らぬものではあるが、その中には抑壓し能はぬ人格の伏能が籠つて居る。これは將來如何なるものと發展するであらうか、誰も今から充分の推斷をなす事は出來ぬ。されど將來その生長發達を遂げたならば、東洋に於ても教育の淵源となるやも知れず、否教育といふ教育の淵源とならんことを期するのである。

第三これに連絡して教育部の新芽を出して來た。これもまだほんの卵であるから、孵つて見ねば果して如何なる鳥が出來るか分らぬが、併しこの卵は、最も進歩した世界文明の親鳥が生

んだ卵であるから、その種は確に良いのである。多分境遇を與へ、時を假して養育するならば、伏能は充分現はれて、東洋の文明否、文明といふ文明を生む母となるであらうと考へられる。然しながらこの椰子の芽も、鳥の卵も、人間の芽生えである兒童も、未だ極めて微細な、軟弱な萠芽である。故にこれに適合する境遇を與へ、成長する時を假さねば伏能を充分に發展する事は出來かねるのである。實に我々はこの千載一遇の秋に、充分これの培養に盡瘁せねばならぬ一大責任を負ふものたるを深く感ずるのである。今此の新年を迎ふるに當り、新希望を述べて一言芽出度意志を表はして置きます。

（「家庭週報」第四十五號）明治三十九年一月

ペスタロッヂ先生を懷ふ

明治三十九年は霜雪を凌いで、こゝに芽出度迎へられた。我が國の過去十年間は、嚴冬、酷寒とも云ふべく、非常なる困難の中に閉鎖せられて居つたのであります。外に向つては日清戰爭、日露戰爭等、鐵火の大戰爭を二度迄續くるの已むを得ざるに至り、内に於ては經濟的大戰爭と戰ひ、政治的格鬪を續けたが、凡て之等に凱旋して、今や我が國は、大國民として雄飛する障害を取り除かれたのである。爾後は專ら大國民としての人を作る事が肝要であり、急務であります。卽ち國民教育が必要であるのです。此の時に當り今年の一月二十五日は偶々歐洲に於ける國民教育の先驅者となつて、一身を犧牲に供せられたる、ペスタロッヂ先生の第百六十回の誕生日に當るので、我が帝國教育會に於ては偉業を追想し、その人格を構へんが爲一つの催しがあるとの事である。吾人は滿腔の同情を以てこの擧を賛すると共に、此處に諸子と共に偉人の跡を尋ね、その感化をうけたいのである。

歐洲中世紀頃を暗黑時代と呼ぶ。此の暗黑時代終りを告げて、將に光明時代に移らんとする時卽ち十五世紀は實に歐洲文明の曙光と云うて可い。降つて十六世紀より十九世紀の間、宗教改革行はれ、政治革命起り、教育の革新を見るに至つたのである。之等大偉業の使命を帶びたものはチュートニック人種である。之我が國の現今、否、東洋の現今を聯想せしめんずば止まぬのである。今や將に東洋は暗黑時代を去りて、光明時代に移らんとし、宗教に、政治に、教育に、大革新開始せられんとしつゝある。之が爲に、缺くべからざる大震動を起す一大使命を帶びたるものは、我が日本人種を除きては、他に無いと言はねばならぬ。故に我々は此の際西洋文明の今日に至れる所以を

研究し、大いに今後、取るべき方針を確定せざるべからざることを深く感ずるのであります。

政治的革命、宗教的革命に際し、必ず之が原因をなすものは教育的革新と云うても敢へて過言ではあるまいと信ずる。如何となれば今日迄、歴史的に殘れる事實に徵すれば、大革新の起る前には必ず教育的革新が起り、政治的或は宗教的革新行はるれば、從つて教育の革新起るは逃れられぬ原因、結果の法則であります。人若し教育の歴史を深く研究せんとならば、人類全體の歴史を研究すべく、政治、宗教の歴史を論ぜんとならば、必ず教育の變遷を講究しなくてはなりません。教育、政治、宗教は互に密接の關係を有し、相離るべからざるものであります。今、此處に簡單にその關係を知らせんが爲、變遷の順序を擧ぐれば、暗黑時代より光明時代に移るに至りし震動を、復興と云ひ、その主義を人文主義といひます。この言葉を以て十五世紀より十九世紀を包含するを得るのである。この新震動を起しゝ原因は必ず人間である。時代の新主義、新勢力は偉人に化身となつて宿るのである。その社會と偉人との關係は複雜にして一朝の論ではないが、吾々はその新しき震動を起すには、原動力の必要なることを知らねばならぬ。

歐洲に於て十五世紀、將に住かんとするに當り、先づ伊太利に文學復興が起りました。卽ちダンテ、ベツラーグ、ボツカチヨー等はその代表者である。この震動はやがてチユートニツク人種に移り、殊に獨逸に於て非常の勢を以て進み、先驅者としてアグリコラ（一四四五―一四八五）先づ起り、ロイクリン、エラスマス等次第に起り、彼の有名なる宗教改革者ルーソーが出で、之を助けしメランタロイヒリンの如きあり。十七世紀に於ては英國にベーコン起れり。ベーコンの歸納的研究は實に世界文明に大影響を及ぼしたり。そのベーコンの新學說を應用して起りしコメニユスあり、又ミルトン、ロック等あり。十八世紀に至り、此の主義、益々昂り、實行力愈々盛んとなり、佛蘭西の革命、北米合衆國の獨立を見るに至りました。佛の革命、米の獨立を促しゝ主なるものはルーソー及びバゼドー等である。ルーソーの教育主義、自由主義を教育の上に實行して模範的教育を實行した。模範的教育家は實にペスタロツヂであります。フレーベルの如きはその遺志を繼いだ主なものであります。

ペスタロツヂの傳は、偉人の傳として完全なる型式である。卽ちその自叙傳は公平なる筆に依つて成り、缺點も長所も、有りの儘にあらはしてある。從つて世に多く傳はる彼の傳も、文飾を加へて褒め過ぐる事もなく、攻擊する事も無い。凡そ人と

して完全な者は無く、何れも缺點と長所とを持つて居るもので、只これのあらはるゝと否との差があるのみである。ペスタロッヂも一方に非常に愛敬すべき美質を備へて居つたが、また一方には非常の弱點があつて、生涯、失敗のみを重ねた人であります。

もしこの先生の偉業を追懷しその人格を思ふ時は、非凡なる手腕あり、學識あり、識見あり、品性ある人と考へたくなるが、實はその長所は手腕、學問、識見にあらず、ベーコンとコメニユスとの關係を移して、やがてルーソーとペスタロッヂとを論ずる事を得るのである。コメニユスはベーコンの新主義、新方法を教育に實行せし人なるが如く、ルーソーの新主義、新思想はペスタロッヂによりて教育に應用せられたのである。ペスタロッヂは曾てルーソーのエミールと云ふ書を讀んで非常に感激し、性來自由を愛する彼は堅忍不拔、これを實行した。否ペスタロッヂ以前の學者、革命者の學說に生命を與へ、爾來の教育家に精神を與へたのである。

ペスタロッヂ先生は、如何にもして國民を、人類を、暗黑の中より救ひ出さんとした。失敗に失敗を重ね、この目的は只人類教育、卽ち上下、貴賤、男女、老幼の別なく、教育する事によつて達せらるゝを知つて、終にそこに倒るゝ迄盡したのである。されば彼の長所は全く人類を愛する、一念である。一身を犧牲に供した一事である。されば人類を己の如く愛し、わけて貧人や子供等を我が子の如く愛された點は我々の學び、且つ感化をうけんと思ふ所であります。先生はこの天使の如き精神を誰から受けたのでありませうか。誰に依つて養はれたのでありませうか。必ずやその源がありませう。

ペスタロッヂ先生小傳

氏の家庭

先生の人類を愛し、これが爲、一身を犧牲にせられたる天使の如き精神を養はれし源こそ、彼の母であります。彼の下女であります。彼の貧しき家庭の內であります。父親といふのは醫者を業として居つたが、彼の滿六歲の時に死なれました。この助け無きあはれな妻や子供を殘して、永眠するに臨み、一家を窮困より救ふものは、年久しく使ひしその下女のみなるを知り、嘆願して云はるゝには、

神樣の爲に、また神樣のお惠みの爲に、どうぞ私の妻を忘れて下さるな、もし私が死んだならば他に彼の女を助くる人は

無く、子供は皆他人の手に渡さなければならぬ。あなたがこの際助けてくれなければ、妻は到底一人にて子供等を教養する事は出來ません。

と、下女ベリーはそこで答へていふ樣

もし、あなたがおかくれになる樣な事があつて奧さんの爲に此處に留まる事が必要ならば、私は決してこの家から出ません、生涯奧さんに仕へて御心配のない樣にいたします。

と、終に父は逝かれました。下女は生涯留まつて貧困の家を助け、助けなき母をいたはり、また母とともにその遺子を教養しました。もとより、彼の女には兩親もあつたでせう。自身も生涯の幸福をも望んだでせう。然し凡てを犧牲にして、一家の爲、一人の爲に犧牲となりました。此の一家の爲、一人の爲に犧牲になつた事が、幾萬人の犧牲と成つたのであるか分りません。幾多の偉業の成就となつたか分らぬのであります。その自叙傳にも屢々その下女に就きて記し、學問は無きも敏捷に働き、信用厚き女なりとある。また貧しくとも氏は子供の事とて人の美しく飾るを見、樂しく遊ぶのを見て自らも美衣を着け、物見遊山に出かけん事を欲したるも、この下女は常に自制を教へて「あなたはなぜ必要も無いのに着物をよごし、靴を汚ごしたいのですか。母君はどれほど苦しまれて行きたい處へも行かずに、着たいものをも着ずに、一厘一毛を儉約して、あなたの教育の爲に骨を折らるゝかを、知つて居りますか」と、詢々と諭されては、いつも思ひ止まつたとある。

ペスタロッヂ氏は男子との關係は極めて不幸なりしも、婦人との關係は誠に幸福でありました。早く父に別れ、長じては友人の親切をもあまり受けませんでしたが、之に反して、賢母を戴き、良妻を持ち、忠義なる婢にかしづかれたのであります。彼の妻は、彼の二十一歳の時娶りしものにて教育あり、思慮あり、同情ありて、生涯氏の事業を助け勵ました事は大でありました。

これ等婦人の溫かき愛情と忍耐とは、彼の長所を作つたのでありますが、又その短所も此處に發したのであります。彼の自ら認むるが如く、悟性的注意、勇氣、沈思、先見の明、決行の勇に乏しかつた爲、殁ど彼の前半生の失敗の歷史を作つた如く、嚴父の教を缺いて居つた爲、理性的方面を缺いて居りました。卽ち偏したる家庭が偏したる人物を作つたので、これは誠に彼の不幸であります。

彼の生涯は、表面は全然失敗の歷史であります。然し彼は偉人であり、彼の事業は偉功を奏するを得たのは、目的の爲に九轉十起を敢へて致したからであります。

氏の少年時代

彼の小學時代より既に失敗の歴史であります。背低く容貌醜く、萬事拙劣にして、友よりは侮られ、陷られ、仇名を附けられました。然し彼は人に笑はれ、侮らるゝも決して怒らず、寛大なる心を持つて、よく忍耐し、人の爲に善をなすことを喜びました。或時強き地震あつて、教師始め、生徒一同、先を爭うて逃がれ出で、誰一人大切のものさへ取りに歸るものがなかつたのである。斯かる時にはいつもペスタロッヂを使ふのである。ペスタロッヂは之に赴くに少しも躊躇しない。否大勢の爲に善をする機會を與へられたるを喜んだ。かゝる有樣故、自然また一方には之を敬愛したる師友も少なくなかつたのであります。

氏の青年時代

彼のズーリツク大學に入りしは未だ青年、寧ろ兒童であつたが、早く既に生涯に於ける目的確信を以て一身を支配しました。而して大人の中に交りて運動し、その主義なる自由平等を稱へました。當時國民一般自由なく、殊に農民は自由なき事は甚しかりしを見て、いかにもして之を救はんとし、個人として、或は團體として之の救濟を試みました。我々の主義は愛國の爲に、獨立の爲に、善行の爲に生涯を捧ぐるより外に一物もなしとは、常に彼の稱ふる所にして、換言すれば國家を救ひ、人民を貧窮より、墮落より、罪惡より救ふといふにあり。また氏の傳を書ける一著者は之を稱へて曰く、

人道を重んじ、人を困難より改善する目的の爲に、純然たる無私、無我は、氏の生涯を解釋することの鍵なりと、

氏の成年時代

氏は大學卒業後己が目的を達する爲には、神の福音を說くにありとして、牧師として說教壇場に立ちましたが、其の最初に於て失敗を極めました。聽衆を前にして其の說教は中途にしてどもり、終に中絕するに至り、終つて主の祈をするや、また之を言ひ違へました。然し彼は自分を見ること極めて公平なりし爲、直ちに天職を誤れるをさとり、次ぎに法律を學び、辯護士たらんと致しました。辯護士となりて他に何も野心のあるのではなく、農民が貴族や市民より苦しめらるゝを憐れみ、その自由を保護し、塗炭より救はん爲であつたのである。然し漸く研究するにつれて、自分の目的と全く反對にして、正義と仁愛とを維持するにあらざれば、能く法律の制裁の國民を救ふ能はざ

るを知りしのみならず、氏の性格到底冷静なる法學に適せざるを知りました。茲に於て直ちに職を轉じ農業に移りましたが、またも失敗に歸し、財産をも失ふに至りました。然し如何程失敗しても、目的は自分の榮華や幸福にあらずして、人類の爲に飽く迄奮鬪する精神なれば、屈せず、倦まず、次第に研究し、性格を調べ、かゝる事業に於ては、到底目的を達すべからざるを知り、茲に始めて教育、殊に國民教育、貧民教育に從事するに至りました。

貧民教育に於ては、只知識、品性を與ふるのみならず、同時に職業を與ふる事が有効なるを知り、夫人の財産を以て貧民工業學校を建てた。此の時、氏當に卅歳、紀元千七百七十五年でありました。

やがて生徒は八十人計り集りました。皆衣食を供にし、無報酬にて教育を施しましたが、墮落せる貧民等は感謝を知らず、新調の衣服を着けては逃亡し、貧民の父兄も亦之を煽動しました。爲に非常に經濟に苦しむに至り、千七百八十年廢校の悲運に陷りました。然し之が源となつて現今世界に貧民教育行はるゝに至り、またその教育に於て職業を授くるに至つたのである。氏はこの時、非常なる艱難を嘗め、貧困に陷りし爲、友は彼に忠告するやう、かゝる難事を行ふは終に身を亡ぼし、主義を亡ぼすにはあらずやと云はれた時、氏は曰く、

余が三十年の生活は晝飯を喫せざること千度以上にして、最下等の人民すらも食卓に絡む時、余は之を行ふを得ざりき、余が之を敢へて爲すは、全く貧民の爲にして、余が主義を實行するは實に一朝一夕の事にあらず。

とて、困難の爲に主義をかふることはありませんでした。この後氏は著述に從事し、主義を天下に示さん事に務め、同時に聊か活計の途と致しました。此の間の著書としては「陰士の夕ぐれ」（リンハルド、エンド、ゲルトルード）にて、國家を救濟するは只教育にありとの宿志を述べたものであります。此の著書をなす時に當つても、其の貧困の狀態は、原稿用紙をも買へぬ迄でありましたので、古き帳面の裏に書きました。稿成るや、一友に之を見せました處、文學趣味に缺けて居るとの事で、之に筆を入れてくれました。然し餘り文飾が過ぎて居るので、百姓が立派な衣服を着飾つたかの如く、意に滿たぬ所が多いので出版を見合はせた所が、他の友が來つて、また之に筆を加へて出版せんことを勸めたので、終に世に公にしました。之が世人に非常に愛讀せられ、政府よりは一つの賞狀に添へて、金のメタルを與へられました。貧困なる彼はそのメタルさへも保存し得ないで賣り拂つて、衣食の料に供したとの事である。

以上は氏の前半期を述べたるのみであります。彼の後半期に於て始めて模範的小學校を設立しました。當時氏は恰も五十三歳でありました。彼は五十三歳に至るまで天職の爲に準備したのである。爾後八十歳に至る間、非常なる熱心を以て働き、組織的に有効なる効果をあらはすに至りました。

余は諸子がペスタロッヂ先生より學ぶ所多からうことを信ずるのである。第一、彼は本末を誤らず、生涯の目的に就いて誤らなかつたのであります。只方法を誤つた爲、失敗に失敗を重ねたるも、失敗來る毎に愈々奮起し、益々熱情を燃やして止まなかつたのである。殊に學ぶべきは氏の愛情である。人の爲に生涯を捧げて、無邪氣な、公平な生活を送つた事である。もし教育にして愛情なくば眞の教育ではないのである。先年余は米國の教育を視察して、殊に感歎に堪へなかつたのは、白痴院である。教師は親よりも深き愛情を以て數千の白痴を教育して居られた樣は、見る者をして泣かしむるのである。而して院長は語らるゝ樣、余等が白痴の教育に從事するは、この上もない幸福である。六ケ月間この教育に從事すれば、到底止むるに忍びぬのであるとて、親が不具の子供に一層の愛情を注ぐにもまして、この師は他人の生んだる幾萬の不具者を掬育しつゝあるのである。斯くの如き精神を生み出さしめしは、ペスタロッヂ先生が人類を愛し、殊に子供を愛して教育の爲に犧牲になられし精神の感化であると信ずるのである。本校に於ても來四月より小學、幼稚園を開始せんとするに先だち、曾ま先生の記憶を新たにするは、わけて必要とする所であります。

氏の前半期の歴史は、殆んど失敗を以て充ちて居りますが、然し其の失敗は氏の生涯の働きの爲の有益なる準備でありました。故に其の後半期の歴史は、稍々成功に近く、事業の發達は一層自然的となり、論理的に爲つたと云ふことが出來ます。後半期とは、氏の五十三歳より八十二歳の死に至る迄であります。其の事業の第一着は、今より百年前、佛國の革命時代の事で政府の命に從つて建てた孤兒院でありました。即ち氏の生國なる瑞西も佛國革命の餘波をうけ、瑞西の首府スタンヅは佛兵の爲に燒き拂はれ、多くの人民は產を失ひ、親を失うて路頭に迷ふに至りました。政府はそこで先づ孤兒を救はなければなりません。時にペスタロッヂ氏はルーソーの自由主義を稱へ、如何にもして人民を塗炭の苦より救はんとし、革命の卒先者として、大いに政治的勢力を有して居りました。時の政府は氏に一つの地位を與へて政府黨に引き入れんとした時、氏はこれに答へて、

余は一學校教師たらんことを望む

とて、之に應じませんでした。爲に政府は氏をして、更にスタンヅ府の孤兒を救ふ教育の任に當らしむる事を以てしました。氏は大いに喜び、其の命を奉じて直ちにス府に赴き、一寺院を借りてこれの設備に當て、集り來れる多くの孤兒の親父となつて懇切に世話をし、衣食を給し、兼ねて稱ふる教育法を實行いたしました。この企は大いに成功したと云うても可い。如何となれば、彼は之迄に於て、教育上の經驗を積み、己の主義を定め、理想を實施するの便を得たからである。この時氏は五十三歳にして、今より丁度百年前であります。

これ先生の前半期の生涯から、後半期に移つた著しき變化であります。前半期の失敗は、後半期に移つて以來二十年間稍々秩序的の仕事をするの準備と爲りました。然し此處に失敗は全く氏の歴史から辭するに至つたでせうか。彼の準備の時代は後半期に移るとともに終りを告ぐるに至つたでせうか。否、深く考ふれば、氏の歴史は生涯を通じて失敗であり、天職の爲の準備でありました。彼は死する迄一日として滿足した事なく、安心した事はない。漸くにして積みたる經驗を以て主義、理想を實現せんとしたる時、彼の生涯は既に終りを告げました。先生は失敗に失敗を重ね準備の時代に斃れました。然し先生の事業は失敗には終りませんでした。その教育主義は十九世紀を待つて美はしき芽を出しました。先生の生涯の準備は、實に十九世紀教育の準備でありました。文化の母でありました。一つのペスタロッヂ先生なくば、現今世界の文明も、或は斯くの如くに至らなかつたかもしれません。先生は今尚我々の胸中に若く生き殘つて居られます。否恐らくは永久に人々の胸中に若返り死する事のなかるべきを信ずるのであります。

扨、かの孤兒院は如何なる目的を以つて成りましたか。憐むべき窮民を飢餓より救ひ、國民を墮落より救ひ、人類として高尚なるものたらしめんと致しました。而して教授と訓練とを以て、子弟の知德を高むると共に、手工教育を授けて、獨立自營の道に習はしめました。

氏の教授法を一言で云へば From within to without 卽ち內から外にといふ所謂開發主義である。當時一般の教育は From without to within 卽ち外から內にといふ所謂注入主義であつた。氏はこの注入主義の弊害を早くも看破せられて、之に逆つて起たれたのであるが、この主義を貫かん爲の困難は、眞に容易ならぬ事でありました。

この目的を以て、この教育主義を行うた孤兒院は如何なる成績でありましたか。生徒は八十名計りでありましたが、殆ど乞食と、病人と、不具とでありました。先生はこの子等を眞に己

の子等の如く慈しみ、夜を日に次ぎて倦むことなく萬難を厭はず、百折に屈せず、世の迷ひ兒等を人となす事に務めました。この時の經驗を、氏は自ら叙して云はるゝ樣、

一切の世話と、一切の教授とは、悉く自らこれに當らざるべからざりき。

と、眞にその境を經驗した者には、この數言は實に身にしみて覺ゆるのである。もとより先生のそれと比較にはならぬが、往年、余の梅花女學校設立當時の感を想起せざるを得ない。庶務から會計から、外廻りから、教授から、一切引きうけ、尙自らの修養を續くる爲には、僅かに三四時間の睡眠さへも取り兼るのであり、一分一秒として必身を安きに置くことは出來なかつたのである。然し先生のこの言に知己の感を得ることを喜ぶのであります。諸子も或はいつか、この言に對つて無限の感慨にせまる事があるであらう。凡て人の傳を讀んだならば、自らの經驗に照らして、假令その經驗に大小の差はあらうとも、同情を起すのは眞にその傳を生かしめて、短所は省み長所は習ふを得るのであります。先生はまた記して云はるゝ樣、

我が眼は彼等の眼と離れざりき。我が手は彼等の手に觸れ、彼等泣けば我泣き、彼等笑へば我も笑ふ。彼等の食物は我が食物、彼等が飲み物は我が飲み物なり。我何物をも有せず、家も無く友も無く、婢僕も無く、只孤兒有るのみ。彼等健康なれば、我喜び、彼等病めば我側らに起てり。我は常に彼等の中央に眠り、衆兒に後れて寢ね、衆兒に先だちて醒めたり。

と、先生のこの愛情、至誠は、今日もなほつきぬ感化力を有するので、人を教育するにも家を治むるにも、實にその源は此處にあるのです。また先生の記されたるものゝ中に、

最も善き教育に於て、母たるものは兒童の眼に於て、唇に於て、顏色に於て、少しの變化によりても、其の心の變化を時々刻々に察することが出來なくてはならぬ。

教育家の力は卽ちその父親の力でなくてはならぬ。

と、これ誠に同情の化神として、教育することの必要を述べられたのである。また、

第一に爲すべきことは、兒童の信用と愛情とを得るにあり。この信用と愛情とを得るに至らば他の何事も容易に出來得るのである。

と云はれた、また目的を云うて居らるゝに、

余の目的の一つは彼等の新生命を一般的にする事と、彼等兒童の間に兄弟姉妹の間柄の如き感情を生ぜしむる事とである。

と、先生はこの目的を如何に成功せられたかといふに、

この七十人の孤兒の間に、この目的を達することはさほど困難ならず、暫くにして彼等は眞の兄弟姉妹も及ばぬ平和と、友情とを生ずるに至れり。

と、秩序もなき孤兒、貧兒の間に、かく美はしき感情を養成したのは、先生の泉の如き同情の感化に外ならぬのであります。

千七百九十九年、佛兵再びこの地に侵入し、此處の寺院は徵發せられて病院となり解散の悲しみを致すに至りました。時にペスタロッチ氏は過勞の爲、健康を害ねましたが、其の主義の爲には彌々熱誠を以て勇進しました。そこで解散したる孤兒院を再び建てんとの企を起しましたが、政府は許しませんでした。氏はこれが爲に一層その理想を實現せんとする熱情極度に達し、一學校教師となる方法を講じた。卽ちベルンネケンのブルグドルフと云ふ町の小學校の教師を無給にて任されん事を願したが、學務委員はこれを拒絕した。卽ち彼は嘗てリンハルト、エンド、ゲルトルードと云ふ小說によつて多少世間に名を知られたのみで、教育家として價値の認めらるゝものは一つも無い彼の如き者に教育を委ぬる事は甚だ危險であるのみならず、彼の力の到底其の任に堪へぬことであると云つた。一般の評判も「彼は學校を始めたが、豫定の通りまた出來なかつた」とか、或は「彼は無學である、且つ彼の事は實行せられぬ。彼は三十にして一つの小說を書けるも、五十にして其の持論、なほ行はれず」とて、學者としても實行家としても力がなかつた。且つ彼の言葉は澁滯し、字は拙く、畫學は出來ず、文法は寧ろ輕蔑して習はなかつたし、音樂は不得手であつた。彼が如何に熱望しても當時の小學教師となるの資格が無かつたのである。然しこのブルグドルフの町に只二人氏を知るものがあつた。其の一人は知事であつたので、その周旋によつて、ブルグドルフの下町にある最下等の小學校に奉職するに至つた。不幸にして校長が保守であつて、氏の開發的教育に大反對であり、父兄もまた大不平を鳴らした。已むを得ずブルグドルフの上部の小學に轉職せられた。始め最下級である五歲から八歲迄の子供を擔任しました。これは非常の成功を見るに至りました。卽ち從來の弊風に染まぬ子供等であつたからであります。圖畫を教ふるにも始めから手本に臨ませず、まづ實物をよく觀察させるのです。或時窓の繪を畫かしめんとして、教室の窓を觀察させた後手本を見て畫くことを許した處、一兒童が頻りに窓を凝視めて止まず、暫くして「先生私どもはこの窓を直ぐ書いたらどうですか」と問うた。先生はこの一言に非常に感じ、益々開發的教育の價値を確めた。

後十五歳位の組を受持つに至つたが此の度はまた失敗であつた。これは生徒にも宿弊があつたとは云へ、先生にも缺點があつた。卽ち氏は餘り熱心であつた爲方法を誤つたのである。一生徒の當時の日記に「先生は八時から十時迄汗を拭きふき授業し、なほ十一時迄も續くる」とあるを見ては、子供が教授を喜ばぬも當然である。

かく公立學校に失敗した彼は大いに悟り、己が教育主義を實現せんには、私立學校に依るの外なしと、專心模範的小學校の設立を欲した。其の結果之を設立するを得るに至りまして、この度は成功し政府よりも保護を得るに至りました。然し晝夜非常の苦心に過しました爲、終に健康を害し、年來の宿望もこゝに中絶せんとした。先生は失望の餘り「我が事終れり」と嘆息せられました。然るに天はなほ氏を捨てずして、そこに有力なる助けを與へました。卽ちブルグドルフの城に住めるクルージーといふ教育家が偶ま氏と同主義、同精神を抱き、私立學校を起して大いに爲す所あらんと致しました。此に於てペスタロッヂ氏と力を協せ、かの學校を盛んならしむるに至つた。この兩人は同情を以て助け合ひ、互に負ふ所が多かつたのであります。爲に校運日に榮え、理想的の發達を見るに至りました。其の學校は暖き一家庭の風をなしました。一日生徒の父兄の來るあつて「あゝこれ學校にあらずして、寧ろ家庭なり。ペスタロッヂ氏は教師にあらずして、寧ろ親なり」と感じたと申します。

千八百二年、瑞西に內亂起り、諸所佛兵の爲に侵さるゝに至りました。氏は選ばれて談判委員となり、佛國に至り、ナポレオン一世に謁するの榮を得た。此の時彼が、兼ねての教育主義を陳述して賛成を得、佛蘭西にもこの種の教育が發芽するに至りました。

然しこの模範的小學校も、三年半にして閉づるに至り、更にこの地を至ること三哩のブクゼイの小學教師となり、後千八百五年イブエルダンに一學校を設立しました。この學校こそペスタロッヂ氏のメッカとも云ふべき地であつて、兼ねて保持せる其の教育主義を實行し、大いに盛大となり、成功しました。こは主に內部の整頓によつてであります。卽ち氏の膝下に教育せるもの、氏と共に教育の任に當り適當なる保護者となつたからであります。爲に氏の教育主義は國內に響き、外國にも轟くに至り、笈を負うて來り會するもの、國內はもとより或は獨逸の皇族あり、貴族あり、學者あり、宗教家あり、政治家があつた。プロシヤより大臣がわざ〳〵書面をつけて、有爲の青年二人を留學せしめ、其の他丁抹、和蘭等、歐洲諸國の留學生四十

人以上に達し、なほ英米よりも續々氏を訪問するものが來ました。其の門弟の有名なるものは、ヘルバルト、フレーベル等である。

ペスタロッヂ氏、今はかくの如く成功するに至つたが、なほ一日として休まれず、非常なる勉強をされました、氏の當時を或人書きて、

ペスタロッヂ先生は、毎朝二時に起きて著述に從事せり。こは一般校内の手本となり、一生徒の記せるものに、余等は朝三時にしてなほ床に就けるものなし、三時より六時迄に、一日の最も大切なる事を行へり。

と、此の時を以て、ペスタロッヂ先生の全盛時代と云うても可い。内は整ひ、外は同情者が充ちて居つた。然し漸く患ひは内に萌した。校運を廢頽せしむる敵は内に伏せつて居つたのである。直感に富める氏は早くもこれを洞察して防禦したが、終に力及ばなかつたのである。そはニーデレル、シミッドの兩教師からである。ニーデレルは哲學的、議論的の事に長じ、外部に向つてペスタロッヂ先生の主義を廣むる事に務め、先生の右腕となつて事業を助けられし大役者であり、シュミッドは實行的規律的の事に長じ、内に助けて教授し、財政を整へて先生の左腕となつて働いた。然るにこの兩人の間に面白からぬ感情蟠り、互に嫉妬し猜疑した。ペスタロッヂ先生の高德も終にこの卑劣なる感情によりて破壞せられ、良教師は離れ日を逐うて生徒は去り、先生の當に死なんとする時再び閉校の止むを得ざるに至つた。先生は千八百八年校運の當に全盛を極めた時にこの禍根を見出し、その一月元旦に於て血を流し、肉を割き、命を出して、その人々に忠告的演説をされた。これは實に先生の最後の言葉と云うてもよい。卽ち、

舊年は去り新年は來れり。今、余は諸子の間に立てり。諸子は余を以て喜びに充てりと思ふならんも、余は胸中一つの喜びなく、只余の終りは近づけりと考へらるゝ事頻りなるのみ。今や余が頭上には天よりの聲響く「神の僕よ其の職務の報告書を出せ」と。余は完全なる報告書を奉るを得べきか否か、また余は神に對し、人に對し、自分に對し、忠實なりしか否か、余は幸福なりや、余の幸福なりと云ふ聲は密蜂の翅の如く響く。余は今死なねばならぬ。然れども、余はその幸福をうくるに値せず。

故に余は幸福ならず。過ぎ去れる年々は幸福なりしも、もはや歩まんとする途上の氷は解けたり。余の天職は全く失敗に歸せり。互の關係を結べる最も強き結合力は最も弱かりき。余が救はれんと思ひし事は全く滅亡に歸し、平和ならんと思

ひしは僞にして、慈愛は實に冷酷なりき、……余は誠にあはれなる、謙遜なる、不德なる、價値なき、無能無知なる者なりき。然し自らの力足らぬにも關らず、仕事に猛進せり。世の人は狂氣と嘲りしも、大神の手我と共にあり。而して余の事業は榮え、余と余の事業とを愛する友人を得たり。然し余は爲したる事を知らず、余の爲に何が必要なりしかをも知らず、然れども余の事業は無一物より、榮ゆるを得たるは恰も天が渾沌の中より天地を創造したるが如し。これ余の仕事にあらずして、神の仕事なり。願はくは神の働きによりて我々の新たなる結合を計り給へ。その結合は惡人の使の如からず、天使と天使との一致の如きを望む。余往年虛弱の身を以て馬の危難より逃がれしを不思議に思ふも、その不思議にもまして不思議に余の事業の保護されんことを望む。……

余は間もなく死するも、今日のこの言は永く諸子の胸中に命あらしめよ、友人諸君、余の生涯にて失敗せる仕事は諸君によりて遂げられんことを望む。諸君は前途の障害物を除き余の失敗に省みて其の轍をふむこと勿れ。諸子よ外面的成功によりて欺く勿れ、諸子は實に重大なる犧牲を要求されつゝあり。何事も犧牲を待つて始めて完全に發達するものなり。現在の喜悅名譽は野にある草の如く凋み、春咲く花の如く散りうするものなる事を忘るべからず。

恰も正月の朝、かゝる悲慘極まる演說をせられしも、終に彼皐劣漢の心を動かすに足らず、禍は漸くその根を擴め校運は日々に零落せり。間もなく氏とともに多年困苦を共にし、事業を助けし妻は逝けり。氏は餘命を田舍にある孫の許に養ひしも、世評漸く惡しく、一新聞記者ビーバーは非常なる誤解を以て、之に妨害を加ふるに至つた。氏は之に辯解の語を爲さんとし、一論文を書きつゝ永眠された。その臨終に、

今や瞬時にして余は黃泉の客たらんのみ。余は敵を許せり、彼も亦枕を高うして眠るを得ん。余もまた限りなく眠らんとす。余は余の答辯を終らん爲、六週の生命を望みしも、天之を許さず。

と、終にこの世を去られました。

かくの如く先生の終生失敗に失敗を重ね、攻擊迫害と戰ひ、困難辛苦を排して飽くまでもその主張を貫ける剛氣は、眞に稀に見る所でありますが、また一方に於て心より人の罪を許し、或は小兒にも婦人にも親切なりし愛情はまた稀に見る所であります。先生の傳を書けるものが、嘗て「彼は獅子に似て、小羊の如く、大人に似て子供の如く、勇士の如きかと思へば婦人の如し」と卽ち柔中に剛あり、剛の中に柔ある、多面多角の性を

有して居られました。それで、種々の方面より觀察して、先生に學ばなければならぬ。その主なる點を擧ぐれば

第一本末を顚倒せられず、卽ち生涯の目的を誤らず、天職を全ふせられました。假令方法を誤り、一時は不成功の如くであつたが、實は眞の成功を遂げられたのである。今日の青年が自らの地位名譽安樂をのみ求めて、その天職を忘れて居るものは、一時の外面的成功は知るも、決して眞の成功を知らぬものであります。先生の如く、天職を認め、目的の爲に生涯奮鬪して止まなければ、地位、名譽、安樂は得られなくとも、幸福であり、愉快であります。この眞の幸福、愉快は天職の上に信じて起つた人のみの知る所であります。

第二に愛情、犧牲の精神が先生をしてかく迄の偉人とせしめたのであります。卽ち人類を愛しそれが爲一身を犧牲にせられたる點であります。彼は死しても彼の精神は死なぬのであります。而してこは何人と雖も、その萠芽を有するので、たゞ育てぬと、否とに依るのみであります。卽ち何人と雖も偉人となる資格をそなへて居るのであります。今日我が國に學者も手腕家もあるが、たゞ偉人が無いのである。偉人なくば教育も出來ず、社會の感化も行はれぬのであります。我々が一度國の爲、人の爲を思ひてこれに一身を捧ぐるに至らば、名譽も、情實も、迷ひの雲霧も晴れ死を恐れず、毀譽褒貶に關せずして、目的に向つて勇進するを得るのであります。

第三は至誠であります。至誠は心より何事をも爲し、一生を務めて止まず、まごころを以て物をすることであります。先生が萬事に拙かつたにも拘らず、人を動かす力があつたのは、實にこの至誠あるに依つてゞあります。

かくの如く、ペスタロッヂ先生を偉人たらしめたものは、決してその手腕でもなければ、學識でもなく卓見でもありません。而して先生の精神と實行とは、何人も學ばなければならぬ點であり、また學びうるの萠芽を有して居るのであります。

（「家庭週報」第四十六・四十七號）明治三十九年一月

完全なる食物

ある有力なる歴史家は「國民の歴史によりて、其の國民の食物を推究することを得」と迄極論して居ります。畢竟、食物は生活問題の第一に位すべきもので、生活問題は人生問題の最初に起るべきものであります。而して人生問題が經緯をなせば、卽ち歴史であるのを見れば、これ決して不當の言ではありますまい。否不當の言のみならず、他の一方面から見るに、歴史は

人の活劇を寫したものに過ぎぬので、人は身體と精神とを有して居る。心身の關係は哲學上の大問題であらうが、吾々が知れる事實では、心身は極めて密接の關係を有し、二にして一、一にして二である。されば身體を養ふ食物は、また精神に大關係あるべきは明らかである。こゝに少しく心身の關係に就いて例を擧ぐれば、人が物を感じ、考へ、決斷するに於ては、精神の健全、或は完全を欲し、活動力に富むを欲す。健全、完全、快濶なる事を欲するには、身體といふ境遇によらなければならぬ。尙細かき事を云へば頭の鈍きと否とは腦髓を組織する細胞の接觸作用の遲速によるので、換言すれば、人の賢愚は腦髓の組織如何による、所謂生理上に起因するのである。この生理上死活の權を握つて居るものは實に食物であるのであるから、食物問題決して輕々に看過すべきものではない。

然らばこゝに完全なる食物は何かと問へば、學者によりて調べられた保健食料に適ふた食物だと申すものがありませう。然しながら人は各々、遺傳を異にし、體質を異にし、境遇を異にし、職業を異にし、從つて嗜好をも異にして居るもので、實際、完全なる食物は、その人に適合したものでなければなりません。この適合した食物は、人々に依つて研究せねばならぬので、醫學博士でも知る所では無いのである。これ實に家庭を掌る主婦の研究すべき問題であつて、常に云ふ如く研究は學者、專門家のみの專有ではなくして、一般の人が、一般の事に向つてなすべき事である。まして女子と研究とは殆ど相容れられぬものゝ樣に考へられた結果家庭は暗夜である。而して人々の生活は暗夜の突進ともいふべく、障害物がなければ僥倖といふ外はない極めて不安のものである。それで今日世界の食物を論ずるものを見れば、西洋には菜食論者勃興し、東洋には肉食論が流行する。果して何れが適當であるかといふことは、研究すべき問題である。雲照、トルストイ、エヂソン等は、菜食を主張し、自らも菜食して毫も衰へざるのみか、その勢力は却つて肉食せる者に數倍して居る。然しこれを以て直ちに菜食を可とすべきであらうか。雲照、トルストイ、エヂソンは肉食せぬかもしれぬが、其の父母、祖先が果して肉食をしなかつたであらうか。これ疑問であるので、決して一代一人の食物を見て、是非を論ぜられぬのである。卽ち歷史的に研究する必要があるのである。然し各國の歷史上、各人種の人類學上より研究したる結果、不完全と認めらるゝ食物は如何なるものかといへば、

（一）不完全なる食物である。例へばラップス（ノールエーの北部）歐洲中央の山國に住める人種、亞弗利加の一部に住める人種の如きは、土地柄、寒帶、或は熱帶に屬して居らなけれ

ば、交通の便を缺いて居るので、國民は食物を充分に取ることが出來ぬ。故にこれ等の國民は身體矮小不具、不健康なるものが多い。

（二）不適當なる食物。不適當とは種類の缺乏である。吾人の身體の組織並びに習慣は食物の種類を要する雜食動物である。若し單純のものを食すれば癈疾となるのである。人類學上より云へば單食の人種、例へばカアサシーバアと稱する人種の如きは、植物の根、米、芋等のみを食して居る爲に四圍の境遇に抵抗する力を失ひ、身體の一部分の供給を行はるゝのみで、腦細胞の發育が惡しく、次第に進化力を減ずるに至るとの事である。されば身體を完全に發育せしめんには、食物に於ても極端に走らず、調和して多くの種類を用ゆべきである。

ダクター・ジョンソン曰く「病人は罪人である」と。また或歴史家は曰く「國民が健全なるものとして其の歴史を見るは誤りなり」と云つて居る。眞に心身は密接の關係を有して居るのであるからして、其の國民を改良せんとならば、先づ其の食物を改良せなければならぬ。

（三）不適當なる調理法もまた、食物を不完全ならしむるものである。元來適當なる調理は、一つの技術であつて、これによりて國民の文明の程度を計ることを得るのである。然し如何なる野蠻人といへども、調理法を知らぬものはないのである。例へばエスキモーの如きも肉を氷らして食し、ダツタン人は鞍下に肉を壓して食して居る。如何なる巧妙な調理法といへども、始終、同じ事を繰り返し、または病人にも同じ調理法を用ひ、或は宴會の調理を常不斷用ふるが如きに至つては、不適當といはねばならぬ。

この不充分、不適當なる調理法等に注意して、只學理的に研究するのみならず、實際、常識、發明に訴へて、作り出したる食物を以て吾人は完全なる食物と呼ばんとするのである。

（「家庭週報」第四十九號）明治三十九年二月

幼稚寮設立に就いて

我が日本女子大學校にては、本年四月新設の幼稚園小學校の爲に、幼稚寮の設立を見るに至りました。幼稚寮と單にいへど、こは多大の目的と、多大の使命を含む重要な問題であり、其の目的と使命とは此處一ケ所に止まらずして、苟も我が第二の國民を養成する所には、洽く普及せしめんことを望むのであります。

戰後の日本と兒童の教育

赫々たる名聲を齎しめたる日露の戰役は、更に一大打擊を殘して、今後の日本を覺醒せしめつつある。この一大打擊によりて、將に平和の戰爭は開かれんとしつゝあります。卽ち我が國は從來、强兵の誇るべきものはあつたが、富國の賴むべきものが無かつたのは事實である。而してこの戰によつて、實に國債は二十億に達し、年々外國に拂ふべき利子丈けでも一億の多きである。然らば富國の要素である商業はどうか、貿易に於ては實に三千萬圓乃至五千萬圓の輸入超過である。のみならず英米の如き規模の大なる商業は決して見ることが出來ぬ。然らば工業はどうであるか、日本人がコツ〳〵手を以て働く間に、英米人は大機械を利用して、何倍かの製作物を出すのである。然らば天然の材源に富んで居るであらうか、石炭、鐵、銅、其の他の金屬でも、石油でも、鹽でも、木材でも、國內の需要さへ滿たす事を得ぬのである。斯くの如く商工業を以て世界の舞壹に爭ふことを得ぬとしても、知力を以て勝ることが出來ませうか、完備した大學の數さへも僅少である。其の發明力も、誠に微々たるものである。加ふるに國民の體力も未だ薄弱である。然し斯く考へ來つても決して悲觀するのではない、斯かる有樣を何によりて救はんかと案ずるのである。此處に大政治家ありて、國家の經濟を巧みに融通せしめて、或は國民が喜んで重稅を納めても、それで救へるものではない。皆一時の凌ぎである。もし一時の危急を救はんとあせつて百年の計畫を怠るに至らば、眞に亡國の恨みを見るに至るのである。然るに此處に只一つ百年の計畫を以て、日本を救ふ道があると信ずる。一言で云へば兒童の教育、これであります。國民は兒童、卽ち小國民と、男子と、女子とに依つて成つて居る。小國民は國民の五分の三といふ大部分を占めて居ります。而してこの小國民は我々の後繼者で、第二の國家を營むべきものであります。この後繼者には我々が受けたる三千年來の文明を傳ふるをうるのみならず、現今世界列强の文明をも速成に學ばしむることが出來るのであります。これ兒童を教育することが國家を救ふ所以であります。

家庭と文化

兒童の領分は家庭であり、家庭は實に過去のあらゆる文明を兒童に傳へてこれを啓發せしむる教場であります。然るに東西古今を問はず、家庭は宗教に次ぎて最も保守的のものであり、從つて社會の文明に後るゝ觀があります。これ家庭は個人的で

あり、家庭の事は祕密に屬すべきであるので、往々等閑に附せらるゝのである。されば先進國と雖も、この家庭を改善し、世界の文明を宿し、其の勢を以て國家の進歩發達に資すべきものであるといふことを忘れて居る。我が國民は列强の出來難い此處に早く着眼して、家庭を以て、眞に第二國民を教養するものとなさねばならぬ。

兒童の特性と義務

小國民は如何なるものか、如何なる境遇に生活すべきか。これを適當ならしむるは、小國民卽ち兒童の國家に對する義務責任にして、同時に我が國民の義務であり、責任であります。先づこの小國民をして發展せしむるに足る境遇卽ち家庭を與ふるに先だつて兒童を知らねばならぬ。先づ今日兒童に對する誤解を擧ぐれば

第一、兒童を以て大人の小さきものと考ふる事。

第二、子供は大人の準備なりと考ふること

である。然し、子供と大人とは既に生理上、心理上異つて居ることは、男女相異るが如くである。また子供は大人の準備には相違ないが、それに拘泥するから、人工的となり、盆栽の如く、子供の狀態を萎縮せしむるのである。人間を分けて男、女、及び子供の三とし、この三者が互に相異つて其の特長を發揮し、互に調和統一さるゝに至つて、進歩發達を見るに至るのである。兒童の特性とは、

一、兒童は現在に生活するもので、過去と未來とにはあまり生活の出來ぬものである。これ大人の過去、未來に生活して居るのと趣きを異にするのである。しかもその現在も多く想像に生きて居るのです。例へば太陽を神と思ひ、星を花と思ふが如きである。

二、子供は大人よりも自發的のものである。大人は風俗、習慣に從ふことあれども、子供は思ふ儘を行ひたがるものである。これ我が校に新設さるべき幼稚園、小學校に於て、構成的、發表的教育を重んずる所以である。この兒童の性に從へば、兒童は喜びて學び、効力多きのみならず長じては最も研究力、工夫力に富み、獨立自營の精神を有するものとなす事が出來るのである。

三、子供は大人よりも實地に近し、大人の如く社會の舊習に束縛せられずして、天然の美も、物の眞相も直覺するものである。この點は確に兒童に社會の改革を囑して最も望みある所であります。

四、子供は本能的、衝動的である。大人の如く品性も何も無

きを以て、四圍の境遇より心に映ることには、常に反應し、これによつて活動し、これによつて品性を作らるゝことが多いのである。また子供は社會的の本能がある。殊に母を慕ふ強き情がある。それで母たる印象は、子供の頭腦に深く深く刻まるゝに至るもので、これ母の感化力の偉大なる所以であります。

子供は斯くの如く大人と異る點を有するので、自然其の要求の異るにも拘らず、今日の教育は傳說的教育で兒童の本性に應じたるものではないのであります。もしこれを認めず、大人と同樣に取扱ふに至らばその特權を奪ふものであり、自由を束縛するものである、否虐待である。魚や獸をさへ、其の自然に反いた取扱ひを憐んで、動物虐待防止會等が設立せられて居るではありませんか。子供の爲にこの虐待を除くことは、我々が第二國民を愛し、敬する所以であり、これが眞に完全なる國民を作る準備となるのである。

然しながら、兒童の教育に只この本性を妨げぬ事が大切なるのみならず、更に一方には兒童の人類、國家に對する義務を全ふせしむることに務めなければならぬ。換言すれば、兒童たるの價値を充分に現さしめねばならぬ。これを爲すために二大要素あり、一つは國民が數千年來かゝりて得たる學識、藝術、腦力の後繼者たらしむるのである。今一つは從來の國民の惡しき遺傳を改め更に國民の進歩を計らしむるのである。平たく云へば、兒童に教育を與ふることは、兒童より云へば教育を受けざるべからざる義務を有するのである。

教育とは如何なるものか

教育とは無論退歩にあらずして進歩である。教育により善き國民を作るべきである。卽ち國民をして、より善き身體とし、よりよき精神とし、よりよき傾向とし、或はよりよき習慣を作り、よりよき理想を有せしむるのである。されば教育には善感化必要なり、この善感化を與ふるに二あり、一つは教育の任にある父母たるものが好模範を示すこと、今一つは善き四圍の境遇を與ふる事である。この二者は教育に缺くべからざるものである。現今、我が國をして世界に勝たしむるには何を以てせんかと案ずるものが多い。假令商を以て、工を以て、或は知識藝術を以て、勝を制した所が、到底一時的であつて百年後は逆境である。假令、今日は凡てのものに敗けて居つても、第二の國民の人格高く、腦力、精神、確信、勝らば、實に前途祝すべきである。かく兒童の價値は凡てのものゝ價値よりも勝る。誠に國民の生命は進化によりて永久に生くるのである。元來進歩に貢獻あるものは、價値あるもので、其の進歩に貢獻する度によ

りて價値の大小は定まるものである。然るに社會の仕事の中で、最も貢献の大なるものは、兒童の教育である。即ち兒童の教育が最も價値の大なるものである。翻つてこの價値ある教育の任にあたれる父母を見、其の境遇なる家庭を見れば如何でありませうか。兒童即ち第二の國民を敬愛して、この爲に計り、この爲に務むる所が少いのであります。

幼稚寮の必要

幼稚寮といへばまだ玩是なき子供を母親の暖かき膝許より離すが如く考へるが、こは大いなる誤解である。もし兒童を母より離すに於ては、最も大切なる感化力や、四圍の境遇を取り除くといふことになる。然るにこの世の中には、母なく父なく、家庭も無き孤兒、迷ひ兒といふ最も氣の毒な國民も少くは無い。富あり、位あつても、またかゝる悲慘な目に遇うて居る者も少くは無いのである。又親はあつても、其の父母が互に調和せぬ爲に極めて不愉快の家庭に育つ者がある。また繼父繼母によつて苦しんで居るものも少くは無い。殊に戰後は如何程不幸な家庭が出來たか分らぬ。これは誠に第二國民の爲に憂ふべき事で、この冷かなる、不愉快なる家庭の空氣は、いつしか兒童の心身に影響して、不健全なるものとならしむるのであります。かゝる人々こそ却つて他人の暖かい注意の下に養つた方がいくら增しであるか分らぬ、或は幼稚寮の如き處も他人の手に任すのであるから、繼母と違ふ事がなからうかと疑ふ者もあらう。然し夫婦間の調和せぬ感情がわだかまるのは、格別のもので、却つて他人の方が母らしく、父らしき愛情の湧くものである。余も嘗て二三の兒童を預かつて、父と呼ばせて養つたが、全く子の如くに感じ、その前途迄もいろ〳〵氣にかゝり、心配するに至つたのである。また米國に遊んで白痴院に行つた時、眞に親子の愛情掬すべきものを見て、少からず感じたのである。其の教師も六ケ月、共に居つては到底離れられぬ親子の情が湧くと云つて居られた。これは誰も認むる所である。されば此の點よりも一つ位の幼稚寮は必要であると思ふのである。

第二の必要は、第二國民の教育の改良、家庭の改良を行ふに非常に大切なる機關となる事である。即ち我が校にて希望せる改革を行ひ、改良を施す段階としてこゝに改良を爲す事が必要である。されば此處は、孤立せる家庭の連鎖となりて、研究の中心となり、實驗所となり、模範となるべきである。

近頃家庭、社會の改良が言葉のみとなりて、終に言葉にも力無くなりしも、實際に研究することは重大なる問題であることを忘れてはならぬ。然るに家庭は社會公共の事と違つて、社會

の文明に後るゝ事遙かである。これは次ぎの如きことに起因するのである。第一研究の必要を國民が感ぜず、殊に家庭にある婦人が感じないのである。それで家庭に於ては何事も舊習に從ふより外無しとするが、最もの障害物にして、何事も自然に放任して進歩發達するものにあらず、自然が齎す教訓は只罰するといふ事より外無いのである。少しでも兒童の取扱ひを誤り、衛生に反けば、自然はこれを說明すること無く、直ちに罰して、或は病とし、不具とし、また二つなき命をも奪ふのである。親のその誤りに依つて幾萬有爲の第二國民は病的となり、不具となり、または早死し、不道德となつて居るか分らぬのである。まして家庭が孤立して居る爲に、同樣の誤りを再び他人に繰り返さしめぬ樣注意することが出來ぬのである。要するに從來の家庭は孤立して居つて經驗なく、自然に任せ、舊習に從ふべきものとせるので研究心が起らなかつたのである。

第二の原因は母親が兒童の特性を知らぬことに起因するのである。例へば住居を作り、裝飾を施しても、考ふることは、多くの大人の爲であり、事業の爲である。されば住うて不便を感ずる時は改良され、もしくは地位により流行によりて改築せらるゝが、眞に子供の愉快の爲、子供の衛生の爲、子供の教育の爲には考へらるゝ所が無いのである。或は壁の色でも、襖でも、建築の材料でも、整理の方法でも、子供の特性を加味して作られて無いのである。然るに幼稚園は子供の爲に作られるのであるから、その光線の工合から、壁の色から、遊戯場から、凡て子供の特性に適ふた建て方である。されば世の主婦が、園に來て一見して、斯くなるべきであるといふことが分り、また子供も其の家庭の大切なる一人なれば、その爲の設備も怠つてはならぬ事が分るのである。其の他椅子、机、寢臺、或は衣服、食物に至るまで、從來の家庭の如く大人の小さきものとして取扱はず、其生理上、心理上、適したものに改良し、自由の發達を遂げしむる事に注意してある。

第三の原因は、家庭の事は個人的となり、祕密となれるを以て、自分の家庭の外、他の家庭或は多くの家庭を知らぬ爲に、一つの誤りによりて幾千の人を殺し、幾萬の不具者を出し、幾十萬の不道德者を出すか分からぬのである。卽ち家庭に關しては未だ一般の知識なく、習慣なく、會合なく、比較研究無きによる。社會の文明の進歩は、世界の人の經驗、幾千年間重りて出來たるものなるに、從來の我が家庭を比すれば大勢の進歩に遲るゝも尤もである。

幼稚園に於ては、先進國でも行ひ難き、この家庭の統一を計つて、第二國民に資し、世界文明の淵源となる樣、第二維新の

實を擧げしめたいのである。主婦たるものは、玆に連り、此處に力を合せ、此處に經驗を發表して、研究の中心、改良の根本となすに務むべきである。然しこの目的を遂ぐる迄には、幾度か冷まされ、幾度かこぼたれ、成長發達の決して容易でない事を期するのであるが、此の使命を信じて出發するならば必ず目的地に達するの日あるを疑はぬのである。

（「家庭週報」第五十一號）明治三十九年二月

精神的生命

宗教的生命

私は精神的生命に就いて說き初めたが、未だ悉く諸子の疑問を解く事は出來ぬであらうと思ふ。さう云ふ深い疑問を起させて置いて、段々堅固な基礎の上に考を築き、遂に諸子の難問題に答が出來る樣にして、それから後に宗教の生命の有る所に達するつもりであります。然るに時が足らぬ爲に、已むを得ず今日と明日との間に、宗教の生命の有る所に說き及ぼして願はくば永久變らぬ、否始終進步して行く所の命を皆さんが御得になる事を切望するのであります。三年生にも申しましたが、願はくば今朝諸子の態度が活きたる電線である事を望みます。私は暗示を與へるので、それを受けて働く者は諸子である。到底一から百迄說く事は出來ない、殊に私が順序を追うて進む事が出來ぬから、此の僅かの時に、其の考を現はす事が困難である。故に到底私が最初希望して居つた所迄進む事は出來ないと思ひます。けれども、將來進むべき方角だけは解るであらう。又生命の基礎となるものだけは捉へる事が出來るであらうと思ひます。

此の頃神祕に接したとか、或は己だけが大悟徹底したとか、所謂自稱豫言者と云ふ者が諸所に在ると云ふ事ですが、宗教と云ふものは、さう云ふ樣に一個人の頭に特別な惠みを施して、聖旨を下し給ふと云ふ樣な譯のものでは無い。今吾々の說く宗教は誠に古い宗教で有る。開闢以來今日迄成長して來て居る、幾萬年來の星霜を積むで來て居る宗教で、昨日今日此の世界に生まれたものでは無い。又宗教は、少數の人間の腦裏に現はれたものでは無い。宗教は人類的のもので有る。それで私は度々三年生には申した樣に、決して獨斷的に成らぬ樣、偏見に陷らぬ樣に、何時も勉めて居るのです。故に自らは、成るべく世界の多くの方面の人々に相談しました。多くの學者にも、宗教家にも、哲學家にも交はつて、思想の交換を致したので有る。そ

れで吾々が唯自分の狹い頭の中で、主觀的に想像して拵へたもの、或は唯幻の如く心裡に現はれたる幻像の如きものでは無く、實に確實なる實在して居る所の生命あるもので有る。そこで私は今朝諸子に御話するのに、唯己の拵へたもの、己の經驗したもののみを以て證據立てずして、成る可く廣く謀つて得た所の結果を表はす樣に致したい。それのみならず、諸子自身深くお考へになつた經驗にも訴へたいと思ひます。故に時を取るけれども、成るべく今日世界でオーソリチーとも云はれて居る所の大家の考も、また今日極く神祕說に耽つて、殆んど迷信に陷つて居る宗教家の考も、出來得る限り廣く集めて、確實なる土臺の上に信仰を立てさせる樣に進んで行きたいと思ひます。

それで今日は、先づ生命と云ふ事を申すつもりです。其の考を私が此所に御話する前に、今日只今の諸子の態度で、己の宗教は何であるかと云ふ事は極く簡單な詞で表はされるで有らうと思ひます。故に諸子の經驗をも加へて導きたいと考へますから、各々の心に答へて戴きたい。先づ神と云ふものは如何なるものかとの問に對する皆さんの答を大別して見ませう。

(1)神と云へば主觀でもなく、客觀でもなく、無限絕對のものであると思ふ者。

(2)其の神は人格的の神であると思ふ者。

(3)神と云ふものは自然の法則、又は自然の力であると思ふ者。

(4)カントやフイツチエの云ふ如く、神は道德的の法則であると思ふ者。

凡そ此の四つのうち、孰れかに入るであらうと思ひますが、私の考では Humanity の理想が神である。併し Humanity なるものは動くものである。進化する者である。其の進化する Humanity の理想であるから、是なら全く誤りなき考であると云ふ事は、誰も斷言する事は出來ないだらうと思ひます。それならば是は、不確實なるものかと云ふと、さうでは無い、確實なものである。けれどもさう云ふ事は、神と云ふ事を申す時に讓りませう。

其の神と云ふものが解りたい。猶研究して眞理に近い知識を得たいと云ふ欲望を持つてゐない者は、恐らく此の中にも一人も有るまいと思ふ。けれども假令神と云ふものが解つても、それだけで宗教の目的終れりではありますまい。然らば宗教とは如何なるものであらうか、私は諸子が宗教を渴望して居らるゝのには、まだ外に目的が有らうと思ひます。

宗教は神では無くて、生命である、信條ではない、信仰である、Heart であるとは誰も同意する處である。

其の Heart とか、精神とか、信仰とか云ふものは、一體何で有らうか。此の宗教の生命に大切なものは祈祷で有る。如何なる事を祈るかと云ふと、種々ある。極く低い宗教は私利私慾を得たい爲である。高尚になると云ふと、罪の救ひで有る。クリストでも、釋迦でも、動機は一つで此の世の中を救ふと云ふ事であつた。其の救ひと云ふ中には、罪を救ふと云ふ意味が有る。又此の世を天國の樣にしたいと云ふ事であります。今日の偉大な人も此の社會を天國の樣にしたい、社會を幸福にしたい、人類を救ひたいと云ふのが祈である。これが宗教の眞髄であります。

私も七つの時、宗教心が起りましたが、是は、自分の一番慕つて居つた母を失ひましたので、其母にもう一度逢ひたいと云ふことがあつた。又自分の尊ぶクリストとか、マリヤとか、ヨハネとか云ふ人に、逢ひたいと云ふ事がある。もう一つは未來と云ふ事である。死んで後に未來と云ふものが有るであらうか、どうかが知りたいのである。それは地獄と云ふ樣なもので無く、極樂の樣な處に行きたいのである。卽ち長く生きたいと云ふ樣な事が、宗教の起りでは無いか、斯かる願望が宗教の起源に關係する事は、餘程深い樣にも思はれるのです。

夫れで先づ最切に、宗教の起源と云ふ事に就いていろ〳〵な事が伴つて居る。宇内を見て宇宙を統一したいと云ふ、是も心の中の願ひである。そこで宗教は、多くの哲學者、生物學者、或は宗教家の一致する所の考を、言葉に表はして見ると、生存の願望と云つてもよからうと思ふ。

此の、生命を得たいと云ふ事から考へて行くと段々解つて參ります。そこで私は、此の考を定めるに就いては、世界の一番進んだ所の、又人格から云つても、最も確な人の考と相談し、又一方には極く迷信家の考をも材料に加へて、自分の說を定めたつもりであります。

それで諸子にも、種々の說を引いて御參考に供したらよからうと思ひます。けれども時が許しませぬから省きますが、歐羅巴に於て、哲學に、心理學に、又宗教上にもオーソリチーとして許されてゐる所のヴントは、宗教は理想的の存在に關する凡ての思想、凡ての感情である。其の理想的の存在とは、人間の希望であり、又要求で有る。のみならず、是は人間の希望に應ずる事の出來るもので有る。と云つて居ります。故に言葉を換へて云へば、人生の願望と要求から出來た所の理想であると云つても善いのです。獨逸の有名なる哲學者ホイエルバツクは、神は實現なり、宗教は人間の願望が思想上に實現せられたるものなり、と云つて居ります。人間には知的欲望がある、それも

現在のもののみでは滿足せず、未來に就いて願望するのである。故に此の人は又、若しも人類が必要を持たず、欲望がなかつたならば、宗教と云ふものは出來なかつたで有らうと云つて居る。

同じく獨逸の哲學者ハートマンは、若しも悲しみと惡事とが無かつたならば、宗教は起らなかつたであらう、神とは人間が自分に持つて居らぬ力、卽ち自分以上の力に外ならぬ。其の力に依つて救はれたい、苦しみから逃れさして貰ひたい、幸福を與へて欲しい、と云ふ願望であると云つて居ります。

玆に一言說き明かして置かねばならない事は、生存の願望とは如何なるものかと云ふ事、是は換言すれば、發達的向上心と云つても善いでせう。卽ち完全に進まんと希ふ所の心である。生きて居ると云ふ中には、保存と云ふ事も有ります。第二は幸福と云ふ事、第三は完全なる生活を得たい、立派なる人間になりたいと云ふ樣な願望である。是を別くれば積極的と消極的との二つになります。

積極的の方は人類の精神力を發達させる事、更にこれを分けると第一個人的、第二社會的、第三人類的と云ふ事になる。

扨て消極的の方は、人類の精神力を發達させる事に妨げをなす所の、障碍物を除き去らむとする事である。極く低い宗教は個人的であるが、高尙なものになると全く人類的であります。そこで願望と云へば、唯感情だけの樣に思ふ人も有るが、さうでは無い。其の主なる要素は、人類全體の發達を目的とするのである。卽ち宇宙の根本である所の意志の發達を期するので有るから、云はゞ理想的の目的と云つても善いのである。兎も角も宗教は、人間の願望から起つてゐるのです。

印度の宗教は、人生を悲觀した所の厭世から起つて居るが、佛の起たれた目的は、やはり救ふと云ふ事であつた。人間に願望がある爲に苦痛がある。其の苦痛を救ふには、無我になり、無差別に成らねばならぬと云ふ事である。故にやはり人間の欲望と云ふ者に、源を發して居るのである。人間は生存の慾を全ふせしむると云ふ事と、慾を殺すと云ふ事とは、詞の上から云へば、矛盾する樣であるけれども、段々溯つて行くと、つまり人類全體を幸福にしようと云ふ事に成るのです。若し神が人格的のものであるとするならば、それから自分の罪を許して貰はねばならぬ、そして益々完全な者に達しようと云ふ事になるのです。是は各自の經驗に照らせば、直ぐ解る事であるが神は何であるか、と云ふ問題もあるが、宗教は決して知的欲望ばかりではありませぬ。

ゼームスは、宗教の目的は神では無い、生存で有る。其の生

存はもつと大いなる、もつと豊富なる、もつと滿足の出來る生存、是が卽ち宗教の目的で有る。と云つて居ります。生存を愛すると云ふ事、是が卽ち如何なる程度の時に於ても、常に宗教心を鼓舞するもので有る。そこで宗教の起りは、第一生存の欲望で有るが、次ぎにもつと深く考へると理想である。卽ち現在の生存は不完全である。吾々の願望は一層大なる、一層幸福なる生存であるから、將來に屬するもので有る。そこで人間の理想より拵へるのであるから、昔から人々によつて描かれた神が違つて來るので有ります。其の理想と云ふ事をもつと通俗の詞で云へば信仰である。其の信仰とは何であるかと云へば、其の理想を慕ひ、理想を實現すると云ふ熱心であり、希望である。今私が諸子に尋ねた時に、神は人格的のものであると答へた人もありました。人格的のものとすれば、其の次ぎには必ず神と云ふものは、父と子と聖靈であると云ふ考が起る。吾々も前にはさう信じたので有りますけれども文明の光を入れると矛盾が起るのです。是は信條では無く、信仰である。如何となれば信條は死むで居る形式であるが、信仰は生きて居る所の精神で有ります。其の理想と云ふものは何に由つて出來たかと云ふと、生存の願望に由るので有る。さうして是は唯感情のみでは無く、情と、知と、意との働きから出來たものである。故に眞、善、美の理想であるのです。此の理想と云ふと、全くの人間の主觀的に拵へた、所謂人間が想像した處の一つの寫像であると云ふ樣にも考へる事が出來、又此の理想は、宇宙全體から出來て居る所の大宇宙が小天地なる人間の心に映つたもので有るとも考へらるゝので有る。けれども是は唯空中の樓閣ではなくて確に實在するものがあるのです。どうして宗教的の理想が出來て來るかと云ふ事は後に申しますが、兎も角も、眞善美であるのです。其の理想が出來て是を實現するのである。實現せらるゝならば、人類が進化するのであります。吾々個人が進化するならば、必ず理想も進歩して宇宙の精神に近づいてゆくのである。さうすると理想も亦進化するのです。此の理想が出來てこれが宗教の生命となるには、信仰が必要である。此の信仰が無かつたならば、實現は無い。實現が無いならば、生命は無いのであります。それで宗教に於て最も大切なる生命とも成り、力とも成るものは、此の信仰です。此の信仰と云ふ事と、迷信と云ふ事とが、同じもの〻樣に考へらるゝのは大いなる誤りです。信仰と云ふものは大いなる勢力を有するもの、卽ち生命となるものであるが、是は奇蹟を信ずる樣でなければならぬと考へ易いのは大いなる謬見であります。

善く聞く事ですが、私はどうも意志が薄弱であるから宗教に

でも依つて、意志を研く外はあるまいと云ふ人が有ります。卽ち道理が解ると信仰と云ふものは無くなつてしまうから、成るべく解らぬ樣にと勉めるでせう。又あの人は何か宗教に入らせる樣に、有難やの所へでもやるが善からうと云ひますが、是は醫師で云へば匙を投げた人である。根本的の治療が出來ないと見定められた病人です。さう云ふ人は迷信的に安んじて居る事は出來るで有らうけれども、眞の生命は到底得られないのである。私は諸子を扱ふには、匙を投げられた病人を扱ふ樣にはしないのです。諸子は高等教育をうけ、今日世界の最も進歩した潮流に加はつて行く事の出來る學生である。若し迷信に耽つて居るならば、文明の光に接すると、科學の云ふ眞理と矛盾を來すので有る。其の矛盾した考の中に留まつて居れば決して宗教の生命は得られないのであります。今日の基督教徒の力の無いのは此所である。昔の淸教徒の如き信仰が、今日の宗教界に在るであらうか。多くは唯物質的快樂を求めに教會に行き、或は唯歌を聞きに行くのである。昔の如き信仰は地に落ちたのである。其はどうしても科學や哲學の云ふ所と矛盾したものを信ずる事は出來ないからであります。さう云ふ迷信に陷つて居てどうして燃ゆるが如き生命が出來て來やうか。吾々の信仰は眞でなければならぬ。科學の示した眞理は眞である。科學は凡ての僞りを破り誤りを除いたものである。科學の光を受けると己の迷信的信仰が破壞せられるから、是を防がむとして頑迷に陷る。實に是が眞の信仰の得られぬ一大原因であります。イザーヤとかモーゼとかクリストとか云ふ人は決して眞理に逆つたものでは無かつた。此の人々の教の中には眞理が有るのです。故に昔から知識と信仰とは矛盾するものではありませぬ。昔から眞理に逆つたものは、必ず滅びました。其の一例を云へば、ホゼヤと云ふ豫言者がイスラエル人に云つた詞に

　イスラエルの子よ、イスラエルの國民よ、主の詞を聞け、我が人民は、知識を缺きたる爲に滅びたり、汝曹は知識を排斥したる故に、吾汝曹を排斥す。

と申して居ります。

　昔から眞理を好まない者は、卽ち神を好まないのである。それで此の際に於て吾々が知識を拒み、眞理に逆らひ、迷信に屬する信仰を續けようとするのは、己を滅ぼし、國を滅ぼすので有る。一時の安きを貪ぼらうとする者が宗教家の中に無いのでは無い、けれども彼等が古き信仰を捨つるのを罪惡の如く思つてゐるのは誤りです。聖書にも

　若し一粒の種地に落ちて死なずば一つにてあらん、若し死なば多くの實を結ぶべし。

とあります。

若し諸子の種が地に落ちて、其の種が一旦破れなかつたならば芽を出す事は出來ないのです。諸子が古い信仰を變へまい、信條を破るまいとするのは、丁度胡桃の堅い皮を破るまいとすると同じ事である。けれどもその皮を破らねば、其の中の芽は出る事は出來ないのです。山を移す程の信仰は出來ないのである。私が諸子に其の皮を割らせ、迷信を破らせようとするのは、一層堅固なる、一層進みて已まざる信仰に導きたいからである。クリストは、

若し芥子種の如き信あらば、此の山に此處より彼處に移れと云ふとも、必ず移らむ、又汝曹に能はざる事無かるべし。

と云はれて居ります。

清教徒の信仰、コロンバスの信仰は、到底出來ないと思つた事を成し遂げたので有る。吾々もこの信仰があれば、成し能はざる事は無い。諸子も芥子種程の信仰が有るならば、如何なる事も出來るので有る。今吾々は誠に纖弱い婦人の手を以て、第二の維新を成し遂げようと云ふ事を企てゝ居る。我が日本のみならず、東洋に新天地を開かうと云ふ事は、彼の富士山を海に移すよりも一層困難である。けれども若し芥子種程の信仰が諸子にあるならば出來ぬ事はありませぬ。

今私は、宗教は人間の生存の願望、及び、それから出來た思想並びに理想である、と申したのみならず、其の中に希望が有り、向上心が有るのです。けれどもそれだけでは無い、是から私共が云ふ所の、眞の宗教の生命と云ふものを得ねばならぬと思ひます。

眞善美の理想とは何

前回におきまして、宗教は人生の欲望から源を發して居る、其の欲望は理想となり、信仰となつて、宗教の生命が出來てゐると云ふ事やら、又其の理想と云ふのは眞の理想であり、善の理想であり、美の理想であると云ふ事を申しましたが、其の宗教で云ふ所の眞善美の理想は果して何であるか、其の眞髓は何であるかと云ふ事を今日申すつもりであります。ところが其の最も深い所に參りますと、なか〳〵是を詞には云ひ現はしにくいのです。まして僅かなる時間に、餘り順序に從はないで說きますから、私自ら感じてゐる所、自分の目に見えて居る所のものを、丁度諸子に現はす事が出來るか否かは心配であるが、餘程深く御考へになり、心を虛うして御聽きになつたならば、或は其の考の有る處だけがお解りになる事が出來やうかと思ひます。是は私が長く考へて自分には確に得て居ると思ひますけれ

ども、丁度其處へ、諸子を如何にして導いて行く事が出來るかと云ふ事はなか〳〵問題である。是に就いて昨夜以來考へて見ましたが、言葉が不充分であるから、其の考を現はすには甚だ困難である、餘儀なく是迄有る所の詞を用ひますけれども、從來人々の使ひ來つたものと違ふ意味を含ませねばならぬ。故に餘り言葉に拘泥せず又順序と云ふ事によらず、眞意を考へて貰はねばならぬ。

それはどう云ふ事かと云ひますと、前に私が、社會的宗教と云ふ事を申した事がありますが、此の社會學的宗教と云ふ言葉は極く新しい言葉で、我が國には適當な言葉がありませぬ。故に一番解り易く表はすには、英語で申す方が便利です。英語に Sociality と云ふ言葉がありますが其の Sociality といふ言葉は卽ちこの Sociological Religion（社會學的宗教）の土臺と云つても宜しい、尙委しく云へば Sociality とは關係と云ふ事で、人と人との關係もやはり Sociality ですが、宗教の關係と云ふのは、人と神との關係、或は人と神との交通事である。又學術的に云へば人と人以上の力との間に在る結合であります。卽ち神と人との社會的結合である。換言すれば、人が無限或は神に對する所の調和、信賴、順應、尊敬、崇拜する事である。故に宗教の目的は、完全なる Humanity を作る事、卽ち理想的關係を作る事であります。Humanity といへば人間社會の關係だけに限らるゝかの嫌ひがあるから、私は是を Divinity と申したい。卽ち無限或は神と人との調和統一であります。

そこでシュラエルマヘルは、宗教は Absolute Dependence 卽ち絕對的信賴である。此の人が無限と云ひませうか、絕對、宇宙、或は神と云ひませうか、是に對する信賴であると云ひました。

宗教は社會的結合、卽ち人と神との關係である。其の關係は信賴である。人が信賴すると云ふのは、其の關係があると云ふ事を感ずるのみならず、是を知つて居るのである。故にシュラエルマヘルは、感情と云ふけれども、知も有り意も有るのである。此の信賴と云ふ事は確かに宗教の一要素である。卽ち彼は神に對して、絕對的信賴と云ひ、人に對しては相對的信賴と云ひました。

社會學者のコントは、神をさして The Great Being 卽ち Humanity と云つて居ます。夫は萬有の中で、進化の頂上に位するものは人類であるからである、其の人類の精神の結合は Humanity である、卽ち神であります。是に信賴すると云ふは、精神と精神、意志と意志との全體の結合、卽ち社會的結合である。是が卽ち、コントの云ふ神であり、宗教であるので

す。獨りコントのみならず、クリストも、釋迦も此の Humanity に最も重きを置いてあるので、クリストの時までは、神の國は未來に在ると考へて居たけれども、クリストは、天國は汝曹の中に在り、汝曹の精神の中に在り、天國は此の世に在り、未來に至りて現はるゝのでは無く、此の世に天國を來すのであると云はれて居る。是は理想的の Humanity であります。

宗教家が今日まで奮闘して來たのは、皆其の神の國を、此の世に實現せむが爲である。然れども Humanity が直ちに神、又は宗教であると云ふ考は未だ充分で無い樣に思はれるのです。

宗教と云ふのは、其の Humanity を無限に擴大したもの、卽ち Humanity を宇宙化したもの所謂宇宙的の Humanity 卽ち Divinity である。是を宗教の歷史から材料を集めて、其の考の誤らぬ事を證據立てる必要があります、けれども到底今日だけでは時が足りませんから、諸子自身に、一層研究せられむ事を希望致します。

Humanity と云ふものは、此の世界の上に現はれて居るのである。故に Humanity は、吾々人類の結合であります。處が人類には、猶制限が加へられて居つて、到底人間の欲望を滿足せしむる事は出來ないのです。それで人間の心を滿足させるには、其の人間社會を宇宙化して來なければ、已まない樣になるのは、自然の勢である。先づ吾々の關係は、獨り此の吾々の住居として居る世界丈では無いので、天の星にも亦太陽にも及んで居るのであります。猶それのみに非ずして天の河原に在る無數の星にも、吾人の眼を達せざる、又想像の及ばない所にも、其の關係が有るのである。故に是を無限と云ひ、或は神と云ふけれども、此の關係は、世界の人類のみに止まらず、段々範圍を擴めて、吾人以上に及ぶので有る。故にどうしても有限に甘じて居る事が出來ない、此の世界に唯閉ぢ込められて居ると云ふ事に、滿足する事は出來ない。そこで極く野蠻時代には、天に在る無數の星も、吾々と交際の出來る所の人間であると云ふ樣に考へました。人間である以上は、其の間に交際があり、交通の出來るもので有る。故に其の物から力を得たい、或は、其の物に心を通じたいと云ふ考が起るのです。而して此の宇宙を、人間社會と同じものに考へて來ました。吾々人間の中には、相互に助ける事もあり、又爭ふ事が有る樣に、宇宙の社會にも同じ事が行はれて居る。故に、星も、月も、風も、雲もやはり吾々と同じやうに一つの心を持つて居るものであつて、卽ち風の神もあれば、海の神もある。是を大別すれば、善のものと、惡のものと有つて、其の善の神と、惡の神との爭が、天

地間の現象となるのである。種々の衝突は凡て善の神と惡の神との戰であると云ふ樣に思つて居つた。

斯くの如く萬有は、皆心を有するものであつて、吾々人間社會よりも、一層優れた高尚な社會である。それと吾々人間社會との間には、關係あり、交通あるものである。そこで人間が死ぬる時はどう成るかと云ふと、其の宇宙に在る處の、大なる社會に移つて行くので、吾々社會は、其の宇宙の社會の一部分である。故に死ねば、より大なる宇宙の社會に移るので、吾々の先祖、吾々の愛する人も、其の社會の一員であるから、死ねば其處で逢はれるのである。又今でも大なる宇宙の社會に入つたものと、吾々と交通する事も出來るのである。其處には無數の物、無數の天使があつて、吾々と交際して居るのであるが、殊に自分の事を、最も善く守つて呉れる所の天使が、目には見えないけれども、澤山あるのである。是に反して、又無數の惡魔と云ふ者が有つて始終吾々に禍を來さうとして居るのである。此の靈の國がクリスト教で云へば天國であります。ヨハネの書いた默示錄によれば、神の市といつて居る。此處を佛教で云へば極樂、神道で云へば、高天が原であると考へるのであります。

成程是等は、人間の想像より成つたもので、ヨハネの默示錄中の天國は、やはり人間の頭で描いた想像畫でありませう。併し斯くの如き想像をするのは、やはり人間の心に必要が有つて出來たので、偶然に出來たのではない。非常な欲望があり、其の必要に應じて出來たものである。斯くの如き要求があり、斯くの如き欲望があると云ふのは、其處に必ず天國の如き、極樂の如き、又地獄の如き、一の實在がある。斯くの如き、一の關係があるのである。卽ち宇內は一つのもので、人間社會は宇內の一部分である、其の間には信賴があつて、離る可からざる關係を持つて居る事を感ずるのである、のみならず其の關係を欲するのであります。

宗教とは Humanity 卽ち人類間に存在する關係であつて、其の Humanity と宇宙の Order との結合、又は宇宙と社會との結合である。換言すれば宇內の社會的結合と云つても宜しい、是を私は Humanity と云ふ言葉に對して Divinity と云つても宜しいかと思ひます。Humanity は卽ち神である、又宗教である、といへば少し物足らぬ所があるから、夫を一層擴大して、宇內的 Humanity 又は Divinity と申したい。其處で先づ、宗教と云へば Sociability である。Divinity である。又 Dependence とは力、無限、神、或は全體に信賴するのである。斯く全體に關係を有して居つて、是より受くるもの、又自分より

是に出したるものも有るのです。併し其の Divinity と云ふ考の中には、必ず Humanity といふ考も含まつて居るのである。Divinity は全體であるが Humanity は一部です。故に此の H-umanity の相對的信頼をも含み、人と人との關係をも含んで居るのであります。

人生の欲望の最も大なるものは何で有るかと云へば、誰も答へて愛と云ひませう。愛は人と人との關係を感ずる情緒でありまして、如何なる人間と雖も親子の關係を持つてゐない者は無い、親によらずして育つた者は一人も無いのであります。故に親子間の情愛なき者は無く、又兄弟、友人、國家、社會と云ふ關係のない者も無く、此の關係を離れて生存する者は有りませぬ。故に此の關係を有すると云ふ感情は誰もあるのである。又信頼の意識もある。此の相對的關係を Divinity と云ふ事も出來るでせう。此の意味で云へば Humanity も亦 Divinity であると云つて差支へは無いのである。

今申した考の中に、最も大切なる宗教の生命となるべき眞髄があるのであります。併し私は抽象的に言葉を以て申しましたから、宗教上の經驗ある人、最も考の深い人にはお解りになつた點があらうと思ひますけれども、まだ何處にも最も大切なる點が有るかと云ふ事のお解りにならぬ方があるかも知れませぬ。故に少し時間をとつて吾々の經驗に照らして、例を引いて具體的に諸子の心に訴へませう。

先づ Sociability と云ふ事の、最も解り易い點を云へば、親子とか、兄弟とか云ふものゝ關係は此の中に誰も解らぬ方は有りますまい。けれども此の關係が宗教的に成つて居ない人は、其の間に行はれて居る所の眞の愛と云ふものが解らないでせう。故に一番普通に行はれて居ることを云へば、愛と云ふ事、卽ち神と人との間を結びつけて居るものは無私の愛である。其の愛は親子の間にも、亦朋友の間にも出來てゐるのである。是は新たに拵へるのでは無く、關係が有れば必ず其の關係を感ずるのです。故に立派なる關係を結べば夫に對する意識が起る、其の關係の結合が愛であります。是が人生の價値ある所以、又人生の目的ある所以である。併し宇宙と人生との關係を愛なりと云へば、餘り大きくて解りにくい、從つて其の感じが起らないかも知れませぬから、今少し具體的に說いて、其の考が全體に解る樣に致したいと思ひます。是は餘程深い玄妙な處に入つた話ですから、諸子が善く考を用ひて、其處に達せられん事を希望致します。

先づ吾々が互に愛を感ずるのは、親子とか、兄弟とか、親友とか、極く狹いものに限るかの樣に思つて、宇宙或は神の愛を

感ずる事が困難である。故に此の愛を感ずるには、人間化しなければならぬ。「天に在します吾曹の父よ」と云へば、初めて親子の情が起るのである、信頼的感情が起るのである。故に宗教と云ふものは、無限なる抽象的のものも、有限なる人格的のものとしなければ、どうしても愛が感じられないと云ふ考もありませう。

故に人格的の神を認めると云ふ事は

Symbolic Religion として儀式として、必要な事もありませう。けれども、愛卽ち信頼の感情は、吾々と同一の人格にのみ止まらないで、宇宙又は宇宙の要素に對して起るものである。又實在が有れば必ず心に感ずるものであります。是が感ぜられなければ、人生の價値は無いでせう。私の經驗によれば、人格的愛を感じ、神と融合すると云ふ事は實に立派なる生活である。然れども今日は人格的の神、又三位一體の神を、子供らしく信じ、其の關係で滿足する事は出來ませぬが、夫とは全く見解の異なる神を信じ、是と融合する時の感情は「天に在します吾曹の父よ」と云つて居つた時と、同じ力が得らるゝのです。又充分其の間に神と交通をなす事が出來るのである。吾々は宇内の凡てのものと、關係を有し、又此の世界を離れたる凡てのものと、交際し得るのであります。例へば我が國では太陽を神として居りました。我が國民を教育する上に、最も力の有つたものは、日輪でありませう、殊に島國なる日本は、太陽に負ふことが、最も多いで有らうと思ひます。吾々も小さい時は、是を神として拜んだので有る。併し是も唯神としたのでは無く、既に社會的の關係が有るからである。此の太陽と、人類、太陽と自分との關係は、どうで有るかと云ふと、萬一太陽が照らなかつたならば、植物は出來ぬから、食料は無くなるのである。吾々の薄桃色をして居る色素も出來ぬ。吾々に最も幸福を與ふる根本となる眼も、其の用をなさぬので有る。さう云ふ風に自分と云ふものと、太陽とは、離る可からざる關係が有ります。殊に私は太陽が好きで萬一曇つて太陽が見えなかつたら、必ず氣分が惡いのです。誰でも、今日は親友に會はうと思うて待つてゐるのに來なかつたら、不愉快を感ずるでせう。それと同じやうに、誠に快く東の方から太陽が出て來ると、此の上なく氣持が善いのである。私の裏の硝子の部屋には、殊に太陽の入るのを喜んでゐます。寒い日には外に出ると、太陽が溫めて呉れるのである。又樣々の美しいものを見せて呉れるのです。其の關係が理想的にゆかぬと不愉快であります。故に私は、太陽と交はり、其の深き關係を感ぜざるを得ないのである。もう一つ私の好む事は、太陽は誠に公平であつて、少しも吾々に害を與

へない事であります。他の人も照らすが私をも同じく照らすので有る。世界の人凡てが、太陽の惠みに浴して居つて、誰一人太陽に對して不平を云ふ者は無い、是も吾々の模範とすべき事である。若し吾々が少しも太陽を見る事の出來ぬ暗黑の中に閉ぢ込められて居つたならば、如何に不幸を感ずるであらう。獨り太陽に限らず、此の松の木にも、彼の鳥にも、吾々は少なからぬ關係がある。是をもつて吾々は、宇宙全體と關係を有して居つて、實に親しい情のある事が解るのであります。昔の人は是を人間化し是を社會化し、次ぎに是を精化し來つたのです。斯かる關係の出來たのは其處に實在が有り、其の實在を感ずるから、是を想像して神としたのである。吾々が是等の關係を最も善く感ずるのは Humanity であります。Humanity に於て其の關係を理想的に進めむとの意志を最も善く現はして居る。

扨て Humanity の尊き事を現はすには、是に最も反した者を現はせば、其の意味が最も善く了解せらるゝでありませう。然らば Humanity に反したるものとは何であるか、即ち地獄である。地獄とは如何なる處でせうか、即ち理想的關係に反した國でせう。斬られるやうな痛み、燒かれるやうな苦しみが地獄でありませうか、地獄は猶外に在ります。私は地獄とは、神と人とが全く離別し、人と人との交通が絶たれ、宇宙に在る要素と我との關係を全く絶たれたる境遇である、此の境遇こそ眞に地獄でありませう、宇宙に對して興味なき人も亦地獄である、又自分の親兄弟自分の妻子より外に考みる事の出來ない所謂私利私欲を事とする人を、全く愛する者より關係を絶つて暗黑の中に閉ぢ込めたならば、必ず其の人は地獄の思ひをするであらう。是は外部からせられた例でありますが、又心の中にさう成つて居る人もある。親子兄弟であつても、少しも其の關係を感ずることの出來ぬ人、是が即ち地獄であつて、最も非人道的、非宗教的でありませう。露西亞では虛無黨の者を罪してシベリヤに送り、牢に押込めて少しも人と話をさせず、交通をさせず、暗黑の部屋に入れるのである。爲に囚人は非常に苦しく成つて、終には壁に向つて話をしかけ、せめて自分の聲を聞いて慰むるのである。けれども夫がわかれば更に重く刑せられて前より一層暗き處に投ぜらるゝ事になつて居るから、罪人は此處に一匹の蠅の來るのをさへ非常の喜びを以て是を捕へ、自分の名前を記した小さな紙片を、髮の毛で其の足に結びつけて飛ばし、他の囚人に送つて交通を求むるさうです。斯くの如く、吾々人類が理想的關係を絶たれた時の經驗によつても、相互に如何に信賴があり、愛情があり、又全體に關係のあるかを知る事が出來ませう。此の信賴、相愛關係を知るのが宗教であつ

て、所謂是を Sociability と申します。

宗教にも段々成長の階段がありますが、孰れの階段に在る時代にも、必ず今申した要素があります。是を三つの時代に別けて申せば、

(一) 人と宇宙の力との間に在る所の社會的結合　即ち客觀的宗教の時で有つて、萬有は皆神、所謂自我も、神も、同一視した時代で、即ち神秘的時代である。

(二) 人と宇宙との間に存在して居る所の社會的結合　前狀態が漸次發達して、主觀的となり、神も自己の心に在りとし、物も亦自己の心の現象なりとする、即ち主觀が、客觀を壓倒した時であります。

(三) 人と宇宙にある要素との關係　即ち人間社會を、宇宙化して出來たもので有る。此の時は主觀も客觀も、皆其の要素となり、兩者を調和統一する時代。

となります。斯くの如く、時代によりて、其の變化は種々あつたにも拘らず、宗教は、常に人と全體との結合で、無限の中には有限あり、有限は、絶對、又無限の中に在るが故に、有限なりとて輕んぜらるゝ事なく、全體に關係があるのである。そこで宗教の生命は、信仰と望と愛とである。其の信仰とは、理想を信ずるのです、望とは、理想を實現し得ると云ふ確信であります、愛とは、其の間に存する關係を感ずる力です。ボールが云つた樣に、此の三つの中で最も大なるものは愛である。其の愛とは社會的結合である。宗教は即ち宇宙的 Sociability であります。是によつて吾々の凡ての矛盾は調和せられるのです。是を悟つて始めて吾々の生命は得られるのである。諸子は其處に達する樣に、充分お考へになり、修養を積んで戴きたいので有ります。

ゼームスは、「第一は、吾々の見る事の出來る有限界は、精神的宇内の一部分である、第二は有限界よりも、一層高き宇内との調和合體は、吾々の宗教の目的にして、吾々と此の精神的宇内との、神靈的の交通、是即ち宗教なり、故に是は、宇宙の法則とも云ふべく、又神と稱するも可なり」と云つて居ります。

眞の理想、善の理想、美の理想と云ふのは、相互の關係であると云ふ事を申しましたがシユラエルマヘルは Dependence と云ふ言葉を使つて、宗教は感情であると云つて居る。けれども、夫は偏した考である。やはり情の關係であると同時に、意の關係であり、智の關係である。其の三つのものが、調和統一して出來た理想が所謂神である。

眞の理想

宗教は、人類間の關係であつて、最も高尚なる結合である。延いて其の關係は、宇宙との關係となる故、星や、太陽の間にも、一つの關係があると云ふ事は、比較的考へ易い事であるが、斯くの如く宇宙的關係があるから、凡てのものに眞善美の關係があるので有る。眞とは、卽ち知の關係である。知の關係とは、信賴である。其の信賴が全ふせられて觀念となり、眞理と成るので有る。故に宗教には、知的要素が必要である。知識を渴望する所の要求も亦大切なる要素であるから、宗教は決して智を離れて成り立つものではありませぬ。

若し吾々が、良心に背く時は、苦痛を感ずるのである。是は、意志と意志との衝突であつて、互に信賴が保たれなかつた故であります。夫れと同じ樣に、吾々の理想と理想との間に矛盾が起ると、丁度良心に背いた時と同じ樣に、煩悶が起るのである。思想が矛盾して煩悶するのも、良心の煩悶も同一です。知識と知識、觀念と觀念とが矛盾すると、不得要領となり、懷疑に陷るので、是は確に煩悶である。故に此處に必ず調和を得、相互の關係を結ばなければ、滿足する事が出來ぬ、是を知識歸一の欲望と云ふのです。

昔からいろ〳〵問題が起つて、唯物論所謂汎神教にて、知識を統一せむとするもあり、又唯心論によつて知識の統一を求めむとし、或は主觀客觀を統一して、無限絕對の中に知識を統一しようとするものも有りますが、斯くて調和統一して達した所のものは、神であります。人の心が斯くの如く樣々に働いて、しかも一に歸するのは、宇宙に實在が有るからであります。其の歸一を熱望する心は、宗教心の要素であつて、又人生に缺く可からざる要素であります。其の知識と知識、思想と思想、觀念ふ觀念とが結合して、歸一したものが眞理である。其處に理想が出來て始めて宗教の所謂愛と云ふものが出來るのである。此の關係を自覺して、始めて愛を感じ得るのであります。

又是と反對に說く時は、愛と云ふものから、理想が出來るとも申されますが、併し宗教は、知を缺いて成立する事は出來ない、其の知も亦信賴があつて、矛盾する事なき眞理である。故に知識は關係なりと云ふ事も出來るのである。而して關係は眞理の眞髓であります。吾々の知覺が感覺になり、感覺が觀念になり、觀念が槪念となる其の關係は、吾々の凡ての經驗から出來た形式である。知識は、多くの經驗から抽象して出來た所の抽象的觀念である。卽ち知識は實在して居る所の事實の關係である。故に眞理とは、凡ての實在する事實の調和せるものと云つても宜しい。若しも其の事實より抽象したる觀念が、相矛盾して居るものは、是を僞りと云ふのである。此に於て論理は觀

念と觀念との關係であると申されませう。此の觀念と觀念との關係を作ることの出來るもの、卽ち凡ての事實から抽象觀念を作り得る所の、知力を持つて居る人間は、宗教的動物と云ふ事が出來る。下等動物は、物を具體的に知覺するけれども、其の知覺經驗を集めて、是を抽象し、概念を作る事は出來ない、故に動物には宗教心がありませぬ。或學者は、動物にも宗教心があると云ふけれども、吾々人間からはどうも、動物に宗教心があるとは、認められないのです。

第一、人間は、此の抽象的の思考力に由つて、自分は宇宙と云ふ全體の一部分であると云ふ事を知る事が出來る。全體とか、一部分とか云ふ事は、概念に由つて出來るもので有るから、其處に絕對的信賴と云ふものが起るのです。さうして人間には抽象的思想がある故に、神、我、主觀客觀の區別が解せらるゝので有ります。

第二、此の抽象的思考力の助けに由つて、宇宙の秩序、又は自然の法則と云ふ樣なものを拵へる事が出來、或は道德的法則其の他凡てのものに應用すべき法則及び格言などを作り得るのである。此に於て道德が出來る、道德とは、宇內の秩序、或は神と云ふものに、合體して行かうと云ふ事で、是も概念を作る力が有るから出來るのであります。

第三、宇宙の現象や、人生の出來事を觀察して得たる知識を統一し、科學、哲學が成立つので有る。故に吾々の宗教も、道德も、科學も、美術も亦此の知の作用卽ち觀念と觀念との統一によつて、出來たもので、是によつて人生は、益々高尙に發達するので有ります。そこで昨日、諸子が話された樣に、神は人格的のものであるとか、宇宙の秩序であるとか云ふ觀念は、種々の觀念を矛盾なきやう統一して、全體の關係を見出ださなければ出來ないのです。故に總ての觀念を調和統一する事が出來なければ滿足は出來ぬ、從つて信仰は起らない、宗教の生命も出來ないのであります。故に是非知的要素が必要である。又是非これを知りたいと云ふのは、知的欲望であつて是が吾々の研究心である、向上心である。併し吾々の今日得て居る知識は、有限であります。決して完全ではないのです。然るに宇宙の眞理は進んでも、進んでも無限である。則ち吾々は有限なる知に依つて、段々無限を見出だして行くので有ります。故に私は、是を理想と云ふのである。進めば進む程、高き處に理想を置いて、吾々は一日として、同じ事を繰返さないのです。吾々の理想は、段々宇宙の眞理に近づいて居るので有るけれども、未だ達し得たと云はれない。併し是を實現して行けば、又以上に昇り行くのである。是は變化するには非ずして、進化するの

である。發達するのである。此の限りなき向上が、宗教である、生命であるのです。

宗教は關係である、吾人の知識も亦關係である。故に其の關係を知らずしては、眞理に達する事が出來ぬ、片々たる知識が關係を全ふして、始めて眞理となり、宗教的生命となるので有る。

故に諸子の最も勉むべき事は、關係を知る事です。其の最も大なる宇宙の關係を見出だした者が、眞に神を認めた者で有ります。

善の理想

今日說く所は善である、卽ち意の働きである。言葉を換へて云へば、如何にして吾々は安心立命を得るかと云ふ事であります。玆に注意すべき事は、私は是から凡ての宗教を代表して說くべき必要がある。けれども同じ言葉でも、丁度佛教やクリスト教で使つて居るのと、少し違つた意味に聞かねばならぬ事が有ります。私は諸子がどう云ふ風に、おとりになるで有らうかと云ふ樣な事は、少しも心配せずに申しますから、若しあなた方の腑に落ちぬ所がありましたら、直ぐ樣御質問なさる事を希望致します。

吾々人類が、安心立命を得るに二つの道がある、卽ち、消極的方法と、積極的方法とで有ります。

第一消極的方法

佛教では、煩腦とか、罪業とか云ふものが有つて是が人間の禍の原因であると云ひ、クリスト教では、罪と云ひます。それで救ひと云ふのは此の罪から人間を救ひ、煩腦から人間を救ふのである。其の罪或は、煩腦とは、何かと云ふと、生存の欲望である。人間の禍は欲望で、其の欲望のうち最も大なるものは、生きたいと思ふ生存の欲望である。故に人間を救うて安心立命の域に達せしむるには、此の欲望を斷たしむるか、又は滿足せしむるかの二つであります。其の欲望を斷たしむるのが、消極の方法で、是れを滿足せしむるのが、積極の方法である。其の孰れかの道を辿つて、始めて安心立命を得るので有ります。さうして此の消極の道を取るものは、佛教で、積極の道をとつて進むものは、クリスト教である、故に私は、佛教は消極的の宗教であり、クリスト教は積極的の宗教であると、區別を立てゝ代表して置くのであります。

佛教では、涅槃に入る事が、人間の安心立命であると云ふのは、所謂此の欲望が滅した境界をさすのです。則ち死に由つ

て、死を救ふのであるが、クリスト教の方では、死んで生きるのである。生命の欲望を滿足せしめて、安心立命に達せしむるので有ります。故に一方は益々死に到り一方は益々生に到ると云ふ所から、正反對になる。併しながら其の目的は一になるのである。安心立命と云ふ目的地は同じである。孰れも絶對に進むのであつて、其の有樣は、恰も上に昇る人と、下に降つて行く人とあるけれども、孰れも無限に出づると同樣です。宇宙は上も下も無いのであるから、出立點は正反對であるけれども、目ざす所は同じであります。

善と云へば、何かと云ふと意志の關係である。そこで佛教では、意志の働きのある間は、煩腦があり、知情意の働いて居るのは惡である。知りたいとか、欲しいとか云ふ意志があるから、煩腦があり、人間の禍が起るので、是がある間は、滿足を得らるゝものでは無い。如何とならば、人間は有限である。さうして欲望は無限であるから、限りある人間の力を以て、限りなき欲望を滿たす事は、到底出來ぬ事であると考へるのであります。ソロモンの云つた樣に知惠を增すは憂ひを增すなりと云ふ風に、到底滿足を與へる事は出來るものでは無い。其の上人間は自我實現をしようとすると、どうしても他の意志と衝突する。又人間の欲望と欲望卽ち意志と意志とは衝突するものである。自分の幸福を得ようとすれば、人の幸福を割かねばならぬ。己の名譽を得るには、人を傷けねばならぬ。戰のあるのは生命の取りあひである。是が人間の禍の根本であるから人間を救ふのには、どうしても此の欲望を減ぜしむるより外に、道が無いと云ふのは、卽ち消極の方法である。此の消極の道を取つて人類を救ふのが佛教であると私は申すのです。其の主義を一言で云へば、欲望は迷妄である、僞である。此の欲望に從へば常に迷妄界をさまよつて、所謂輪廻して止む時は無い、故に此の迷妄を斷ち、輪廻を去つて、始めて絶對我に合體する事が出來るので、此の道を絶つには、佛教に由る外は無いとする。卽ち客觀が主觀に歸すると無差別になるのである。故に佛教は主觀教であるが、遂に主觀をも滅却するのです。一言で云へば、自己を滅ぼし、自己を相續しようとする事、生命を續けようと云ふ事が、萬物の欲望で、是が吾々の最後の敵であるから、是を滅ぼさうとするのである。佛語を擧ぐれば、煩腦卽菩提、生死卽涅槃、八億四千念の煩腦と云ふ事があります。故に煩腦の根本は情識である、此の情識を打破すれば煩腦も轉じて菩提と成るとあつて、自性を認識する事、卽ち大悟徹底する事となるのである。情識とは欲望である、意志であるのです。情識を打破するとは如何なる事を意味するかと云ふと、いろ〳〵經驗を

聞きまするとと、禪宗などで大悟徹底するには一心不亂になり、無差別の境界に入るであらう。私が考へるには、此の無差別の境界に入るには、意志を用ひてはいけないのです、智を使つてもいけない。思考力を使つてもいかず、思想を統一してもいくまい。研究心を持つてもいけないであらう。然らば吾々の心の中に在る內識であるか、さうでも無い、到底人間の言葉を以て云ひ表はし得ない或ものがある。夫は佛教の言葉で云へば自性と云ふものがある。大圓鏡智と云ふものが有る。是が煩腦で蔽はれて居る。智とか情とかに包まれて居る故に、此の情識を打破しなければ、到底此の明鏡に向ふことは出來ないのである。そこで全く無我、無意識になつて自己を捨て全く臨終の境界にならねばならぬ。斷迷根と云ふ言葉が有ります。此の境に入らねばならぬ。其の鏡を包んで居る所の蓋を破つてしまへば、始めて大圓鏡智と云ふものが光を出して來るのである。故に佛教に從へば、研究するとか、物を考へるとか云ふことは、反對するのであります。卽ち心意の運轉を止め、理想の觀念を破却して性を見るのである、さうして悟道するのです。佛語に、迷悟是卽ち鏡裡の塵、迷はず悟らず是眞の悟なり、と云ふ事があります。故に佛教は、智の欲望を滅却せざれば、大悟徹底する事は出來ないのである。智の欲望を滅却して、始めて安心立命の境に入り得べしとするのである。次ぎには人間の生命の欲望、是はどうして滿足を與へる事が出來るかと云ふと、これは阿彌陀に由るのである。此の阿彌陀と云ふのは、梵語で有つて、漢語に譯すれば無量壽と云ふ事になります。無量壽とは、不生不滅と云ふ事に成るのです。佛教では、どうして死がなくなるかと云ふと、命が無くなるから死が無くなるのである。生死と云ふ事は二つ有るのではなく、一物の表裏である。故に生死が無くなれば無差別になるのであります。此の佛教の觀念と云ふものは、やはり希臘などにも存在して居つた事があるのです。近世に於ても、ショウペンハウエルなども同じ樣な信仰を持つて居りました。又希臘のプラトーンは生死をどう云ふ風に解して居つたかと云ふと、命の虛妄を去つて、生死を離れたる常恆のものに由つて見れば、死は本に歸るが如きものである。又死は唯有限たる事を示すのであつて、有限の生に死の有る事は當然である。又有限の深淵に自我を投ずるにあらずして、非眞なる生命を捨て純我に歸したるに過ぎない。卽ち哲學は死の練習をするので有る。故に死は眞の生を得る所以であるから、死の死が眞の生命であると云つて居ります。此の教は死を以て死を救ふのであつて、人の生命を消極的に救つたものと云つて宜しいでせう。結局、生とか死とか云ふものゝ區別が、無くなつて無

差別の境界に入るのである。所謂生存の欲望が禍の根であるが、此の欲望が無くなれば則ち救はれるのです。無我の境に達すれば、遂に宇宙間何も恐る可きものは無くなるのである。夫で消極的から入るも、眞に無我、無差別の境界に入り、何一つ己を束縛する者無きに至つて、始めて安心立命の境界に入られるのであります。人間の宗教を求めるのは、生命が得たい死が恐ろしいと云ふ様な所から起るのである。無我の境界に入れば安心です。何も恐ろしい事は無い、故に確に其の道を辿つて行けば、安心を得られるので有る。そこで佛教は消極的に人類を救ふ事が出來ると云つて、差支へ無いのであらうと思ひます。

扨て、此の消極の道を取つても行かれるが、甚だ危險な道である。弊害の生ずる恐れが有る。佛教を信ずる人が、其の危險に臨みつゝあると云ふ事も、吾々はしば〳〵目擊するのであります

第一に、佛教の中には知識を排斥し、智力を認めないものがある。是は佛教が、主觀の極端に走せた所から起る弊である。主觀に走せたから、客觀が悉く滅却せられたのみならず、主觀も滅却せられ、自性觀を誤つたのであります。頑迷なる者は此の智力を輕んじ、眞の科學哲學は眼中に置かず、是を輕蔑し是を遠ざけて、顧みないのである。佛教徒の考には、此の大圓鏡智と云ふものは、無我の境界に入らぬ者には、解らないと思つて居るけれども、此の境界は、心理學上確に證明する事の出來る所の人の性情であります。

カントは、純正理性と、實踐理性と云ふものが有る。是は、無上の眞理、自明の眞理であると云ひ、シユラエルマヘルは、是が吾々の心の奥底に潜んで居る所の一つの情であつて、經驗や、知識では、悟り得可らざるものであるとし、或者は、良心、又は自識とも申しませう。主觀教では、必ず其の内意識にある、一種の力を信ずるので有る。併し夫が確に、特別の曇りの無い鏡かと云ふと、さうでは有りませぬ。是は誰にも有るのである。確に人の知情意に由り、經驗的、傳說的に養はれたもので有る。故に、唯、情識を打破する事に勉めたなら、此の境に達すると云ふ事はありませぬ。既に是は心理學上から云つても、誤謬たるを免れない說である。其の誤りからして眞理を防ぐと云ふ弊に陷るのです。其の結果哲學科學が發見した所の、法則と云ふ様なものを認める事は出來ぬ。個人から云へば、さう云ふ人は、到底思想の停滯を免れない、又偉大なる思想を養ふ事は出來ぬのであつて、其の結果思想停滯となり、退歩となり、此の世の進歩に貢献する事は出來なくなるのです。故に甚だ危險である。若しも諸子が其所に止まるならば、進歩は出來

ませぬ。此の道を辿らむとする人には三千年來の歴史も意味なく、世界は唯罪惡に滿ちて居るとのみ考へられる。けれども文明を否定し、歴史を否認し、知識を排斥して、人類を救ひ得るで有らうか、到底斯かる考を以て、世界の進歩を妨げ、滿足を得ることは困難であらう。是は恰もかの昇らむとする旭日を、妨げむとする如く不可能の事であります。文明進化の法則は、事實である、實在である。是に勝ち是を否定するは私は困難であらうと思ふ。

第二、佛教は人の意志、欲望を滅して世を救うた様であるが、是もやはり消極的に救ひ得たと云ふより外無いのです。人の生命の劣等なる事を悟らしめ、欲望の濟度す可らざる事を悟らしめて、全く己を殺して、己に安心を與へるに過ぎないのであります。

佛教の慈悲は、自己と同じく生ある者の陷る苦しみから救ふのである。人間に生命を與へる慈悲は無いのです。そこで人間を向上させて、理想に向つて奮闘させる事に由つて、人間を劣等なる禽獣より、一歩でも高めて行く事は出來ないのである。又佛教は、汎神教から抜けて、主觀教に入つて、再び汎神教に歸つて悟らしめると云ふのであるから、眞の大悟徹底に至る者は極く少數で有つて、一般人類が所謂涅槃に入つて安心立命を得る事は甚だ困難である。故に今日の學生が、佛教により大悟徹底しようとすると、さう云ふ弊に陷る恐れがあります。

第三、今一つの危險は、人生第一の欲望卽ち生命の欲望を、死に由つて救ひ、生に由つて自己保存、一般の進歩と云ふ様な、命の慾を否定するから、禁欲に陷つて、積極的に生を營む事が嫌になり、人生を悲觀して、人生の價値を認めない様になり、厭世に陷り易いのです。夫で其の消極的の道のみを辿つて、進まんとするは危險である。安心立命を得、人生を價値あるものとして進まうとするには、猶他に道があります。其の消極的の道も必ずしも弊害ばかり有るものでは無い、積極的の道を取つて、其の道を完全に仕様と思ふならば、消極的の道も參考とする必要があります。

第二、積極的の道

此の道は、意志を生かすのである、殺して助けるのでは無く、生かして助けるのです。理想を滅却するのでは無くして是を實現するのです、其の安心立命を得た狀態を善と云ふのであります。善とは、意志を滅却するに非ずして、凡ての意志が調和した狀態である。卽ち意志が理想的關係を得て、是を實現するのであります。其の働きを云へば、理想に從ひ、凡ての欲望

を支配して、活動する働き、其の意志を調和する所の働きである。其意志の調和は卽ち善であります。

惡とは意志の衝突である。無限の意志も、努力奮鬪して是を調和統一すれば、實現が出來て滿足の得らるゝものである。其の意志の調和とは何であらうか、卽ち知と情との合體で、吾々の全精神、全人格を表はす事が出來、又、欲望動機、或は目的と云ふ事が出來ます。

吾々人格の中には、種々の動機があるのみならず、動機と動機、欲望と欲望とが矛循する事が有る、夫を惡と云ふのです。けれども人間は、理性を用ひて是を調和統一する事が出來るので有ります。是を善と云ひ、個人の中に在る意志の調和を人格と申します。

吾々が人格を養ふと云ふのは、意志と意志との關係を調和するので有りませう。次ぎに多くの個人の意志、卽ち自他の意志の關係が、理想的に調和統一して居る有樣を社會的意志とも云ひます。

此の意志と意志とも衝突するけれども、夫が社會全體の、安寧、幸福を計ると云ふ事が、目的となつて居れば、銘々違ふ意志を持つて居ても、理想的關係が保たれます。そこで是を善と云ふのです。夫が段々發達して、人類意志と云ふものが出來る。是は世界の全人類が、完全に進步發達する事を、希望する所の意志であつて、是が猶發達して、宇宙化し、宇內の進化となり、遂に吾々の意志は、宇宙の意志と合體し、宇宙の欲望を完ふせんとするので有ります。

ショウペンハウエルは、是をさして意志と云ひました。宇宙の欲望は實現することが出來る。一言で云へば、宇宙の意志と吾々の意志とが合體する、其の關係が宗教である。其の合體が善であり、是に合體せんとするのが理想の實現であります。佛教の無我、無差別と云ふのも、實は此の宇宙の意志と、人間の意志とが合體した事で、是が無差別である。是は卽ち死ぬるのでは無く、生きるのです。全體と共に生きるのであります。其の神は何であるか、吾卽ち宇宙と合體した所の我である。消極的に行つても、積極的に行つても、其所に行かれるので有ります。佛教が自力に依ると云ふのも、クリスト教が、他力に依ると云ふのも、大極はやはり同じです。つまり宇宙絕對と、自我との理想的關係是が善であつて、此の境界に入るのが、安心立命であります。例を引いて申せば、此の世界を支配して居る所の大法則を認めたのは、人類の大發見であつて、夫から世界の人類の態度が、全く變つて來た事は申す迄も有りませぬ。其の萬象を發見した功は誰に歸するかと云へば、是をコペルニカ

スと申したい。即ち彼に依つて、宇宙の眞の關係が解つたのである。夫迄は人智に衝突を來したのであるが、コペルニカスによつて、吾々世界の中心を見出だされたので有ります。世界を動かして居ると思つた所の我が地球は、却つて萬象の中心には非ずして、太陽の周圍を運行し、吾々も廻つて居るのである、月も星もさうである。其の太陽も亦宇宙の中心を廻つて居ると云ふ事を發見してからと云ふものは、人智が全く一變したのである。此の關係が解つて始めて、宇宙の關係が解り、大法則が解る樣になつたので有ります。丁度是と同じ事で、今迄吾々の意志の關係もさうです。宇宙の大法則、道德的秩序は何であるか、理想的秩序、人生の價値、吾々の位地は、如何なるものかと云ふ事は、多くの宗教家、及び學者が知らむと勉めて知る能はざりし所である。コペルニカスの地動說は誰にも解し易いのであるが、吾々の心靈界に於て、其の關係を見出だす事は困難である。故に道德的法則も解らず、世界は全く暗黑でありました。

若しも、もつと早くから、吾々の意志の中心點が見出だされたならば、吾々はもつと早くすくはれたでありませう。然らば宗教界のコペルニカスは誰であるかと云へば、眞に卓見を以て、是を遺憾なく、人類に現はし、又夫を人間界に、實現したものは、イエス、クリストであります。クリストは、即ち宇宙の大中心點を顯はされたのです。

クリストの來らるゝ迄は、自己中心で有りました。夫迄の宗教は、悉く個人の欲望が、其の中心で有つたのです。其の祈は、悉く自我の欲望を滿足せしめ、自己の命の保存、自己の未來の救ひを求むる事、猶一層低きは自己の病氣の癒されん事、親兄弟の救はれん事、自分の家の繁昌せん事、自分の國の盛んにならむ事、即ち悉く己の幸福に關する欲望で、所謂自我中心で有つた。先日或クリスト教牧師の話に、若しも此の世に神が在さなかつたら斯かる苦しい事は出來ぬ、未來と云ふものが無いならば此の奮鬪は出來ぬと云はれました。今日はクリストに從つて居る人で有つて、尙斯くの如き者が有る。クリストが血を流して祈をせられたのは、己の宗教を立てようとか、自分が死してから天國に入りたいとか云ふ事では有りませぬ。クリストの最後の祈は「汝の聖旨を成させ給へ」と云ふ事で有りました。神の意志、宇宙全體の意志の行はれるのは、即ち我が目的であるとの意味であつて、我が意に神を從はしむるに非ずして、全然神の意志に從はんとせられたのである。佛教は自我を中心として、無差別に入り、クリスト教は凡ての意志を合して、無我に入る。此の關係が明らかになり、始めて眞の善に達する事が出來、安心立命の立場を見出だすことが出來ます。

今年の卒業生の中に、櫻楓會は自分の宗教である、是によつて生命を得る事が出來る、と云ふ人が有ります。是も積極的の方を云へば、櫻楓會と自分とが、理想的の關係を有して居るのである。

櫻楓會とは何で有るか、理想的社會で有つて、又凡ての意志の合體したもので、所謂宇内的で有るから、是は Humanity Divinity である。故に是は、宗教と云ひ得るのであります。宇内の法則と、人間の意志とが合體して、實現せられつゝあるので有る。其の實現は活動である。生命である。此の櫻楓會を宗教にする人は、其の關係ある女子大學、日本、東洋、世界、宇宙に於て、我が意志は實現せられつゝあるのです。若し、我が意志が、宇宙の意志と合體して、實現せられつゝあるならば、毀譽褒貶などは少しも意とする所でない。又父母兄弟も全體に關するものとして、是を愛するのである、換言すれば、衝突なき、統一せる愛を以て、凡てを支配する事が出來る樣に成るのである。若し吾々が此の中心點を悟りなば、煩腦は消えて菩提に入り、死は命に入る事となり、少しも恐るゝには足りないので有ります。未來が有るとか、無いとか、靈魂不滅とか云ふ事が問題となるのは、未だ自己が中心で有るからである。

そこで先づ、消極からでも、積極からでも善いが、我が儘の自我を消滅し、其の欲望を滅却する事が必要です。所謂無私になる事、無差別となる事が大切である。けれども是は、死して死ぬるのでは無く、死して生きるのであります。主觀と客觀と合體し、初めて佛教に云ふ、斷迷根の境界に入る事が必要である。此の境に入つて始めて、眞の自由を得る事が出來、眞の命が發生するのです。

無我になつたと云ふのは卽ち神に合體し、此理想に服從するのである。言葉を換へて云へば自分を捧げるものが出來、犧牲になる事が出來たのである。夫は他のものと合體して、宇宙の法則の中に入り、理想的關係を持つたのであります。

次に起るのは實現で、理想實現も意志の調和も同じ事です。卽ち無我無心より蘇生して、積極的の態度を以て進む事は、クリスト教も佛教も同一である。此所に至つて吾々の行ふ事考ふる所に、少しの爲りなく、少しの矛循もなく、專心一事を貫く事を得て、全身是愛、總身是義、渾身是忠と成る事が出來ます。斯かる人は、事を爲すに當つて、人を恐れず、卑まず、嫉みもなく、怨みもなく、死に瀕するも狼狽する事なく、至誠を以て他に交はり、時に應じ物に接する毎に適宜の態度を以て、事に處する事が出來るので有ります。故に佛教に依るも、其の意志の調和を完ふして、此の境界に入る事を得るので有る。

佛教の方で、阿字は大日如來の本性であると申します。其の大日如來とは、入々個々本具の自性とある。是を絶對より云へば、萬象は悉く阿字の當體故に萬象卽ち阿字と云ふ事も出來るのです。無我になるとは、宇宙の秩序に合體するのである。佛語には夫が法性等流と云はれて有つて卽ち吾々には皆銘々の位地があるから、其の位地に居るのが人生である。さうして其の間には、少しも等差はない、差別はない。鳥は空を飛び、魚は水に游ぎ、人は直行し、獸は横に歩むと云ふ事は、卽ち宇宙の秩序に合體して居るので有る。然るに人が横に歩まんとし、魚が空中遙かに翔らんとするが如きは惡であります。是と同じく吾々は凡て宇宙に合體して居るから、人の位地を羨み、他の場所を侵さんとするが如きは、又惡であり、禍の本である。故に各々其の境遇で宇宙の秩序に合體しようと云ふのが、所謂法性等流の現象であります。夫で、クリスト教、佛教、孰れより入るも、其の無差別の境界に入つて安心立命を得るのは皆同一であるが、消極積極の兩方面を具へて進む事が必要である。佛教は厭世であり、クリスト教は樂天であると云ふと、正反對の樣であるが、孰れも眞の目的に達すると一つである。故に互に、相助けて進む事が必要であると云ふ事は、明らかであります。そして、吾々の是非得なければならぬ事は安心立命である。眞の意志の調和を得て眞の生命を得る事が肝要であります。

若し吾々が眞の中心點を見出だして、其所に到達する事が出來たならば、如何なる境遇に陷つても、如何に諸子の意志が行はれなくても、其の間に迷ふ事なく、止まる事なくして、意志を滿足させる事が出來ると思ひます。又實力が足りないとか、研究が出來ないとか云ふ樣な心配は、皆無くなるのです。是は凡夫でも出來るのである。其所迄行かなければ、教育を受けても無効である。

夫で此所に道は三つ程有ります。消極に向いて諦めるか、積極に向いて滿足するか、或は厭世主義を土臺として作れる樂天主義の上に成れる、改善主義によつて、飽く迄奮闘し、大我に合體し、理想に合致して、其の大意志を發展して行くかである。卽ち卑しき我は去り、其の眞我大我所謂我を離れて自由を得たる無私の我を以て事に當る所の改善主義によつて、吾々は眞に命を得る迄進まん事を希望致すのであります。

（「花紅葉」第三號・第三學期實踐倫理並びに櫻楓會例會講話）

櫻楓會の現實

幹事の報告に初まり、研究委員及び來賓の御話もあり、學監

からは懇々と御注意がありまして會員の爲の食物は最早充分であるのみならず、私が申さうと思ふ事は同じ意見であるから、此の上私が時間を使つて申す必要も有るまいと思ひますけれども、第三回卒業生と御別れする時も近づいて居りますから、今日の櫻楓會の現實は如何なるものであるか、相互に是を認めてそして御別れをしたいと思ひます。故に今日現實の櫻楓會の生命を一言申して置きませう。然しかゝる事は到底理屈ではわからぬと思ふ、故に私は自分で經驗した處から、櫻楓會の生命は是だけ出來たと云ふ事を申し度いと思ひます。

今日は幸に内の方ばかりで有りまして、何を申しても少しも私の言葉を誤解する方はないと思ひますから、眞の命を自覺なさる爲に、極く解り易い例を引いて御話しようと思ひます。私は此の頃三十年來無い經驗を致しました。それは私の眼から涙が零れるやうになつたと云ふ事です。從來私は感情が無いではない、隨分感激する事もありましたけれども、嘗て私の眼から涙の零れる事はなかつた。其の涙の出ないのは私の子供の時の教育が然らしめたので、之は最も心服する父親の躾けである。父は度々不幸にも遇ひましたけれども涙は零さなかつた。私が池に落ちて、死にかけて蘇つた時にも、父は涙を流さなかつたのみならず、一言も云はなかつたさうである。又私の弟が死にました。報知の來たのは父が死ぬる廿日前で、弟は養家で死にましたが、父は此の報を聞いた時、丁度床に就いて居ましたが、着て居る蒲團を一寸顔に掛けたのみで、眼を沾す事も無かつた。私は其の時非常に感に打たれたのである。私は直ぐ樣行つて、ひどい熱病の爲に、眞黑な顔になつて死んで居る弟の顔を見ました。士がかう云ふ時に泣くものではないと決心したけれども、どうしても制する事が出來なくて涙が出るばかりか、聲を發して泣きました。其の後廿日ばかりして父がなくなりました、が其の時は既に決心する所あつて一滴も涙を出さなかつた、かう云ふ昔の武士風の教育を受けましたから、涙を流した事はなかつた。然るに此の問本校の或生徒に關したものを讀んで居て覺えず知らず涙が出ました。

今一つは、是迄文藝を見ても涙を流した事は無かつたが、一昨日一寸文藝會の下稽古を見て感涙を零しました。是は男子の恥づべき事であると思ひ、或は病氣の爲でもあらうかと思ひましたが、今私は左程腦が惡いでもないが、能く考へて見て其の理由を發見したやうに思ふ。卽ち、私の心は三十年來張り詰めた弓であつた。今日私はその張り詰めて居た弓を少しく弛めて安心する事が出來るやうに成つた。然し決して油斷をしたのではない。學校は昨年財團法人にもなり、櫻楓館も出來、教育館

も出來て、先づ根は出來たのである。其の他嬉しいことは幾度もあつたけれども、眞に私の眼から涙が出ると云ふ事は今迄なかつたのである。私は嬉しい事があればある程氣が張り詰めて、將來益々なさねばならぬ事が目に見えて來るのである。けれども此の頃に至つて最早出來たと感じたのが、涙を禁ずることが出來ない所以であります。卽ち年來希望して居つた芽が、一寸ながら萠したと云ふ事である。廣岡さんも云はれたやうに、二葉であるけれども、之は生命である。之が私の心に大層嬉しく感じた故であります。卽ち是は宗教の命である。尤も本校は、宗派には關係しない、迷信には陷らないのである。教育と、宗教と違ふ事は初めから申しました。然し本校の教育は、宗教的生命に迄進むのであると、初めから公にしまして、其の後いろ〳〵其の目的に達する爲に、苦心慘憺しましたが、中々其の効果が顯はれませんでした。然るに其の芽生えは、漸く此の頃現れたと云ふ事である。先日私が宗教と云ふ事を說きましたから此所に御出の方にはわかるであらうと思ひますが、殊に今年の卒業生の中には、是を生命として居る人があると云ふ事を見ました。私が此の間何故或物を讀むで涙が出る程感じたかと云ふと、此の間申しました所の點、卽ち全體意志に達した人があつて、其の人の心の眞の動機に感じました。實に我が校の中に眞の生命ある人が出來たと云ふ事を感じましたからです。又何故一昨日文藝會を見て涙が出たかと云ふと、此の文藝會は、千何百人と云ふ人の傾向に關する事であるから、私は、從來皆さんに任せて置く事は出來ませんでしたけれども、此の度は全く皆さんの自動に任せたにも關らず、其の仕方は拙いけれども、確かに皆さんが、略ぼ其の意を得たのは、日頃我々が、是非達せしめようと勉めた精神を得たからである。諸子は、昨夜遲く迄少しも人に見えない所で、仕度をして御出になつたが、私にはわかつて居る。又何をするにも、皆が全體の爲にするのである、自己中心と云ふ事は少しも無くなつたのである。之を極く具體的に申す事は出來ませんが、私は確かに其の實を見て申すのであります。

それから、此の席に御出になる、森村さんとか、廣岡さんとか三井さんとか云ふ方々、或は本校の賛助員諸君の中には、明らかに具體的に申す事は出來ませんが、本校との間に確に宗教的連鎖が出來て、一層强く團結して、世の爲、人の爲に盡し行くやうになりました。

此の宗教的關係とは、丁度彼のコペルニカスが地球の中心を見出して、宇宙の凡ての關係が分つた樣に、自己中心と云ふ事を離れて、全體の關係がわかつて來た事である。幾ら親しい者

でも親子の中でも夫婦の中でも、必ずしも斯かる關係は得られないのであります。森村さんや或發起人の方が云はれた樣に、世の中に出て見ると自分の理想と合はぬ點があると云ふ事は、櫻楓會員の中にも、同じ感じを持つて居る人がありませう、それはさうあるべき筈である、卽ち一方に或者と合體して來たからである。此の融合した所の理想を實現するには、社會の人との衝突も免れない、又敢て從はれない點もありませう。諸子の中で、確に此の生命に融合したと自覺のある人は幾ら困難があつても、不撓不屈の精神を以て、理想を實現しなければ止まぬと云ふ決心が出來たと思ふ。若しも今日其の自覺の無い人ならば、將來理想を實現する事の出來ない人であります。今日は時がありませんから、只一言諸子の問に答へて置きたいと思ひます。吾々が凡てを捧ぐべき所のものは、神と云ふも佛と云ふも敢へて差支へないが、其の吾々の仕ふる處のものは、クリスト教や、佛教徒の云ふ信條に關するものでは無く、此の間申しました所の、宇內化したる Humanity 所謂 Divinity の事である。語を換へて云ふ時は、我々は、人類全體に捧げるのである。假令宗教家であつても、己の幸福、己の未來、己の骨肉の爲に、神に仕ふるといふ事は、やはり自己中心である。吾々の信ずる處は、自己中心を離れて凡ての物を捧げて仕へようと云ふのである。其の神は、決して天に懸つて居るのでもなく、地から湧いて來るのでも無く、今此の中に在るのである。而して誰も之を認める事が出來るのである。其の中心點が變ると、凡ての事が變つて來るのである。之を指して生れ更ると云ふ。斯く全體の關係がわかつて來ると、諸子が社會に出て如何なる困難に逢うても變る筈はない。困難に遇へば遇ふ程、力を得て來るのである。是は不斷の泉である、不朽の光である。之が私の申す所の芽であり、生命であつて、私共が櫻楓會員と共に、涙を流して喜ぶ所以である。之がわかつたならば、何も苦しむ事はあるまいと思ふ。諸子が國へ歸つても、却々お母さんの考へと丁度合ふと云ふ事はあるまい。夫婦の間でも親類の間でも、合はない事は澤山ありませう。然し其の生命を持つて居るならば、合はないのが當然である。合はないからして、始めて研究心が起り、忍耐も出來、工夫も起るのである。諸子が櫻楓會の精神を得たならば、却つて世間との衝突は免れないのである。諸子が結婚をしても、九十九人迄は諸子の望むやうな、夫婦の關係は決して得られまい。又眞の幸福に滿たされて夫を感化し子供を教育して行く事も容易に出來難い事であらうが、櫻楓會の精神に依つて生きる人は夫が死なうが親子の間に苦しみがあらうが、それによつて少しも意志を失ふ事は無いのである。何處に

行つても、如何なる事が起きて來ても、常に己の天職を果すのである。此の間諸子の中から成る程其の宗教的生命はわかりましたが、少しは形式も必要ではありますまいか、我々の宗教には何か信條がありませう、どう云ふ信仰箇條がありますか、と問ふ人があつたが吾々にはさういふ者は無い、只吾々は四海兄弟主義を信ずる、即ち人の爲に仕へると云ふ事である。シヤフツベリー伯の額に掛けられた所の Love and Serve 即ち愛と奉仕と云ふ事が、吾々の信仰個條である。森村さんの貿易事業を善くしようと云ふ御精神も、國家の爲に、又人類の爲にすると云ふのであるから、やはり宗教的である。吾々櫻楓會も亦宗教的である。故に此の中に誰一人として、自分の名譽を得ようとか、利益を得ようとか、又は誰が上にならうとか、下でいやだとか云ふ事は無いのであつて、各々働いて行くのである、是が即ち吾々の信仰個條である。吾々の祭壇は、寮舍であり、家庭である。此の祭壇に如何なる物を捧げるかと云ふと、犧牲の精神である。此の頃中櫻楓會の役員は、誰彼の區別なく、全體を自分のものとして、非常にお盡しに成つたのである。それが出來て始めて全體意志を得たのである。是れは犧牲と云ふ捧げ物を以て、神に仕へて居る處の美しい心であります。吾々の宮は國家社會である。吾々の奮闘は、其の國家人類を進ませる事である。言葉を換へて云へば、理想を實現する事である。何故に理想を實現するには、奮闘を要するかと云ふと、多くの人は、未だ己の名譽、己の未來、己の子孫と云ふ自我中心である。其の反對の間に立つて和睦をさせるからである。此の困難を敢へてして世の救ひ主となる者は、誰であらうか。

クリストは仲保者なりと云つて居らるゝ。即ち自己中心と、全體中心との間に立つて、調和を計られたのである。釋迦も其の時代の精神と、理想とを調和せしめた救ひ主である。櫻楓會も亦理想と現社會との中に立つて、調和を計る處の仲保者である。即ち其の使命を全ふするには、蓋し非常な困難があるのである。故に櫻楓會の會員は、先づ己の心身を統一することはもとより、自我中心と全體中心との調和を圖り、社會全體をも轉じて、全體中心に化するやうに努めねばならぬ。斯く自我中心を去つて全體中心に統一して來たならば、實に宇宙の目的に叶ふのである。それに達するのが吾々の目的である。櫻楓會に此の尊い萠芽を萠したと云ふ事が、私の最も喜ぶ所でありますけれども、打ちやつて置いてはならぬ。吾々は同心協力、犧牲てふ鋤を執りて、何處までも此の萠芽を培ひ育て、實を結ばせて、世の進化に貢献せねばならぬ。

（「花紅葉」第三號・櫻楓會大會）明治三十九年四月

第三回卒業式告辭

今日は此の新講堂に於て本校に最も關係深き來賓諸君、並びに父兄保證人諸君の御列席を戴きまして、大學部第三回並びに附屬高等女學校第五回の卒業證書授與式を擧行する事を得ますのは吾々の深く喜ぶ所であり、また最も光榮とする所であります。

今日は大學部卒業生に對し、また附屬高等女學校卒業生に對して、別々にお話する筈でありますが、到底時間が之を許しませぬから、御一緒にして御話する事に致したい、そのつもりでお聞き下さるやう願ひます。

先日あなた方に三つの問題を出しました。其の第一は今回の卒業生は、如何なる事を成し遂げたのでありますか、第二はあなた方が本校全體に先導者の地位に立つて、如何なる事を全體の爲に仕始めてお置きになつたか、第三はあなた方は本校全體の傾向に對して如何なるものを貢獻する所があつたか等でありました。若しあなた方がお出しになつた其の答を總括したならば、本年の卒業生は如何なるものであるかといふ意味が、明らかにせらるゝであらうと思ひます。私は其の答を調べて分類し、其の材料に私が實驗したものを加へて、此の三つの問に答へて、本年の卒業生の意味を明らかにし、後にあなた方の將來の事に就いて一言申したいと思ひます。

此の問題は三つであるが、其の答は一つになる。卽ち何を仕遂げたかといふ事と、何を仕始めたかと云ふ事は同じである。また何を全體に貢獻したかと云ふ事と、あなた方が全體から何を受けたかと云ふ事は同じであります。

あなた方が此の學年にお仕遂げになつて、此の度學問の仕上げをして、卒業なさるといふ事は本校の主義として度々申し上げた樣に、決して仕上つたのではなく、之から始めるといふ事で、今年あなた方が、一致共同してお拵へになつたものは、未だ出來上つて居るものでは無い。又其の出來たものは、本年の卒業生丈けの力によつて出來たものでは無い。無論本校の先導者の地位に立つて居らるゝから、あなた方の時代に出來たものはあなた方の力に依つて出來たものと云はるゝが、一方には第一回第二回の卒業生、並びに寮監卽ち本校全體が、一致共同して、本校の爲に一進歩を來したに過ぎない。この一進歩を得たといふのは、如何なる事かといふ事に答へるには其の前の關係を一言申して置かねばならぬ。

只今大隈伯爵閣下よりもお話しになりましたやうに、本校が

創立されて滿五年になります。其の創立の時には、渾沌たるもので、其の中から第一回卒業生は、漸くにしてこれを一つの有機體とする事が出來て、僅かに感情的生命を拵へる事が出來ました。故に私は第一回卒業生に對して感情的生命を作つたものといふ事が出來ます。其の時代は感情的時代である。換言すれば、全校感情の融和を形づくつたのである。故に第一回卒業生の出づる間際には、非常に全校燃え立ちまして、或人は之を評して恰も宗教のリバイバルの如きものであると云はれましたが、適評であると感ずるのであります。第二回の卒業生は知の調和をなしたのである。之は抽象的の時代で、此の時に於ては文學と道德、宗教と科學の衝突ともいふべきものがあつて、多くの疑問に苦しみ、矛盾に惱んで文科と家政科、或は文藝と道德といふが如き衝突を起して參りました。この時代は非常なる奮鬪の時代であり、思想の戰爭の時代でありましたが、第二回生は大なる勝利を得て、文學と道德、科學と宗教との一致調和を計り、理性と感情との戰に於て理性が大勝利を得て、凡ての思想を統一して、一致結合の裏に第二回卒業生を出す事が出來たのである。第三回の卒業生は感情と知性との調和を得て、各々圓滿なる意志を發達する事が出來ました。其の意志と意志とが結合して、各級の意志となり、各寮の意志となり、各研究部の意志となり、各團體の意志となり、其の意志は結合して、遂に全體意志を作る事が出來たのである。此の全體意志とは如何なる事を申しますか、これは私が先日櫻楓會に於て申した事によつてお分りになりませう。

またあなた方が此の一年間、意志の感化を多勢に及ぼした事は明らかである。今年の卒業生の勉めた事は意志の調和であります。第一回第二回の卒業生並びに寮監が三百餘名の新入生（大學部一年）を、本校の主義方針に同化したのは全く意志の働きであつた。三年生が傾向係を置き、全體の意志を早く同化せしめられたのは、悉く意志の結合を示すのである。此の結合は恰もこの教育館、圖書館の建物のやうなものであります。石やら、鐵やら、煉瓦やら、各團體は集り、其の間はセメントで堅く結びついて居るから、火にも、水にも、嵐にも破壞せられぬ永久的の建築が出來た如くに、櫻楓會並びに本校全體の結合は、意志の結合となり、强固なる全體意志を作り上げる事が出來たのである。これが卽ち、私が本校の卒業生に對して、最も滿足に感ずることである。またあなた方とお別れするに當つて、安心して社會に御紹介することの出來る所以であります。併し前述の如く、出來たと申しても、出來上つたのではないので、吾々は今後益々この意志を擴大し、この意志の感化力を增

し、この意志の價値を高めることに勉めねばならぬ。それで私は如何にこの意志を擴大し、如何に此の意志の感化力を發揮し、如何に此の意志の價値を增す事が出來るかといふ事に就いて、一言申して置きたいと思ふ。先づ第一に如何にして吾々の意志を擴大することが出來ませうか。擴大といふ事は意志に對して餘り面白い言葉ではないが、度量を廣くすると云つても、場所を擴げる意味ではないと同樣に、吾々の意志を大きく重くして行くには、如何にせば宜しいかと云ふ事であります。これを一言で答ふれば、吾々は有らん限りの力を盡して、吾々の今持つて居る意志を擴大するには、度量が狹くてはいけぬ。出來得る丈け多くの人の意志を吸收して、我が物として進むのである。これは吾々が得たる昨今の經驗を顧れば其の意志が分ると思ふ。我が國民が過ぐる二ケ年程、國民的意志を擴大した事はありますまい。卽ち其の原因は我が國の意志とロシアの意志と衝突したのである。其の結果として我が國民の意志とアングロサクソンの意志と合體したのである。これは神功皇后の意志、豐臣秀吉の意志、其の後我が國に發達した大和魂といふ國民の意志がアングロサクソン其の他世界各國に現はれて居る意志と結び付いて、斯くの如く驚くべき擴大を來したのであります。我々は獨り我が國の神功皇后、豐臣秀吉、楠正成、新田義貞といふやうな人々の意志を我が意志に加へて擴大したのみならず、ワシントンの意志も、ネルソンの意志も、コロンブスの意志も、世界各國に光輝を放てる立派なる意志を加へたのである。此の時に當りまして、森村豐明會—既に貿易の爲に斃れられて、亡き人の數に入つて居られた、然れども其の意志は猶殘つて居る、其の意志が中心となつて組織せられて居る所の豐明會—の意志に、我が日本女子大學の意志を加へ、其の中に一致を見まして、益々其の意志が强大になる事が出來ました。

此の意志の擴大は、決して時間、又は場所によつて制限を加へらるゝものではありません。吾々は世界萬國の意志にも關係を有したのみならず、今後幾千年後の意志にも加はつたのである。卽ち教育館の親石の中に、本校の意志及び豐明會の意志を書き入れたので、これは幾千年の後にもこの意志を傳へんが爲である。

本校の關係者諸君と結びついてこの學校を起して居るのは、今後百年の爲では止まらない、三百年の後に起らんとする禍を防ぎ、また其の幸福を計らんが爲である。第二、第三の國民を教育せんが爲に務めて居るのである。卽ち今後三百年、五千年後の意志にも、吾々は今日から關係を持つて居るのである。斯くの如く昨年といふ年は本校の意志の發達の上に、非常なる好

時機であつて、いろ〳〵の尊い意志に接し、之を加へる事が出來て、益々吾々の意志を強大にする事が出來たのであります。今後吾々の勉めねばならぬ事は益々この意志を強大にする事である。

今一つ意志を強大にした事は、昨年起つた宗教問題である。之を解釋するに當つて、吾々は遠くクリストの意志、釋迦の意志を加へたのみならず、孔子もソクラテスも、近くはカントもコントもスピノザも、ダヰウン、スペンサー等の意志にも悉く接觸して、世界の意志を加へ、統一して、吾々の所謂、絶對意志、或は全體意志ともいふべきものを形づくつたのである。これは丁度コペルニカスが天體を觀察して遂に宇宙の系統を發見した結果によれば、地球は宇宙の中心ではなくて、太陽を中心として凡ての物が運行して居るのであると云ふ、眞の中心を發見した如くである。吾々も吾々の中心は自我中心に非ずして、全體中心或は絶對的中心である。吾々が小さい個人的意志によつて、決して滿足の得らるゝもので無い事を發見したのである。斯くの如くして吾々の意志は次第次第に擴張して參つたのであります。この意志を擴大するといふ事が、今後あなた方の爲に最も必要なことであります。如何となれば、この意志を擴大した事に依つて吾々の關係が益々完備して來たのである。

今日この滿堂の諸君には、我が學校にあるこの意志に一致なさる事の出來る方が多からうと思ひます。斯くの如きお方の意志は、日々擴大されつゝあるのである。其の意志を持つて、比所に臨まれた方は、吾が校と喜憂を共にする事が出來るのである。本校の主義に趣味を有する方である。全體の爲に活動する事が出來るお方である。斯かる人は、かういふ會の時に、誰も見ぬ所で全體の爲に働き、全體の爲に盡すといふ、愛校心がこれから起るのである。即ち全體意志によつて養はれるのである。誰もこの意志無しに、この堂に會する事は出來ぬでありませう。獨り吾が學校のみならず、吾が國家のみならず、世界各國の事に興味を感ずるやうになるのである。第一この意志を擴大するものは凡て人類を愛するやうになるのである。誰を見ても悉く兄弟姉妹の如くなるのである。凡て一家の感情を保つやうになる、世界は皆兄弟である、人の難儀も、幸福も殆ど己のものと同じやうになるのである。これが凡ての事に興味を有して來る根本であります。此の意志の擴大に勉めずして、趣味を大きくする事は出來ぬ、之をよそにして、あなた方の進歩は出來ぬと私は信ずるのである。この意志の擴大に勉める人ならば同時に柔順になるのである。如何なる場合にも操を守り、德を完ふして進む事が出來るのである、如何となれば吾々の擴大は

次第々々に自己中心の意志を狭くして、全體の爲に、無私とか、無我とかいふ境界に入る事が出來る。故に私共は喜んで、人の意志を容れる事が出來、素直に人の說に從ふ事が出來、誠に柔順になる事が出來るのであります。之と同時に、柔順なる、熱心なる、圓滿なる家庭の人となり、人類の一員となり、何事によらず、善い事なら喜んで人と協力し、人と和する事が出來、何事にも人の愛する柔順の德が自然に現はるゝやうになるのです。故に私はあなた方が枝葉の事に心配せず、この意志を擴大するといふ根本の事に勉められん事を希望致します。之は一日も忘れてはならぬ事であります。

第二には如何にして意志の感化力を增大する事が出來るかといふ事であります。御婦人方は最も情緒に富み、最も感情の强いものである。故に感情によつて人心を感化する事が出來る、之は御婦人の賜であるが、夫れのみではいかぬ。感情は無論必要な事ではあるが、それのみで決して世を救ひ、社會を改める事は出來ぬ。人々の意志の態度を變ぜしむる迄にならねばならぬ。第一回第二回の研究科生達が、三百餘人の新入生を我が校の主義に同化した事は意志の感化力であつた。其の中には人の感情を害する事もあり、其の爲に人望をおとす事もあつたが、そのやうな事には少しも拘らず、其の人の心の中に立入つて、根本からかへねば止まぬといふ意志の働きでありました。第三回生の爲さつた事も、意志の感化力であつた。是が大切です。あなた方が社會にお出になつても人の前で氣に入るやうな事をいひ、其の日其の日の家庭の調和を計る丈けでは決して眞の調和は得られぬのである。其の喜びは霧の如く、今咲いて居る櫻の如くである。これは瞬く間に消散する事であります。其の人の意志の態度が變らなければ到底、其の人の病氣は癒されないのである。あなた方の今後勉むべき事は、其の意志に當つて、其の意志の同情を得る事であります。日本の柔順は、支那人の柔順の如く、手を縛り、足を縛り、自由を束縛する事であると思つて居る。これは間違ひで、眞の柔順は意志の自由を有する柔順である。あなた方は選擇の自由を得、眞の柔順によつて、感化を有する人として世に立たねばならぬ。之は戰である、奮鬪である。けれども人の命を奪ふのではなく、活かすので、又救ふのであります、吾々は個人的の意志と、全體的の意志との間に立つて、調和を計るのである。家を救ひ、此の世を救ふには負けても勝つのである。さうして多くの人に意志の感化力を及ぼすのであります。

第三には如何にして意志の價値を高めるかと申しますれば、卽ち意志の實現に依つて、意志は高まるものである。進步發達

を遂げて、始めて意志の價値は現はるゝものである。感情の宗教は厭世的であり、樂天的である。吾々の宗教は意志の宗教である。メリオリズム（改善主義）と云ふ事を前に申した事があります。宇宙の進歩は只自然に出來るものではない。社會の進歩は只偶然に出來るものでは無い、人類の意志の進歩によつて出來るものである。卽ち成る可く眞理を發見すると云ふと大きい詞であり、研究といふと大きい詞ではあるが、あなた方には誤解は無い筈である。常に此の眞理を見出し、美術を創始し、道德宗教を進化し、人類の安寧幸福を增加し、理想を實現する事が、意志の價値の發見である。あなた方がこれを勉めて止まねば、今日學校を出ても、退歩しはすまいかと云ふ心配は無いのである。實地に當つて困難に苦しむ事は無いのである。如何となれば、此の意志が働いて居るならば、此の意志が價値を現はして居るならば、事の原因と結果との一致を見なければ止まぬ。卽ち事の原因と結果とを合體せしめねば止まぬのである。若しも身體が病氣になるならば、一家の調和が保たれぬならば、國家が亂れるならば、それは如何なる原因によるのであるか、其の原因をつきとめて、之を改めて結果と一致せしめねば、意志は一日も其の働きを止めぬのである。其の他は學生に常識が乏しいと云ふ事を憂ふる人もあるが、此の意志の價値は其の目的と方法とを見出して、一致する事に依つてあなた方の意志の發展を見、意志を實現する事が出來るのである。之によつて常識も發達し熟練も出來るのである。其の他道德にしても、必ず吾々の行爲の原因たる目的と一致しなければ止まぬのである。あなた方の意志の價値を認むるならば、常に進歩發達といふ事があなた方の狀態となるのである。

私は今年の卒業生を送るに當つて、あなた方の働きによつて此の全體意志を得た事を喜ぶと同時に、今後益々此の意志の擴大に勉め意志の發達を計り、意志の價値を顯はす爲に、意志の感化を及ぼすと云ふ事に勉めて、益々進歩發達して生涯止まぬと云ふ此の決心を以て校門を出で、鄕里にお歸りになつても、國の遠近、時のへだゝりに少しの關係無き意志の結合を以て、限りなく本校と連り、意志的關係を持つて、お互の間に充分意志の結合を計つて進みたいと思ひます。只今の結合たるや、誠に微弱なものでありますが、此の意志の結合の出來たと云ふ事は盤石であります。吾々は今後益々奮鬪して進みたいと考へます。

（「家庭週報」第五十七號）明治三十九年四月